

教育関係共同利用拠点

「国際連携を活用した大学教育力開発の支援拠点」

Joint Educational Development Center

“Educational Development Core in International Cooperation”

2012 年度 教育関係共同利用拠点事業報告書

Joint Educational Development Center Project Report 2012

東北大学高等教育開発推進センター
大学教育支援センター

Center for Professional Development (CPD)
in Center for the Advancement of Higher Education (CAHE)
Tohoku University



目 次

1. 教育関係共同利用拠点「国際連携を活用した大学教育力開発の支援拠点」について	3
2. 2012 年度活動報告	3
2-1. 計画の目標及び運営の基本方針.....	3
2-2. 組織運営に関する目標と実施状況及び課題.....	4
2-3. 学内外への宣伝・広報.....	4
2-4. 調査研究活動.....	5
① 大学・短大教員のキャリア形成と能力開発に関する調査研究	
② 大学の組織運営とマネジメント人材育成に関する調査研究	
③ 大学教員準備プログラム調査研究	
④ 教育・学習マネジメントに関する調査研究	
⑤ 知識基盤社会におけるアカデミック・インテグリティ保証制度に関する国際比較研究	
⑥ 大学教員による授業準備に関する調査	
⑦ 大学教育における震災ボランティア支援のあり方およびその教育効果に関する調査研究	
⑧ アカデミックライティング	
⑨ 新しい教育方法・学習環境に関する調査研究	
2-5. プログラム開発・実施.....	8
2-5-1. 大学教育力開発（特色ある教養教育内容開発）（2012 年度実施分）	8
2-5-2. 東北大学 大学教員準備プログラム（Tohoku U. PFFP）	8
2-5-3. 東北大学 新任教員研修プログラム（Tohoku U. NFP）	10
2-5-4. 大学教育マネジメント人材育成プログラム（EMLP）	12
2-5-5. 大学職員能力開発プログラム（SPD）	13
2-5-6. PD セミナー	13
2-5-7. PDP オンライン.....	14
2-6. 研究成果の発表・出版.....	16
2-7. 他機関との連携.....	17
2-8. 2013 年度以降の課題.....	17
3. 参考資料.....	21
3-1. PDP（専門性開発プログラム）	21
3-1-1. PD（専門性開発）分野一覧.....	21
3-1-2. PD セミナー実施一覧.....	22
3-1-3. PD セミナー参加者アンケート結果.....	35
3-2. CPD 教員組織.....	67
3-3. CPD 教員の活動.....	69

1. 教育関係共同利用拠点「国際連携を活用した大学教育力開発の支援拠点」について

東北大学高等教育開発推進センターは、2010年3月に教育関係共同利用拠点の認定を受け、2年間の事業を推進してきた。2010・2011両年度の活動をふまえ、2012年度は、①組織開発と教職員個人能力開発の2つを柱に、②大学教員の専門性を4ゾーン14カテゴリーに区分して包括的な専門性開発プログラムを提供、③キャリア・ステージに対応して、大学教員をめざす院生向け大学教員準備プログラム（Preparing Future Faculty Program; PFFP）、大学のこれからの担うフロント・ランナーとしての新任教員プログラム（New Faculty Program; NFP）、組織を変えるイノベーターを育成する大学教育マネジメント人材育成プログラム（Educational Management and Leadership Program; EMLP）、大学教育の運営力を高める大学職員能力開発プログラム（Staff Development Program; SDP）の4つのプログラムを提供した。

また、今年度は、定型化したプログラムに加えて、他の教育関係共同利用拠点、大学 IR コンソーシアムなどとの連携を強め、全国的な普及に努めるとともに、中間年として、事業実施に継続的な協力を得てきたオーストラリア・メルボルン大学、アメリカ・カリフォルニア大学バークレー校の専門家を招聘し、事業全体へのコメントを依頼することにした。

18歳人口の減少に伴う定員割れなど、大学教育にもたらす負の要因と同時に、大学教育の質保証の確立など、我が国の大学教育の課題は多い。教育改善と教育改革の促進に寄与するために、2012年度の活動を評価・点検し、2013年度の活動方針を策定したので、ご検討・ご助言をお願いしたい。

2. 2012年度活動報告

2-1. 計画の目標及び運営の基本方針

- (1) 3年目に入り、次のステージを視野に入れ、拠点のコンセプトを明確にし、高等教育開発推進センターによる日本型プログラムの実施を進める。
- (2) 高等教育開発推進センターの第2回外部評価をふまえ、同センターの将来構想を支える事業を推進する。
- (3) 特に、取り組むべき重要課題は次の通り。
 - ① 専門性開発プログラム（Professional Development Program; PDP）を、キャリア別、主題別に区分し、組織改革（教育・学習マネジメント）と人材育成（教職員の能力開発）とを統合した大学教育力開発のコンセプトを明確にする
 - ② 履修証明プログラム制度の設計を行い、2013年度から実施できるように準備する
 - ③ PFFPは、理学・工学・文学など伝統的研究科の参加を促し、更に改善を図るとともに、今までの成果を反映した日本型プログラムの試案を作成する
 - ④ NFPを新たに試行・実施し、海外派遣を拡大する
 - ⑤ EMLPを改善し、持続的に海外派遣を実施する
 - ⑥ 組織改革と人材育成を統合する各分野での教育力プログラムの開発・実施を進め、2012年度は、語学教育の集中的ワークショップを行う
 - ⑦ 昨年度撮影したPDPを含め、動画により、オンデマンドでプログラム提供を行う
 - ⑧ 広報宣伝を改善し、利用者を拡大する
 - ⑨ 他の教育関係共同利用拠点及び放送大学 ICT 活用・遠隔教育センターとの連携を強め、調査

研究・研究開発・プログラム提供の能力を高める

⑩ 次期5年間を見据えた調査研究計画を策定する

2-2. 組織運営に関する目標と実施状況及び課題

(1) 目標

- ① 現有の教職員組織で、業務量のバランスを図り、事業の質向上を実現する
- ② 研究開発員・共同研究員の増員を図る
- ③ 大学教育支援センター定例打合せ、コア会議、部門長会議などの効率的運営を図る
- ④ 東北大学内部局、大学の国際化のためのネットワーク形成推進事業（G30 事業）、他教育関係共同利用拠点との連携を図る

(2) 実施状況

・**教員組織の整備** 新たな研究開発員としてコア会議メンバー、共同研究員の委嘱を行い、研究開発員 20 名（内、東北大学高等教育開発推進センター教員 16 名〔外国人教員 2 名〕）、イリノイ大学教員及びカリフォルニア大学バークレー校教員各 1 名、メルボルン大学教員 2 名を加え、共同研究員 10 名（内外国人 4 名）の体制となった（参考資料 3-2）。

・**事務体制の整備** 4 月から事務補佐員 1 名を准職員とし、支援体制を強化した。

・**組織運営の改善** 部門長会議による運営を基本とし（12 回）、コア会議は 4 半期ごとに開催し、全体的な意見集約と基本方針決定に重点をおいた。定例打ち合わせ（40 回）を開催した。6 月 15 日に共同利用運営委員会を開催した。

・**他組織との連携強化** 海外とは、メルボルン大学、カリフォルニア大学バークレー校、カナダ・クィーンズ大学と引き続き提携したほか、メルボルン大学、東北大学国際教育院及び G30 事業と連携して豪州首相日本対象教育支援プログラムの実施に取り組み、東北大学・山形大学・福島大学で国際共修や大学マネジメントに関するシンポジウム・セミナーを開催した。国内では、4 教育関係共同利用拠点及び広島大学高等教育開発研究センターと共同で、「大学の組織運営とマネジメント人材育成調査」に基づく研究を推進した。大学間連携共同教育推進事業「研究者育成の為の行動規範教育の標準化と教育システムの全国展開」(CITI Japan プロジェクト)と提携し、研究倫理セミナーを開催し、2013 年度に CITI Japan プログラム受講を PD プログラムに組み込む準備を進めた。大学 IR コンソーシアム（同志社大学他 12 機関）に参加し、教育情報に基づく教育改善についての情報交流を進めた。

2-3. 学内外への宣伝・広報

(1) 目標

- ① パンフレット類、ホームページを充実し、広報宣伝の改善をはかり、利用者を拡大する
- ② 教育関係共同利用拠点提供プログラムを案内するメーリングリストのシステム化を図る
- ③ 教育関係共同利用拠点活動における学内者の理解と認知度を高める

(2) 実施状況

・**広報物の作成** 「2012 年度プログラム案内」（日 10,000 部）を作成し、PDP 全体の構造と説明を併せたパンフレットとした。また拠点事業の全体像及び大学教育支援センターのチラシ、「PDP 2012 年度開講科目一覧」（全て日 10,000 部）を作成し、国内外における各種集会、セミナー、訪問調査等で活用した。

・**ホームページの活用** 2011年度に改修された高等教育開発推進センターホームページは、2012年度の一年間で訪問者数 32,000 人を超え、新規訪問者とリピーターが半々であった。閲覧状況から見ると、計2ページ程度の閲覧が多いことから、トップページでの印象が大きいと思われる。このことから、重点的行事の広報については大バナーを利用して行い、バナーの更新を滞りなく行った。また、大学教育支援センターホームページについては、各プログラム内容の充実、動画を組み込んだ広報を図り、ウェブによる情報発信を活発化させた。

・**拠点メーリングリストの改善** これまで通常のメールにおいて各種プログラムの案内をメールマガジン形式で提供していたが、拠点メーリングリスト自体をシステム化したことで、情報の配信及び利用者登録情報の一元化を図ることで、管理者側の情報提供を容易にし、かつ各個人が自主的にメルマガ配信への登録を可能とした。また、情報提供を登録者個人宛とすることで、登録者が登録情報の確認ができ、所属移動の際の情報変更を依頼することで、移動後も継続的に情報を得ることが可能となった。2012年度末時点での登録者数は 953 名であり、昨年度に比べ 2 割増となった。

・**ポスター等による情報発信** 個々のセミナー案内を都度異なるデザインのポスターによって情報発信した（参考資料 3-1-2）。

・**学内への広報** 学内に設置されたウェブ情報共有ツール「東北大学ポータルシステム」により、学内の教職員への情報発信及び各種セミナー等への広報を行った。学生への周知については、主に学内へのポスター掲示にて、プログラムの広報を図った。

(3) 評価及び課題

・**広報活動のさらなる改善と推進** チラシ・パンフレット類をプログラム別に作成し、必要に応じて対象者別にパッケージ化して配布可能とする。各キャリア別プログラムについては、募集用にチラシ作成を行っており、プログラムの継続的な広報手段として検討する必要がある。

・**ホームページのユーザー分析** 大学教育支援センターホームページのユーザー分析が未着手であることから、サイト分析アプリケーションを導入し、高等教育開発推進センターホームページとの連携により、より効果的な情報提供や広報を行う必要がある。

2-4. 調査研究活動

① 大学・短大教員のキャリア形成と能力開発に関する調査研究

2012年度に行ったのは次の2点である。(1) 報告書の出版・配布、(2) 学会誌への投稿。(1)については、東北大学高等教育開発推進センター編『大学・短大教員のキャリア形成と能力開発に関する調査』報告書、ならびに、同編『大学教員の能力—形成から開発へ—』（高等教育ライブラリ 7）の2冊が成果物として出版された。(2)については、日本高等教育学会の学術誌に投稿を行った（2013年5月に、立石慎治・丸山和昭・猪股歳之「大学教員のキャリアと能力形成の課題—総合的能力の獲得に及ぼす個別能力・経験・雇用形態の影響に着目して」（『高等教育研究』第16集）が刊行される予定である）。

調査事業としては終了するが、引き続き、大学教員の能力形成にかかる研究事業として展開することとなった。

② 大学の組織運営とマネジメント人材育成に関する調査研究

2012年4~5月に、全国公私立大学学長、部局長、学科長、専攻長、私立大学理事長、国立大学

副学長に送付し、2616/8980=29.0%の回収を得た（私立大学理事長 104/547=回収率 19.0%，学長 301/756=39.8%，国立大学理事・副学長 172/398=43.2%，部局長 597/2152=27.5%，学科・専攻長 1442/5136=28.1%）。2 回研究会を開催し、2013 年度には学会発表等で公表する予定である。

③ 大学教員準備プログラム調査研究

2012 年度には、京都大学高等教育研究開発推進センター、名古屋大学高等教育研究センターとの共催で「大学教員を育てる：入職前と入職後の能力開発」を 2012 年 12 月 17 日に実施した（『東北大学大学教員準備プログラム／新任教員プログラム 2012 年度報告書』参照）。本研究会の目的は、大学教員の成長プロセスと能力開発に関して、入職前の大学院における大学教員準備プログラムと入職後の新任教員向けプログラムとの接続と役割分担について議論することにあつた。参加校には、大学教員準備講座などの PFFP 実施校（京都大学、東京大学、名古屋大学）と新任教員研修など教員向け専門性開発に力をいれて取り組んでいる大学（明治大学、名城大学、立命館大学）が参加し、議論した。

④ 教育・学習マネジメントに関する調査研究

2012 年度には、2011 年度に実施した英国調査及び米国調査の成果についてセンター内報告会（5 月 14 日）を開催した。そのうち、英国におけるキングストン大学調査の成果を日本教育学会第 71 回大会で発表するとともに、東北大学高等教育開発推進センター紀要第 8 号に「専門性パートナーシップによる大学教育マネジメント—英国キングストン大学の取組事例を中心に—」と題して投稿した（杉本和弘・鳥居朋子）。

また、豪州首相日本対象教育支援プログラムの一環として、2012 年 6 月及び 12 月にオーストラリア・メルボルンを訪問し、メルボルン大学・RMIT 大学・ヴィクトリア大学における教育マネジメントや関連する人材育成の取組に関する聴き取り調査及び資料収集を行った。その調査成果の一部は、東北大学高等教育開発推進センター紀要第 8 号に「メルボルン大学における教育改革とマネジメント」と題して報告した（杉本和弘・今野文子・立石慎治）。

さらに、2013 年 2 月末から 3 月初めに英国・フィンランド調査を実施し、英国ではキングストン大学及びウェスト・ロンドン大学を訪問し、両大学における教育マネジメント（学生に対するキャリア支援の取組とそのマネジメントを含む）、専門性開発プログラム（PGCert）の取組に関する聴き取り調査を行った。また、フィンランドではヘルシンキ大学高等教育研究開発センターを訪問し、フィンランドにおける高等教育の現状と、ヘルシンキ大学における教育マネジメント、専門性開発プログラムに関する聴き取り調査を行った。ヘルシンキ大学では各学部で教育方法に関する専門的知識を有する講師を置いてセンターとのネットワークを通して教育改善が図られているなど、分権的な教育マネジメントが強く維持されていることが明らかとなっている。

⑤ 知識基盤社会におけるアカデミック・インテグリティ保証制度に関する国際比較研究

科学研究助成事業（科学研究費補助金）（基盤研究(B)「知識基盤社会におけるアカデミック・インテグリティ保証に関する国際比較研究」）を財源とする研究を推進し、海外から 2 名の研究者を招聘し（アメリカ・R.ガイガー、香港・B.マクファーレン）、研究会を開催したほか、日本学術会議フォーラムで報告（2013.1 羽田）、大学・学会・学術会議会員調査の準備を行った。2013

年度はまとめを行う予定である。

⑥ 大学教員による授業準備に関する調査

2012 年度には、2011 年度に実施した質問紙調査の回答データの分析を実施した。この調査結果の一部は、” How university teachers design their courses —Analysis of a basic survey targeting university teachers”として、R-10 HTC2013 (IEEE Region 10, Humanitarian Technology Conference 2013)において発表が決定している他、2013 年度には引き続き調査結果の報告を行う予定としている。

⑦ 大学教育における震災ボランティア支援のあり方およびその教育効果に関する調査研究

2012 年度には、震災ボランティア経験がある学生に対してインタビューを行った。また、ボランティア学生の支援に携わる組織の責任者に対するインタビューも行った。2013 年度には、以上の成果をまとめて、広島大学高等教育研究開発センターの『高等教育研究叢書』として刊行する予定である。

⑧ アカデミックライティング

東北大学におけるライティング支援のあり方を検討するため、他大学のアカデミックライティング支援の取り組みについて、東北大学附属図書館 米澤誠、横山美佳、SLA の足立佳奈、鈴木学、大学教育支援センターの佐藤万知、今野文子による調査を実施した (表 1)。

表 1 調査実施のスケジュール

日時	訪問先	訪問目的
2012 年 12 月 7 日 (金) 14 : 00 ~ 17 : 30	東京大学駒場キャンパス	理系学部 1 年生必修のライティング授業である ALESS プログラムのトム・ガリー先生、及び、駒場ライターズ・スタジオの片山晶子先生への聞き取り
2013 年 1 月 15 日 (火) 10 : 00 ~ 16 : 00	千葉大学アカデミックリンクセンター	アカデミックリンクセンターの活動全般についての聞き取りと見学
2013 年 1 月 16 日 (水) 10 : 00 ~ 12 : 00	東京女子大学図書館	マイライフ・マイライブラリーの取り組みについての聞き取りと見学
2013 年 2 月 16 日 (土)	名古屋大学	アカデミックライティングシンポジウムへの参加
2013 年 2 月 28 日 (木) 14 : 00 ~ 15 : 30	メルボルン大学 Academic Skills	Academic Skills の Laurie Ransom 先生と Guido Ernst 先生への聞き取り
2013 年 3 月 15 日 (金) 15 : 00 ~ 16 : 30	龍谷大学瀬田ライティングセンター	ライティングセンターのスーパーバイザーである島村健司先生への聞き取り
2013 年 3 月 16 日 (土)	関西大学	ライティングセンター日本の現状と課題への参加

⑨ 新しい教育方法・学習環境に関する調査研究(2012.4~)

2012 年度には、次の 2 点を行った。(1) キャンパスデザイン・学習環境に関する調査 (公立はこだて未来大学訪問調査, 立教大学大学教育開発・支援センター開催のセミナーでの情報収集), (2) PBL に関する情報収集 (於京都大学大学研究フォーラム)。なお, (1)については, SDP として 8 月に「学びを促す学習コミュニティの創造と運営」を企画・実施し, ラーニングコモンズ等の学習環境整備の取り組みに加え, SLA の学習支援やブレンデッド・ラーニング等の実践事例を合わせ

て報告・検討を行った(2-5-5. 大学職員開発能力開発プログラム)。

2013年度には、調査研究部門からプログラム開発・実施部門にウェイトを移し、PDセミナーとして上記成果をフィードバックする予定である。

2-5. プログラム開発・実施

2-5-1. 大学教育力開発(特色ある教養教育内容開発)(2012年度実施分)

『大学教育力開発(特色ある教養教育内容開発)』事業(総額638万円)のもと、2011年度に学内にて公募・採択された9科目のうち、諸般の事情から実施を次年度(以降)に持ち越した、「英語で発表、討論、診療ができる医学生の育成」(事業代表者:石井誠一医学系研究科医学教育推進センター准教授)及び「歯学部高学年次教養教育「医の倫理・社会の倫理」の開発」(事業者:笹野泰之歯学研究科教授)の2科目について事業を実施した。2011年度に開発・実施済みの科目の内容は、外国語教育、歴史教育、天文学者育成など文系から理系まで多岐にわたっていたが、これらと合わせ内容の幅が広がり、さらなる充実が図られることとなった。質及び量両面で東北大学の教育全体の向上への寄与が期待できる。

2-5-2. 東北大学 大学教員準備プログラム(Tohoku U. PFFP)

2012年度 東北大学 大学教員準備プログラム(PFFP)には、文学研究科1名、教育学研究科1名、国際文化研究科1名、農学研究科1名、情報科学研究科1名、経済学研究科1名の計6名が参加した。

【達成目標】

- 単位やカリキュラム、シラバスの意味など大学教育の基礎を説明できる
- シラバスを通して、15回の授業計画を表現できる
- 1回の授業を設計し、実践できる
- 自分の行った教育活動に関して自己省察を実践できる
- 大学教員の役割、仕事を理解し、自分なりの考え方を説明できる

【プログラム活動】

- オリエンテーション「PFFP/NFPへようこそ」
- セミナー「大学の授業を設計するー授業デザインとシラバス作成」
- 授業参観「授業を見る聞く学ぶ」
- ワークショップ「自分の授業をみつめるーマイクロティーチング」
- セミナー「大学教育制度と役割について考える～日・米の比較」
- ワークショップ「自分の授業をみつめるー模擬授業」
- 海外集中コース(バークレー集中コース)
- リフレクティブジャーナルの作成
- 課題論文の提出

表 2 プログラムのスケジュール

	日時	概要
PFFP/NFP へようこそ	2012年11月18日(日) 10:30~16:30	参加者顔合わせ、プログラムの目的、大学教育の課題と教員の役割に関する講義、本プログラムにおけるリフレクションの取組みに関する説明など
大学の授業を設計する —授業デザインとシラバス作成	2012年11月30日(金) 15:00~18:00	大学の授業における目標・活動・評価について、事前に参加者が作成したシラバスを改善することを通して考える
先達から学ぶ「授業を見る 聞く学ぶ」	2012年12月中	授業経験豊かな教員の授業を参観し、授業後のディスカッションを通して、教育活動について考えるヒントを得る
大学教育制度と役割について考える～日・米の比較	2012年12月10日(月) 14:00~17:00	アメリカの高等教育の専門家より、アメリカにおける高等教育の課題、カリキュラム、教育改善の動きなどを学び、日本との比較をする
自分の授業をみつめる —マイクロティーチング	2013年1月29日(火) 12:15~16:10	一人7分間のマイクロティーチングの実践と先達教員からのフィードバック、及び授業リフレクションの実施
バークレー集中コース	2013年2月20日(水) ～3月2日(土)	カリフォルニア大学バークレー校において、1週間の集中コースに参加
自分の授業をみつめる —模擬授業	2013年3月12日(火) 14:00~17:30	一人20分の模擬授業の実践と先達教員からのフィードバックの実施
参加報告会	2013年3月22日(金) 14:00~15:30	参加者による報告

【評価及び課題】

プログラムに対する 2012 年度 PFFP 参加者による評価は、2011 年度と比較するとあまり高いとは言えない。活動の中でも「授業デザインとシラバス作成」や「マイクロティーチング」など、教育活動に直接係わり、且つ、実践的な内容のものについては有益との評価が高い。しかし、リフレクティブジャーナルや先達教員との交流など自己省察力を高めることを求められる活動や、自分なりの問題意識に基づき主体的に活動することを求められるバークレー集中コースについては、うまく位置づけられていない様子が見受けられた。2011 年度より各活動の内容を大きく変更したわけではないことより、このような評価になった理由としては次の 2 点が考えられる。まず、参加人数の減少である。2012 年度は、博士課程後期 1 年生の応募資格をなくしたことなどから応募人数が少なく、選考の結果、2011 年度の約半数の 6 名のみの参加となった。同時に、多くの活動を NFP とは切り離して実施した。そのため、ディスカッションやピアラーニングの際に、特定の意見しかでてこず、参加者同士で学び合うという仕組みがうまく機能しなかったことが指摘できる。プログラム提供者の力量を向上する必要もあるが、多様な視点から考えることを求められる PFFP のようなプログラムにおいては、参加者の人数がある一定数以上確保されていた方が望ましい。次に、日本の学部教育に対する参加者の経験と知識の少なさである。6 名のうち、日本で学部教育を受けたのは 2 名(その他は留学生 3 名と海外の学位取得者 1 名)のみだったため、プログラムが無意識のうちに前提として設定している日本の高等教育の現状が共有されておらず、提供者側の働きかけが機能しなかったと言える。今後、多様な学習経験を持つ参加者が増えることが予測できることより、プログラム提供者はプログラムが前提としている文脈を客

観的に把握し、より意識的に多様性に対応するべくプログラム設計を進める必要がある。次年度の課題としては、ここまで述べた2点について対応すると共に、次の3点が挙げられる。1点目は、リソースの提供である。各活動に関連するような文献や情報をリソースとして提供することで、より主体的な参加を期待できる。2点目に、バークレー集中コースに対する準備の充実を目指す。バークレー集中コースはカリフォルニア大学バークレー校の教育学習環境について、それぞれが課題意識を持ってフィールドワークをすることを目的としているが、学部教育のカリキュラムや授業構成に対する理解が少ないと、批判的に考察することができない。これまでの事前セミナーや資料の提供は行ってきたが、より充実した内容にすることが求められる。最後に、プログラム提供初年度からの課題である「知識積み上げ型」をプログラムに対して期待する参加者と「包括的に学びとる」ことを求める提供側のずれをどう埋めるのか、という点が課題として挙げられる。この課題については、継続的に考察する必要がある。

2-5-3. 東北大学 新任教員研修プログラム(Tohoku U. NFP)

2012年度 東北大学 新任教員プログラム(NFP)には、工学研究科助教3名、法学研究科助教1名、高等教育開発推進センター准教授・講師各1名の計6名が参加した。

【達成目標】

- 単位やカリキュラム、シラバスの意味など大学教育の基礎を説明できる
- シラバスを通して、15回の授業計画を表現できる
- 1回の授業を設計し、実践できる
- 自分の行った教育活動に関して自己省察を実践できる
- 大学教員の役割、仕事を理解し、自分なりの考え方を説明できる

【プログラム活動】

- オリエンテーション「PFFP/NFPへようこそ」
- セミナー「大学の授業を設計するー授業デザインとシラバス作成」
- 授業参観「授業を見る聞く学ぶ」(希望者)
- ワークショップ「自分の授業をみつめるーマイクロティーチング」
- セミナー「大学教育制度と役割について考える～日・豪の比較」
- 海外集中コース(メルボルン集中コース)
- リフレクティブジャーナルの作成
- 先達教員による個人コンサルテーション
- 課題論文の提出

表3 プログラムのスケジュール

	日時	概要
PFFP/NFPへようこそ	2012年11月18日(日) 10:30~16:30	参加者顔合わせ、プログラムの目的、大学教育の課題と教員の役割に関する講義、本プログラムにおけるリフレクションの取組みに関する説明など

大学の授業を設計する ー授業デザインとシラ バス作成	2012年11月30日(金) 15:00~18:00	大学の授業における目標・活動・評価に ついて、事前に参加者が作成したシラバ スを改善することを通して考える
先達から学ぶ「授業を見 る聞く学ぶ」	2012年12月	授業経験豊かな教員の授業を参観し、授 業後のディスカッションを通して、教育 活動について考えるヒントを得る
自分の授業をみつめる ーマイクロティーチン グ	2013年1月29日(火) 12:15~16:10	一人7分間のマイクロティーチングの 実践と先達教員からのフィードバック、 及び授業リフレクションの実施
先達教員によるコンサル テーション	2013年1月29日(火) 16:20~18:00	先達教員による個人コンサルテーショ ンとグループディスカッション
大学教育制度と役割に ついて考える～日・豪の 比較	2013年2月20日(月) 14:00~16:00	オーストラリアの高等教育の専門家よ り、オーストラリアの高等教育の課題、 カリキュラム、教育改善の動きなどを学 び、日本との比較をする
先端的教授法を学ぶ メルボルン集中コース	2013年3月1日(金) ～3月10日(日)	メルボルン大学において、1週間の集中 コースに参加
参加報告会	2013年3月22日(金) 14:00~15:30	参加者による報告

【評価及び課題】

2011年度は、大学院生と新任教員を混合で派遣していたメルボルン集中コースについて、2012年度からは新任教員のみ参加としたため、課題意識や各自が置かれている状況の共有がよりスムーズに行われ、参加者集団の結束が高いことが伺われた。この点については、メルボルン側の講師陣からも、例年よりも参加者からの積極的な質問や議論がなされていたとの高評価を得た。参加者からの評価としては、マイクロティーチングの実施、先達教員からのフィードバック、リフレクションの実施、参加者間でのディスカッションの機会について特に好評を得た。課題としては以下の3点が挙げられる。まず、一点目は、プログラムのスケジュール、各セミナーの開催日程をいかに新任教員が参加しやすいものにできるかという点である。本プログラムは11～3月にかけて実施しているが、特に理系の教員から、1～2月は研究室における学生指導の繁忙期であるために、セミナーの開催を11～12月に集中させてほしいとの意見があった。次年度のプログラムにおいては配慮すべき点であるといえる。二点目としては、海外集中コースにおけるフィールドワークと授業参観の活動が、参加者によってはうまく位置づけられなかったことが挙げられる。特にフィールドワークについては、教育だけではなく、研究の側面や大学教員としての在り方といった、より広い視野で取り組むことを想定して位置付けた活動であったが、海外集中コースの講義の内容が教育面に焦点をあてたものとなっていたこともあり、それらとの間のつながりが見出しにくいと感じた参加者がいたことがわかった。この点については、その目的と意義について、運営側がより丁寧に説明をする必要があると思われる。三番目としては、今後の国内化に向けた検討が挙げられる。これまで海外集中コースで実施してきた内容を国内実施に向けて設計していくにあたり、参加者からは海外集中コースになっているからこそ享受できていた利点に、なるべく配慮してほしいという声が寄せられた。具体的には、職場を離れ、いわゆる缶詰の状態にされるからこそ集中して考える時間を持てる点、海外にいるという理由があるからこそ、雑務を後回しにし、プログラムの課題の遂行に没頭できる点、合宿形式手他の参加者と寝食をともにする中で、本音で悩みや理想を語り合える機会が持てる点などが挙げられる。こうした利点は、

国内において半日程度で実施されるセミナーの実施だけでは実現し難い可能性があり、今後海外集中コースの内容をどのように国内化していくのかを検討するうえで考慮すべき点であるといえる。

2-5-4. 大学教育マネジメント人材育成プログラム(EMLP)

2011年度に引き続き、教育開発や教育マネジメントに携わる者に特化した、大学教育マネジメント人材育成プログラム(EMLP)を開講した。当プログラムでは、プログラム参加者が自身の所属する機関が直面している課題を解決する改革案の作成を通じて、課題解決能力を養うことを目的としている。その目的を達成するために、国内外での活動からなる4つのステップからプログラムを構成した。また、改革案作成を支援するために、教育開発ならびに教育マネジメントの経験が豊富な教員によるアドバイザー制度を採用している。

なお、2011年度からの変更点としては、教員のみを対象としていたのを職員にも開放したことがある。

プログラムは2012年8月下旬～2012年3月末日にかけて実施し、計7名(東北大学3名、東北大学除く国立大学2名、私立大学2名、うち教員4名)が参加した。

【プログラム活動】

Step1: キックオフ・ワークショップ

Step2: キーンズ集中コース

Step3: コンサルテーション・ワークショップ

Step4: 改革案の作成と提出

表 4 プログラムのスケジュール

		日程	概要
Step1	キックオフ・ワークショップ	2012年8月20日(月) ～21日(火)	プログラム趣旨説明, カナダの高等教育の実情解説, 各参加者の課題のプレゼンテーションとディスカッション, 海外派遣に関わる連絡等
Step2	キーンズ集中コース	2012年9月24日(月) ～28日(金)	カナダ・キーンズ大学における1週間の集中コースに参加
Step3	コンサルテーション・ワークショップ	2013年1月13日(日)	キーンズ集中コースでの学習を踏まえて作成してきた改革案の進捗報告と, 報告を踏まえた助言者や参加者同士のディスカッション
Step4	改革案を完成させる	2013年3月13日(水)	改革案の提出

【今後の課題】

前年度報告書に課題として次の4点を挙げた。(1) プログラム開始の早期化, (2) EMLPのコンセプトの明確化, (3) 課題の負担軽減, (4) 大学職員への開放。このうち, (1) については, 10日程

度の早期化を実現したが、準備期間が夏季の休業にかかり、運営体制への負荷も増大したため、2013年度は時期を再考する予定である。(2)については、目的や獲得能力の記述の改訂作業を行った。2013年度も継続する予定である。(3)については、発言言語を日本語に統一したことにより、部分的に実現されている。ただし、英語能力を発揮する機会が減ったため、2013年度は、応募時の書類に英語を課す予定である。(4)については、大学職員の参加を可としたことで達成されている。これは2013年度も継続予定である。

各機関の課題を持ち寄るといふ、個別の文脈を活かしたプログラム構造のなかで、如何に一般的な、文脈を超えて共通する内容を組み入れるかという点は、引き続き大きな課題である。特に、履修証明プログラム化を見越すと、重要なポイントとなってくる。共通部分の改善には、昨年度から継続して次年度も取り組む予定である。

2-5-5. 大学職員能力開発プログラム(SPD)

SDPは、2011年度はPDセミナー「教育企画力とは何か?いかに身につけるか?」を開催するのみにとどまったが、2012年度は大学職員の教育企画力や学習支援に係る能力開発に資する取り組みとして以下の2つのセミナー・ワークショップの企画・開催を行った。

第一に、大学職員が学生の学びにいかに関与できるのかを考える機会を提供するべく、「学びを促す学習コミュニティの創造と運営」(2012年8月22日開催)と題するセミナー・ワークショップを開催した。前半のセミナーでは、井下理氏(慶應義塾大学教授)による基調講演(「学ぶ人による・学びたい人どうしの学習コミュニティの形成—空間・時間・集団・制度の再設計と協働に向けて—」)に続き、「大学図書館」「学生による学習支援(SLA)」「ブレンデッド・ラーニング」の取組事例の報告を行った。後半は「学生の学びをソウゾウする」と題したワークショップを企画し、参加者によるグループワークを通して学生の学びを促す具体的な「仕掛け」を案出するワークをその発表を行ってもらった。

第二に、学都仙台コンソーシアムFD・SD部会の主催、本学高等教育開発推進センターの共催という形で、2013年2月16日に「SDフォーラム in 仙台—SDの実践的な取り組みに向けて」を開催した(於東北学院大学土樋キャンパス)。山形大学長の結城章夫氏による「大学改革に果たす大学職員の役割」と題する基調講演に続き、東北地区で展開されている各種のSDの事例紹介とそれに関するパネルディスカッションを行った。

以上の通り、SDPは他のキャリア対象別プログラムを比較すると、まだ体系的な内容から構成されるプログラムとして継続的に実施できているわけではなく、依然として萌芽的段階にとどまっていると言わざるを得ない。この点こそがまさに課題であり、今後は東北大学をはじめとする東北地区諸大学(学都仙台コンソーシアム加盟校を含む)の大学職員のネットワークを構築するとともに、多様化する職員の実践的課題を踏まえた体系的SDPの企画・実施を推進できる体制(例えば、大学職員自身による企画委員会の設置)を整備していくことが求められる。

2-5-6. PDセミナー

・ **コンセプトと構造の明確化** PDセミナーの企画にあたっては、「PD(専門性開発)分野一覧」(参考資料3-1-1)を準拠枠組みとして、2011年度報告書において要改善点として挙げられたコンセプトの明確化とプログラム全体の構造化について、セミナー構成を精選する方向で一層の徹底を図った。

- ・ **実施状況** 2012年度は、合計40件のセミナーが実施された（参考資料3-1-2）。その内訳は、大学教育支援センターが主体となって企画した6主題にシリーズ化したセミナーが16件、随時開催の単独のセミナーが13件、保健管理センターが主体となって実施した「健康科学セミナー」が4件、昼休みの時間帯に短時間でスポット的に実施した「ランチタイムFD」が6件、その他1件である。特に、夏季に実施した「外国語教育の指導力を育成する」（参考資料3-1-2, No.12）では、1日目に大学教育・大学院教育における教養・専門双方の視点から外国語教育のあり方についてシンポジウムを開催し、2日目は分科会において、メディアを活用した教育、語学力の指導・養成方法、初修外国語の教授法の3つのテーマにて、英語、中国語、フランス語を扱い、本学教員を主な講師として実践的な手法を紹介、実施された。セミナーへの延べ受講者数は2,030名、前年度比、約3割増であった。
- ・ **参加者による評価** 前項に示した40件のセミナーの内、19件・26講座については受講者アンケートによる評価データが収集された（参考資料3-1-3）。受講者数で重みづけた受講満足度の平均値は3.58点（4点満点）であり、2011年度の3.49点を若干ではあるが上回り、セミナーの企画・実施における改善努力の成果が数値的に裏付けられた形である。
- ・ **次年度以降に向けた課題** 高等教育機関におけるPDに対するニーズ等の環境要因の変動を踏まえて、PDプログラムのコンセプトと構造を常に更新していくことが求められよう。また、PDセミナー受講の利便性を高め、その波及範囲の拡大を図るためには、様々なITツールの積極活用という方向性が重要である。そして何よりも、受講者にとってのPDセミナー受講の効用を担保し、その社会的意義を確保するためには、PDセミナーの社会的通用性を保証し拡大するための制度的仕掛けの組み込みが不可欠であろう。

2-5-7. PDP オンライン

2012年11月に、PDプログラムの動画配信サイト「PDP オンライン」を開設した。本サイトでは、PDプログラムとして実施されたセミナーのうち、講師の許諾が得られたものについて動画コンテンツ化し、広く一般に公開している。2012年度内には、6つのコンテンツの公開が実現した。公開したコンテンツは表5に示すとおりである。このうち、「学術分野の男女共同参画のポジティブ・アクションの課題（辻村みよ子教授）」は、「世界トップクラス研究リーダー養成セミナー」として東北大学女性研究者育成支援推進室が開催した講演を同室の協力を得て動画化したものである。

表5 PDP オンラインにおける動画コンテンツ一覧（2013年3月）

セミナー名	講師（所属は講演当時）
授業の全体を構想しシラバスに表現する	串本 剛 講師 （東北大学高等教育開発推進センター）
授業をマネジメントする	邑本俊亮 教授 （東北大学大学院情報科学研究科）
研究不正と学問的誠実性	羽田 貴史 教授 （東北大学高等教育開発推進センター）
大学教授職とはどのような職業か	羽田 貴史 教授 （東北大学高等教育開発推進センター）
学術分野の男女共同参画のポジティブ・アクションの課題	辻村 みよ子 教授 （東北大学大学院法学研究科）
英語で授業 English Pronunciation, Hints and Tips	ヴィンセント・スクラ 講師 （東北大学高等教育開発推進センター）



図 1 PDP オンラインのトップページ (<http://www.cpd.he.tohoku.ac.jp/PDPonline/>)

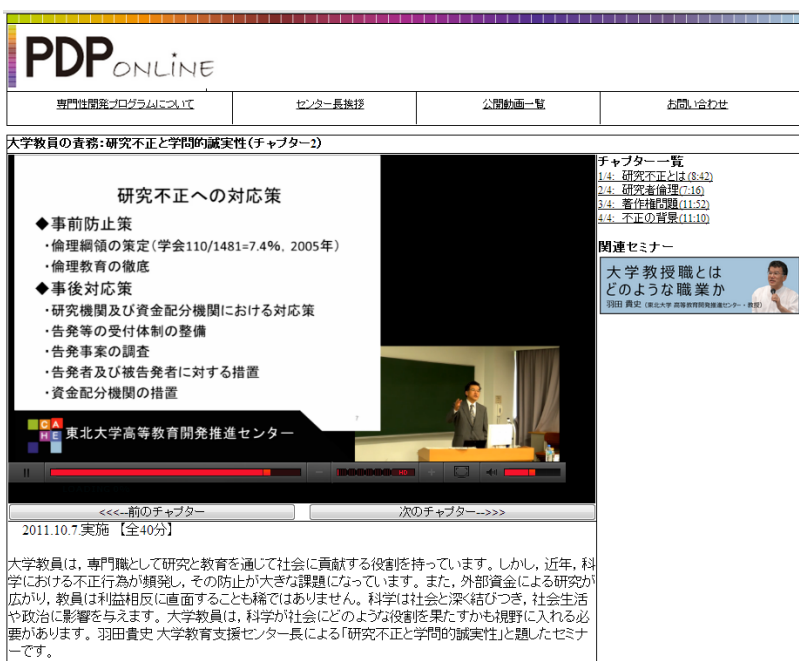


図 2 PDP オンラインにおける動画配信の様子

PDP オンラインの動画は、東北大学インターネットスクール (ISTU) の公開動画機能を用いて配信を実現している。各セミナーの動画は、トピックの内容毎にチャプターとして分割し、10～15分前後の動画として順を追って再生できるように編集している。

【評価及び課題】

近年、国内外を問わず、大学における授業を広く公開しようとする動きはさらに活発化しており、今後も拡大していくことが十分に予想される。その中において、専門性開発プログラムとして、学生のみならず、教員や職員をも対象として実施している講演やセミナーの内容を広く一般にも

公開とする「PDP オンライン」の実現は、大学教育支援センターの活動の成果を還元するしくみとして特徴的な試みであるといえる。2012年度の配信実績は6本と、年度当初の目標であった8本を達成できなかった。これには、講演の動画化について講演者から了承を得ることに難航したことと、講演者による編集済み動画の確認に時間を要したこと等が影響している。次年度は、履修証明プログラムの始動に関連して、より多くのコンテンツを動画として配信する必要があることから、関係者から、より一層の理解と協力を得られるよう体制とプロセスを整備する必要がある。これについては、講演依頼時における動画化についての説明と依頼項目の明確化、動画化マニュアルの配布等の実施を通して改善することを予定している。加えて、講演の動画化及びその配信においては、著作権への配慮を十分に行う必要がある。この点についても、次年度からは講演者に対し、著作権への配慮を依頼する文書を配布するとともに、運営担当者用にもチェック項目を明確にしたマニュアルを配布し、講演資料等を事前に確認する体制を整える予定としている。さらに、2012年度には担当者と学生アルバイトで実施していた動画コンテンツの編集について、次年度からは外部業者に一部を委託することを計画している。これまでの編集作業の結果をもとに動画化に関するガイドラインを整備し、講演内容に基づいた編集指示書を作成することで、外部業者への依頼内容を明確にし、講演実施からコンテンツ公開までの時間の大幅短縮、より質の高いコンテンツの提供の実現が期待される。

2-6. 研究成果の発表・出版

(1) 目標

- ① 研究的出版及び主に実践的な内容を中心にしたPDブックレットをシリーズ化して刊行する。
- ② 研究成果を学会や研究会等で発表し、社会に還元する。

(2) 実施状況

・研究成果の出版 2012年度は、2010年度から継続的に実施したセミナー・シンポジウム及び調査研究等の成果を3冊の高等教育ライブラリとして刊行することができた。

高等教育ライブラリ No.5『植民地時代の文化と教育—朝鮮・台湾と日本—』は、「植民地時代の文化と教育」をテーマとする第17回東北大学高等教育国際セミナー「植民地時代の文化と教育—韓国併合1世紀を経て—」（2011年1月22日開催）と、国際シンポジウム「植民地時代の文化と教育Ⅱ—朝鮮と台湾における植民地大学」（2011年12月17日開催）の成果として刊行した。

また、第16回東北大学高等教育フォーラム「進路指導と受験生心理—大学選びのメカニズムを探る—」（2012年5月18日開催）の成果として、同No.6『大学入試と高校現場—進学指導の教育的意義—』を刊行するとともに、2010年度に実施した「大学・短大教員のキャリア形成と能力開発に関する調査」の成果を同No.7『大学教員の能力—形成から開発へ—』として刊行した。

・ブックレットの刊行 PDブックレット Vol.3として、学生の多様性に応じた心理・教育的支援の必要が高まっていることを受け、学生相談に関する専門知識をわかりやすく解説した『学生のための心理・教育的支援』を刊行し、関連のセミナーや新任教員研修等で配布した。また、2009年から本学で実践されている英語多読法の概念・手法をまとめ、Vol.4『ER@TU—多読のすすめ』として刊行した。多読法については2013年6月開催の大学教育学会において本学における多読法の実践内容を紹介・議論するワークショップを開催する予定であり、こうした取組を通して学内外の普及に努めている。

・学会・研究会・講演等の活動 教育マネジメントの調査研究としては、2011年度に実施した英

国調査の成果について、大学教育支援センター教員及び共同研究員が「専門性パートナーシップによる大学教育マネジメント—英国キングストン大学の取組事例を中心に—」と題して日本教育学会第 71 回大会において発表及び、東北大学高等教育開発推進センター紀要第 8 号への投稿を行った。

また、これまでの大学教育支援センターにおける PFFP の取組みについて、同センター教員 2 名がタイ・バンコクで開催された ICED（各国の高等教育開発者団体の国際的連合体）で発表・議論を行った。PFFP についてはさらに、2011 年度に続き、日本国内で大学院における大学教員養成プログラム (PFFP) を実施している大学関係者及び関連団体が参加しての研究会を開催し(2012 年 12 月 17 日、於京都大学東京オフィス)、大学教員の採用に関わる関係者からのニーズ把握(新任教員に求める能力や資質)や新任教員向けプログラムとの関係性等について議論を行った。

その他、学外からの依頼に応じて、各種セミナー・講演会にて発表や講演を行っている(参考資料 3-3)。

(3) 評価及び課題

2012 年度には、過去 3 年間に実施してきた調査研究活動(研究会開催含む)の成果を、高等教育ライブラリ・シリーズや、学会発表を始めとしたその他の媒体を通して発表できている。また、一連の研究成果を実践に携わる教職員に向けて発信する手段として、年数冊のペースで PD ブックレットの刊行を行っており、学内外から高く評価されている。その上で、まだ成果発表につながっていないが、「大学の組織運営とマネジメント人材育成に関する調査研究」等の調査研究や外国語文献の翻訳作業等を行っており、2013 年度にはその成果の一部を発表・出版していくことが重要だと考えている。

2-7. 他機関との連携

海外との連携、教育関係共同利用拠点との連携、学内との連携は順調に進んだが、2011 年から協議していた放送大学 ICT・遠隔教育センターとの連携は、放送大学の運営方針変更に伴い、中止することになった。遠隔配信は、東北大学内部の資源をもとにして進めることにした。

2-8. 2013 年度以降の課題

- (1) 拠点事業 4 年目に入り、各活動の質を高め、6 年目以降の持続的な拠点事業の基盤を構築する。
- (2) 高等教育開発推進センターの第 2 回外部評価及び外国人専門家による評価を反映させる。
- (3) 海外派遣をもとに、日本型のプログラムとしての確立を目指す。
- (4) 特に、取り組むべき重要課題は次の通り。
 - ① キャリア別をベースに提供プログラムを整理し、4 ゾーン・14 カテゴリーにバランスよくセミナー類を配置し、体系的に提供する。
 - ② 履修証明プログラムを、EMLP の発展形として試行的に実施する。
 - ③ PFFP は、全国共同利用拠点事業の性格を強め、他の研究大学の協力を得て、院生交流会を実施する。
 - ④ NFP は、メルボルン大学からの講師招聘による国内合宿セミナーを組み込む(11 月実施)。
 - ⑤ 新任教員向け PDP は、東北大学新任教員研修と結びつけて体系化を図り、メルボルン大学からの講師招聘による国内合宿セミナーを実施する(11 月頃)。全国共同利用拠点事業の性格を強めるため、他大学の新任教員参加も組み込む。

- ⑥ セミナーの動画化と配信を拡大する。
- ⑦ 他の教育関係共同利用拠点、CITI Japan プロジェクト、大学 IR コンソーシアムとの連携を強め、大学教育学会大会への支援など、全国的な大学教育改革への寄与を行う。
- ⑧ 大学の組織運営とマネジメント人材育成に関する調査研究など、現在進行中の研究を進め、高等教育開発推進センター全体が参加できる次期 5 年間を見据えた共同研究（科学研究費助成事業（科学研究費補助金）基盤研究(A)）の企画を進める。
- ⑨ 拠点事業 4 年目を迎え、組織体制に変動も生じること、高等教育開発推進センターの改組などの動向を視野に入れ、専門性開発活動全般を同センターの使命・役割に改めて位置付け直すと共に、各種プログラムに参加した人材を積極的に活用し、持続的な運営が可能な体制作りを進める。
- ⑩ PFFP の一般経費化、2015 年度以降の特別経費プロジェクト（高度な専門職業人の養成や専門教育機能の充実）及び、教育関係共同利用拠点事業の構想を検討し、今秋以降、申請の準備を進める。

参考資料

3. 参考資料




3-1. PDP（専門性開発プログラム）

3-1-1. PD（専門性開発）分野一覧

ゾーン	カテゴリー	エレメント
高等教育のリテラシー 形成関連 コード：L (Literacy)	高等教育論 L-01	高等教育の歴史，大学の理念，大学制度・組織，入試制度，関連法制，管理運営，国内外の動向など広く高等教育に関する知識・教養に関するもの
	大学教員論 L-02	大学教師の役割・責務，倫理，キャリア形成など大学教員に関する知識
	教育内容・ カリキュラム論 L-03	教養教育論，カリキュラム論など教授する教育内容の教育論に関するもの
	教授技術論 L-04	授業の設計，シラバスの書き方，学習と教授の心理学，教育測定の原理と方法，プロジェクトベースラーニングの進め方，論文・レポート執筆の指導など教授技術に関するもの
専門教育での 指導力形成関連 (各専門分野) コード：S (Specialty)	学習指導法 S-01	専門分野の学習方法の指導法
	実験指導法 S-02	実験の計画，準備，実施，結果の整理，施設・設備・機器類の使用，危険の防止，倫理的ガイドライン等についての指導法
	研究指導法 S-03	研究テーマの設定方法，関連文献の検索方法，プレゼンテーションの方法，論文のまとめ方，研究費の申請方法等についての指導法
学生支援力 形成関連 コード：W (Health & Welfare)	学生論 W-01	現代学生論，大学生の発達と学習，学生の生活問題，学生理解とカウンセリングなど学生理解と指導に関するもの
	学生相談 W-02	大学コミュニティへの適応支援の技術，カウンセリングの基礎，コンサルテーションの基礎，グループワークの基礎，人間関係調整法等の指導
	キャリア教育 W-03	進路選択の支援方法，キャリア形成の支援方法，経済的自立の指導
	健康教育 W-04	健康な生活習慣形成の指導法，趣味や余暇活用の指導法
マネジメントカ コード：M (Management)	組織運営論 M-01	大学の管理運営，大学のリーダーシップ論，危機管理
	大学人材開発論 M-02	FD/SD 論、教職員開発プログラム作成，キャリア・ステージ論
	教育マネジメント M-03	質保証，入口管理，カリキュラム・マネジメント，出口管理

3-1-2. PD セミナー実施一覧

No.	開催日	事業名	ポスター
シリーズ1：大学の授業を設計する（基礎）			
1	7/13	<p>「授業デザインとシラバス作成」</p> <p>日時：2012年7月13日（金）16：30～18：30</p> <p>場所：東北大学川内北キャンパス マルチメディア教育研究棟 M401</p> <p>講師：串本 剛（東北大学高等教育開発推進センター・講師）</p> <p>参加者数：25名(学内：20名・学外：5名)</p>	
2	9/5	<p>「授業づくり：準備と運営」</p> <p>日時：2012年9月5日（水）15:00～17:00</p> <p>場所：東北大学川内北キャンパス マルチメディア教育研究棟 M401</p> <p>講師：邑本 俊亮（東北大学災害科学国際研究所・教授）</p> <p>参加者数：32名(学内：26名・学外：6名)</p>	
シリーズ2：大学の授業を改革する（応用）			
3	10/5	<p>「学生が学び合う授業の理論と実際」</p> <p>日時：2012年10月5日（金）14:00～17:30</p> <p>場所：東北大学川内北キャンパス 管理棟 3F 大会議室</p> <p>講師：三宅なほみ（東京大学教育学研究科・教授）</p> <p>参加者数：22名(学内：7名・学外：15名)</p>	

No.	開催日	事業名	ポスター
シリーズ3：教育マネジメントの力を創る			
4	8/22	<p>「学びを促す学習コミュニティの創造と運営」</p> <p>日時：2012年8月22日（水）13:00～17:30 場所：東北大学川内北キャンパス マルチメディア教育研究棟 M601</p> <p>講演「学ぶ人による・学びたい人どうしの学習コミュニティの形成：一空間・時間・集団・制度の再設計と協働に向けて」 井下 理（慶應義塾大学総合政策学部・教授）</p> <p>事例報告1「アフォーダンスとしての大学図書館」 米澤 誠（東北大学附属図書館・総務課長）</p> <p>事例報告2「SLA 実践紹介 ～学生同士の学び合い文化の創造を目指して～」 足立 佳菜（東北大学SLAサポート室・助手） 鈴木 学（東北大学SLAサポート室・室員）</p> <p>事例報告3「ブレンデッド・ラーニングと学習空間～『ともに学ぶ場』を創る～」 今野 文子（東北大学高等教育開発推進センター・助教）</p> <p>ワークショップ「学び合いの空間を描く」 杉本 和弘（東北大学高等教育開発推進センター・准教授） 立石 慎治（東北大学高等教育開発推進センター・助教） 今野 文子（東北大学高等教育開発推進センター・助教）</p> <p>参加者数：40名(学内：28名・学外：12名)</p>	
5	12/7	<p>「データに基づく教育改善の可能性を探る」</p> <p>日時：2012年12月7日（金）14:00～17:30 場所：東北大学川内南キャンパス 百周年記念会館萩ホール</p> <p>「研究と実践のインタラクション：大規模学生調査研究と大学IRコンソーシアム」 山田 礼子（同志社大学社会学部・教授）</p> <p>「学びの実態の可視化－アプローチとフィードバック－」 鳥居 朋子（立命館大学教育開発推進機構・教授）</p> <p>「データは何を語るか～学生の声を聴き、教学改善に活かすために～」 山田 剛史（愛媛大学教育学生・支援機構・准教授）</p> <p>参加者数：57名(学内：22名・学外：35名)</p>	
6	11/6	<p>「大学職員のための業務改善・企画力養成講座」</p> <p>日時：2012年11月6日（火）13:00-17:00 場所：東北大学川内北キャンパス マルチメディア教育研究棟 M601 右</p> <p>講師：秦 敬治（愛媛大学教育・学生支援機構・教授）</p> <p>仲道 雅輝（愛媛大学教育・学生支援機構・助教） 阿部 光伸（愛媛大学教育・学生支援機構・特任助教）</p> <p>参加者数：58名(学内：31名・学外：27名)</p>	



No.	開催日	事業名	ポスター
7	11/16	<p>「ポートフォリオを使いこなす」</p> <p>日時：2012年11月16日（金）14:00～17:00</p> <p>場所：東北大学川内北キャンパス マルチメディア教育研究棟 M401</p> <p>講師：栗田佳代子（東京大学大学総合教育研究センター・特任准教授）</p> <p>参加者数: 27名(学内: 11名・学外: 16名)</p>	
8	1/22	<p>「大学の危機管理-ヒューマン・エラーとリスクマネジメント-」</p> <p>日時：2013年1月22日（火）13:00～16:00</p> <p>場所：東北大学川内北キャンパス マルチメディア教育研究棟 M601 右</p> <p>「学校現場での事件・事故・トラブル等はどう対応するか—法律の観点から—」</p> <p>坂田 仰（日本女子大学教職教育開発センター・教授）</p> <p>「ヒューマン・エラーの気づきカースリップ・ミスティク・モーゼ錯覚・ペテロ効果—」</p> <p>仁平 義明（白鷗大学教育学部・教授）</p> <p>参加者数: 37名(学内: 20名・学外: 17名)</p>	
シリーズ4：学生を指導する			
9	8/28	<p>「学生のための心理・教育的支援—学生相談の基礎知識」</p> <p>日時：2012年8月28日（火）13:30～16:00</p> <p>場所：東北大学川内北キャンパス マルチメディア教育研究棟 M401</p> <p>「学生生活サイクル(学生期)と学生対応の基本」</p> <p>池田 忠義（東北大学高等教育開発推進センター・准教授）</p> <p>「自傷・自殺/ハラスメント」</p> <p>堀 匡（東北大学高等教育開発推進センター・助教）</p> <p>「こころの病気を抱える学生/不登校・ひきこもりの学生」</p> <p>佐藤 静香（東北大学高等教育開発推進センター・助手）</p> <p>参加者数: 35名(学内: 27名・学外: 8名)</p>	
10	11/26	<p>「学生のための心理・教育的支援—発達障害学生への視点」</p> <p>日時：2012年11月26日（月）15:00～16:30</p> <p>場所：東北大学川内北キャンパス 講義棟 B棟 B202</p> <p>講師：川住 隆一（東北大学教育学研究科・教授）</p> <p>参加者数: 37名(学内: 19名・学外: 18名)</p>	

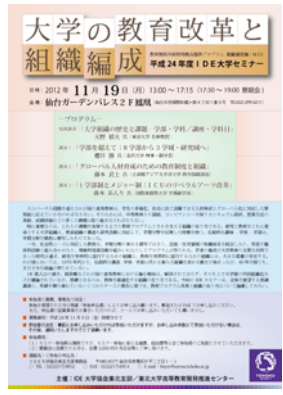



No.	開催日	事業名	ポスター
11	12/17	<p>「大学教職員に求められる異文化理解 - 留学生とともに考える」</p> <p>日時：2012年12月17日（月）16:20~18:30</p> <p>場所：東北大学川内北キャンパス 講義棟 A 棟 A102</p> <p>講師：佐藤勢紀子（東北大学高等教育開発推進センター・教授）</p> <p>参加者数：17名(学内：13名・学外：4名)</p>	
シリーズ5：外国語教育の指導力を育成する			
12	7/28	<p>「外国語教育の指導力を育成する（シンポジウム）」</p> <p>日時：2012年7月28日（土）13:00-17:00</p> <p>場所：東北大学川内北キャンパス マルチメディア教育研究棟 M601</p> <p>基調講演「グローバル化と日本の大学」</p> <p>中嶋 嶺雄（国際教養大学・学長）</p> <p>講演1「CEFR（ヨーロッパ言語共通参照枠）と複言語・複文化能力」</p> <p>姫田麻利子（大東文化大学外国語学部・准教授）</p> <p>講演2「学生のニーズから大学外国語教育を考える」</p> <p>浅川 照夫（東北大学高等教育開発推進センター・教授）</p> <p>講演3「外国語教育の理想と現実」</p> <p>Ben SHEARON（東北大学高等教育開発推進センター・講師）</p> <p>参加者数：89名(学内：58名・学外：31名)</p>	
13	7/29	<p>「外国語教育の指導力を育成する（分科会）」</p> <p>日時：2012年7月29日(日)9:00-16:10</p> <p>場所：東北大学川内北キャンパス</p> <p>マルチメディア教育研究棟 M201・M301</p> <p>講義棟 C 棟 C101・C102・C103</p> <p>・英語：Ben SHEARON（東北大学高等教育開発推進センター・講師）</p> <p>Daniel EICHHORST（東北大学高等教育開発推進センター・講師）</p> <p>米澤 誠（東北大学附属図書館・総務課長）</p> <p>・スペイン語：志柿 光浩（東北大学国際文化研究科・教授）</p> <p>・ドイツ語：杉浦 謙介（東北大学国際文化研究科・教授）</p> <p>・フランス語：古石 篤子（慶應義塾大学総合政策学部・教授）</p> <p>・中国語：姜 麗萍（北京言語大学中国語研修学院・教授）</p> <p>李 郁蕙（東北大学高等教育開発推進センター・講師）</p> <p>張 立波（東北大学高等教育開発推進センター・講師）</p> <p>王 其莉（東北大学文学研究科・専門研究員）</p> <p>参加者数：146名(学内：91名・学外：55名)</p>	



No.	開催日	事業名	ポスター
シリーズ6：英語で授業をする			
14	9/28	<p>「Classroom English: Pronunciation and Expressions」</p> <p>日時：2012年9月28日（金）13:00-16:30</p> <p>場所：東北大学川内北キャンパス 講義棟A棟A404</p> <p>「Language of the classroom」</p> <p>Vincent SCURA（東北大学高等教育開発推進センター・講師）</p> <p>「Pronunciation: Hints and Tips」</p> <p>Todd ENSLEN（東北大学高等教育開発推進センター・講師）</p> <p>参加者数: 29名(学内: 21名・学外: 8名)</p>	
15	10/26 ~27	<p>「Planning and Managing Active Learning in English」</p> <p>日時：2012年10月26日（金）～27日（土）</p> <p>場所：東北大学川内北キャンパス 講義棟A棟A103</p> <p>講師：Laura HAHN（イリノイ大学）</p> <p>Todd ENSLEN（東北大学高等教育開発推進センター・講師）</p> <p>参加者数: 26名(学内: 19名・学外: 7名)</p>	
単独セミナー			
16	1/10	<p>「Oral Presentation in English: Preparing for International Conferences」</p> <p>日時：2013年1月10日（木）13:00～17:00</p> <p>場所：東北大学川内北キャンパス マルチメディア教育研究棟M401</p> <p>講師：鎌田ローレル（東北大学高等教育開発推進センター・講師）</p> <p>参加者数: 25名(学内: 25名・学外: 0名)</p>	

No.	開催日	事業名	ポスター
17	4/2	<p>「高等教育モデルと収束するのか」</p> <p>日時：2012年4月2日(月) 13:30~14:40</p> <p>場所：東北大学川内北キャンパス 管理棟大会議室</p> <p>講師：Roger GOODMAN (オックスフォード大学・教授)</p> <p>参加者数: 34名(学内: 26名・学外: 8名)</p>	
18	5/18	<p>「入試フォーラム：進路指導と受験生心理 —大学選びのメカニズムを探る—」</p> <p>日時：2012年5月18日(金) 13:00~17:30</p> <p>場所：東北大学川内北キャンパス マルチメディア教育研究棟 M206</p> <p>基調講演1「大学入試の多様化と進路選択・指導」 大谷 奨 (筑波大学アドミッションセンター・准教授)</p> <p>基調講演2「受験生心理からみた大学入試」 西郡 大 (佐賀大学アドミッションセンター・准教授)</p> <p>現状報告1「地域拠点校としての進路指導」 森下陽一郎 (福島県教育庁高校教育課・指導主事)</p> <p>現状報告2「科学技術高校に向けた継続教育の充実」 蓮田 裕一 (栃木県立宇都宮工業高等学校・教諭)</p> <p>現状報告3「宮城県気仙沼高校の現状と課題」 佐藤 忠司 (宮城県気仙沼高等学校・教諭)</p> <p>参加者数: 205名(学内: 23名・学外: 182名)</p>	
19	6/20	<p>「秋入学を考えるシンポジウム」</p> <p>日時：2012年6月20日(水) 17:00~19:00</p> <p>場所：東北大学川内北キャンパス 講義棟 A202</p> <p>「2つのサイクルと学年歴—歴史の視点から」 羽田 貴史</p> <p>「秋入学に関わる各国の状況」 石井 光夫</p> <p>「学生の適応の観点から見た秋入学の問題」 工藤与志文</p> <p>参加者数: 48名(学内: 37名・学外: 11名)</p>	

No.	開催日	事業名	ポスター
20	9/18	<p>「経済先進国における学生の流動性とは」"Incoming and Outgoing Student Mobility - The Varied Views and Policies in Economically Advanced Countries"</p> <p>日時：2012年9月18日(火) 15:00~17:00 場所：東北大学川内北キャンパス マルチメディア教育研究棟 M401 講師：Ulrich TEICHLER (カッセル大学・教授)</p> <p style="text-align: right;">参加者数: 13名(学内: 9名・学外: 4名)</p>	
21	9/12	<p>「国際シンポジウム：留学生と日本人学生が共に学ぶ場を作るーグローバル人材を育成する授業とはー」</p> <p>日時：2012年9月12日(水) 13:00~17:30 場所：東北大学川内北キャンパス マルチメディア教育研究棟 M206</p> <p>Keynote Speech 「メルボルン大学における国際化マネジメントについて」 Richard JAMES(メルボルン大学・高等教育参加担当副学長)</p> <p>講演 「オーストラリア内大学における共同研究プロジェクト "Finding Common Ground: enhancing interaction between domestic and international students"の紹介」 Sophie ARKOUDIS(メルボルン大学・副センター長)</p> <p>「日本の大学における異文化環境での授業実践の取り組み紹介」 報告 1: Adrian PINNINGTON (早稲田大学国際教養学部教授) 報告 2: Edson URANO (筑波大学人文社会科学部研究科・准教授) 報告 3: 芳賀 満 (東北大学高等教育開発推進センター・教授)</p> <p style="text-align: right;">参加者数: 93名(学内: 64名・学外: 29名)</p>	

No.	開催日	事業名	ポスター
22	7/6	<p>「University Globalization – How Japanese Education / Employment Systems are Different from Other Countries」</p> <p>日時：2012年7月6日（金）13:00～18:00 場所：東北大学片平キャンパス 片平さくらホール</p> <p>"Korea's Education and Employment Systems, and Suggestions to Japan" Dr. C. W. Pyo (NICT)</p> <p>"China's Education and Employment Systems, and Suggestions to Japan" Dr. Zhou Lan (NICT)</p> <p>"The Netherlands' and India's Education and Employment Systems, and Suggestions to Japan" Dr. Anand Prasad (NEC)</p> <p>"Canada's and Turkey's Education and Employment Systems, and Suggestions to Japan" Dr. Tuncer Baykas (NICT)</p> <p>"Global Perspective on the Current Weak Japan" Mr. Kiyotaka Ogata (Gemalto)</p> <p>"USA's Education and Employment Systems, and Suggestions to Japan" Prof. Shu Kato (Tohoku University)</p> <p style="text-align: right;">参加者数: 48名(学内: 31名・学外: 17名)</p>	
23	11/26	<p>「University Globalization: Actions From Universities」</p> <p>日時：2012年11月26日（月）13:00～18:00 場所：東北大学片平キャンパス 片平さくらホール</p> <p>"Actions From Universities: Examining the Situation of University of Students to Identify Areas that can be improved to Meet the Challenges of Globalization" Prof. Daniel Eichhorst (Tohoku University)</p> <p>"Actions From Universities: MYU's Perspective toward Decentralization" Ms. Junko Sekino (Miyagi University)</p> <p>"Actions From Universities: Building Effective Foreign Language Instruction" Prof. Ben Shearon (Tohoku University)</p> <p>"The Current State of University Education in America: Where Should Education in Japanese Universities Go from Here?" Prof. Yuka Tachibana (Tohoku University)</p> <p>"Actions From Universities: Canadian Perspectives on Engineering Education" Prof. Abbas Yongacoglu (University of Ottawa)</p> <p>"Actions From Universities: How to Foster Skilled Engineers" Prof. Shu Kato (Tohoku University)</p> <p style="text-align: right;">参加者数: 46名(学内: 23名・学外: 23名)</p>	

No.	開催日	事業名	ポスター
24	11/19	<p>平成 24 年度 IDE 大学セミナー「大学の教育改革と組織編成」</p> <p>日時：2012 年 11 月 19 日（月）13:00～17:15</p> <p>場所：仙台ガーデンパレス</p> <p>基調講演「大学組織の歴史と課題—学部・学科／講座・科目」</p> <p>天野 郁夫(東京大学・名誉教授)</p> <p>講演 1「学部を超えて：8 学部から 3 学域・研究域へ」</p> <p>櫻井 勝(金沢大学・理事・副学長)</p> <p>講演 2「グローバル人材育成のための教育制度と組織」</p> <p>藤本 武士(立命館アジア太平洋大学・教学部副部長)</p> <p>講演 3「1 学部制とメジャー制：ICU のリベラルアーツ改革」</p> <p>森本あんり(国際基督教大学・学務副学長)</p> <p>参加者数: 108 名(学内: 44 名・学外: 64 名)</p>	
25	12/18	<p>「研究者育成と研究倫理教育の課題-知識基盤社会における大学の責務」</p> <p>日時：2012 年 12 月 18 日（火）15:30～17:30</p> <p>場所：東北大学川内北キャンパス マルチメディア教育研究棟 M401</p> <p>「CITI Japan プロジェクトについて」</p> <p>市川 家國 (信州大学医学部・特任教授)</p> <p>「研究倫理の確立の課題」</p> <p>小谷 元子 (東北大学・総長特別補佐)</p> <p>参加者数: 31 名(学内: 22 名・学外: 9 名)</p>	
26	2/12	<p>「アメリカにおける大学史研究の動向と課題</p> <p>"Writing the History of American Higher Education"</p> <p>日時：2013 年 2 月 12 日（火）15:00-17:00</p> <p>場所：東北大学 東京分室</p> <p>講師：Roger GEIGER (ペンシルバニア州立大学・名誉教授)</p> <p>参加者数: 26 名(学内: 2 名・学外: 24 名)</p>	
27	2/13	<p>「アメリカにおける産学連携—現状と課題</p> <p>"University-Industry Cooperation and the Innovative University in the U.S."</p> <p>日時：2013 年 2 月 13 日（水）15:00～17:00</p> <p>場所：東北大学川内北キャンパス マルチメディア教育研究棟 M601 右</p> <p>講師：Roger GEIGER (ペンシルバニア州立大学・名誉教授)</p> <p>参加者数: 29 名(学内: 6 名・学外: 23 名)</p>	

No.	開催日	事業名	ポスター
28	7/14	<p>「学び続ける大学職員の可能性を考える」(桜美林大行事後援)</p> <p>日時：2012年7月14日(土) 12:30~17:00</p> <p>場所：TKP 仙台カンファレンスセンター</p> <p>「桜美林大学大学院大学アドミニストレーション研究科の10年」 我妻 鉄也(桜美林大学大学アドミニストレーション研究科・助手)</p> <p>「東北大学高等教育開発推進センターの歩み」 杉本 和弘(東北大学高等教育開発推進センター・准教授)</p> <p>パネルディスカッション「学び続ける大学職員の可能性を考える」</p> <p>伊東 宏之(仙台大学広報室・グループマネージャー)</p> <p>高橋 正行(東北工業大学・長町校舎事務長)</p> <p>樋口 浩朗(山形大学人文学部事務室・係長)</p> <p>平野 真紀(会津大学学生課主事)</p> <p>米澤 誠(東北大学附属図書館総務課長)</p> <p>「大学を活かすための大学職員の学びを考える」 武村 秀雄(桜美林大学大学アドミニストレーション研究科・教授)</p> <p>参加者数: 名(学内: 名・学外: 名)</p>	
29	2/16	<p>学都仙台コンソーシアム SD フォーラム</p> <p>日時：2013年2月16日(土) 13:00~17:00</p> <p>場所：東北学院大学土樋キャンパス</p> <p>基調講演「大学改革に果たす大学職員の役割」 結城 章夫(山形大学・学長)</p> <p>事例紹介「東北地区におけるSDの取り組みについて」</p> <p>パネルディスカッション「SDのさらなる展開に向けて」</p> <p>参加者数: 123名(学内: 11名・学外: 112名)</p>	
健康科学セミナー			
30	10/23	<p>2012年度第1回健康科学セミナー 「ピロリ菌の話」</p> <p>日時：2012年10月23日(火) 16:30~17:30</p> <p>場所：保健管理センター2F ゼミナール室</p> <p>講師：木内 喜孝(東北大学高等教育開発推進センター・教授)</p> <p>参加者数: 12名(学内: 11名・学外: 1名)</p>	

No.	開催日	事業名	ポスター
31	11/27	<p>2012 年度第 2 回健康科学セミナー 「うつ病・うつ状態の基礎知識」</p> <p>日時：2012 年 11 月 27 日（火）16:30～17:30</p> <p>場所：保健管理センター2F ゼミナール室</p> <p>講師：山崎 尚人（東北大学高等教育開発推進センター・准教授）</p> <p>参加者数：19 名(学内：15 名・学外：4 名)</p>	
32	12/18	<p>2012 年度第 3 回健康科学セミナー 「なぜ健康人は大福 100 個食べても太るだけで血糖が上がらないのか？」</p> <p>日時：2012 年 12 月 18 日（火）16:30～17:30</p> <p>場所：保健管理センター2F ゼミナール室</p> <p>講師：小川 晋（東北大学高等教育開発推進センター・准教授）</p> <p>参加者数：14 名(学内：12 名・学外：2 名)</p>	
33	1/29	<p>2012 年度第 4 回健康科学セミナー 「酸化ストレス増幅蛋白サイクロフィリン A による心血管病促進機構」</p> <p>日時：2013 年 1 月 29 日（火）16:30～17:30</p> <p>場所：保健管理センター2F ゼミナール室</p> <p>講師：佐藤 公雄（東北大学高等教育開発推進センター・准教授）</p> <p>参加者数：12 名(学内：11 名・学外：1 名)</p>	
ランチタイム FD			
34	5/23	<p>授業参加型 FD 「授業を聞く見る学ぶ」</p> <p>第 3 回 理科実験体験授業「大気中の放射能」</p> <p>■授業見学：</p> <p>日時：2012 年 5 月 23 日（水）16:20～17:50</p> <p>場所：東北大学川内北キャンパス 学生実験棟 1F 文科系実験室</p> <p>担当教員：関根 勉（東北大学高等教育開発推進センター・教授）</p> <p>■検討会：</p> <p>日時：2012 年 5 月 23 日（水）17:55～18:25</p> <p>場所：東北大学川内北キャンパス 学生実験棟 1F 文科系実験室</p> <p>参加者数：12 名(学内：12 名・学外：0 名)</p>	

No.	開催日	事業名	ポスター
35	5/30	<p>ランチタイム FD「FD 研究会 - 研究と教育の関係を探る」 第 12 回 自分の授業をふり返る —授業リフレクション の実践—</p> <p>日時：2012 年 5 月 30 日（水）12:10～12:50 場所：東北大学川内北キャンパス 講義棟 C 棟 C408 講師：今野 文子（東北大学高等教育開発推進センター・助教）</p> <p>参加者数：19 名(学内：19 名・学外：0 名)</p>	 <p>2012 年 5 月 30 日（水）12:10～12:50 場所：東北大学川内北キャンパス講義棟 C408 講師：今野 文子 助教</p>
36	6/13	<p>ランチタイム FD「FD 研究会 - 研究と教育の関係を探る」 第 13 回 地方における日本語の現状—ウチナーヤマ トゥグチ（沖縄大和口）の事例—</p> <p>日時：2012 年 6 月 13 日（水）12:10～12:50 場所：東北大学川内北キャンパス 講義棟 C 棟 C408 講師：副島 健作（東北大学高等教育開発推進センター・准教授）</p> <p>参加者数：20 名(学内：20 名・学外：0 名)</p>	 <p>2012 年 6 月 13 日（水）12:10～12:50 場所：東北大学川内北キャンパス講義棟 C408 講師：副島 健作 准教授</p>
37	7/3	<p>ランチタイム FD「FD 研究会 - 研究と教育の関係を探る」 第 14 回 被災古文書の保全体験 —基礎ゼミ「江戸時代 を学ぼう」から—</p> <p>日時：2012 年 7 月 3 日（火）12:10～12:50 場所：東北大学川内北キャンパス 講義棟 C 棟 C408 講師：中川 学（東北大学高等教育開発推進センター・講師）</p> <p>参加者数：15 名(学内：15 名・学外：0 名)</p>	 <p>2012 年 7 月 3 日（火）12:10～12:50 場所：東北大学川内北キャンパス講義棟 C408 講師：中川 学 講師</p>
38	10/17	<p>ランチタイム FD「FD 研究会 - 研究と教育の関係を探る」 第 15 回 高度な意味情報を持つコーパス開発とその大 学教育における意義—"Development of a Semantic Corpus with High Precision and Its Influence on University Education"</p> <p>日時：2012 年 10 月 17 日（水）12:10～12:50 場所：東北大学川内北キャンパス 講義棟 C 棟 C402 講師：アラスデア・パトラー（東北大学高等教育開発推進センター・研究 員）</p> <p>参加者数：20 名(学内：20 名・学外：0 名)</p>	 <p>2012 年 10 月 17 日（水）12:10～12:50 場所：東北大学川内北キャンパス講義棟 C402 講師：アラスデア・パトラー 研究員</p>

No.	開催日	事業名	ポスター
39	11/30	<p>ランチタイムFD「FD研究会 - 研究と教育の関係を探る」 第16回 ER@TU:東北大学での多読プログラム ／"ER@TU:Extensive Reading at Tohoku University"</p> <p>日時：2012年11月30日（金）12:10～12:50 場所：東北大学川内北キャンパス 講義棟 C棟 C407 講師：Ben SHEARON（東北大学高等教育開発推進センター・講師）</p> <p>参加者数: 21名(学内: 19名・学外: 2名)</p>	
その他			
40	9/24	<p>平成24年度東北大学新任教員研修</p> <p>日時：2012年9月24日（月）13:00～17:15 場所：東北大学 百周年記念会館川内萩ホール</p> <p>「東北大学が目指す教育とは何か」 花輪 公雄（東北大学・理事）</p> <p>「大学教員の役割とキャリア・ステージ」 羽田 貴史（東北大学高等教育開発推進センター・大学教育支援センター長）</p> <p>「教育者としての倫理・ハラスメントについて」 池田 忠義（東北大学高等教育開発推進センター・准教授）</p> <p>「研究者としての倫理・ミスコンダクトについて」 小谷 元子（東北大学・総長特別補佐）</p> <p>「新任教員への期待—未来を創造する東北大学のカへ」 里見 進（東北大学・総長）</p> <p>参加者数: 360名(学内: 360名・学外: 0名)</p>	

2012年度PDプログラム参加者総数
計2,030名（学内1,250名・学外780名）

3-1-3. PD セミナー参加者アンケート結果

シリーズ1. 大学の授業を設計する (基礎)

PDP #1 授業デザインとシラバス作成 (2012.7.13)

串本 剛先生 (東北大学高等教育開発推進センター)

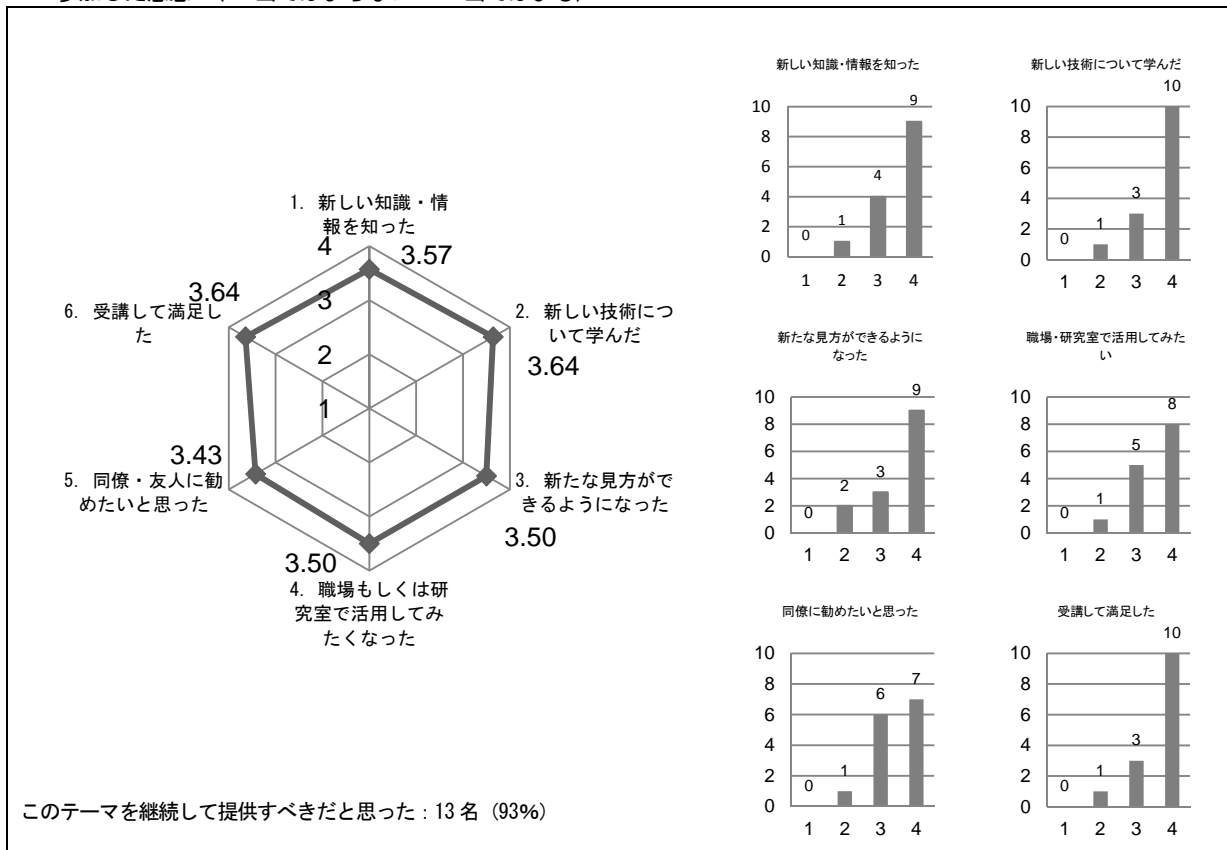
回答者属性(N=14)

【職階】 教授(2)/准教授(3)/講師・助教(4)/管理職教員(学長～学部長)(0)
博士課程(1)/職員(部長・課長以上)(1)/職員(係長・主任・一般職員等)(0)/その他(1)/無回答(2)

【性別】 男性(11)/女性(1)/無回答(2)

【学校種】 東北大学(10)/東北大学外(2)/無回答(2)

1. 参加した感想 (1. 当てはまらない～4. 当てはまる)



2. 特に役に立ちそうと思ったこと

- ・講義と演習 (相互の問題の話し合い)。
- ・学生の教室外学習時間について、強く意識することができたこと。
- ・シラバスの作成方法について具体的に知ることができ役に立った。
- ・大変勉強になりました。ありがとうございました。参加させていただいた甲斐がありました。
- ・ループブロックの作成方法についてもっと議論したかった。
- ・授業計画の立て方に何がポイントかがはっきりしたこと。
- ・授業外時間を想定した全体計画。

3. わかりにくいと思ったこと

- ・シラバス良い例を出して頂くとよいかと思う。
- ・目標の設定について、学部事情によっても異なるので、かなり難しいのでは。

4. セミナーに関する意見・感想

- ・セミナーの内容が具体的、明示的で筋道が明快で良い。大声が良い。
- ・内容が豊富で時間が足りなくなったと思われました。講義と演習と話し合いの三部構成で、やり方も動画配信も利用したものにすれば、より時間的にも、余裕ができるのではと思いました。
- ・パワーポイント資料が配布されると助かった。
- ・前提となる知識を予め動画 or 文章で入手しておきたかったです。
- ・専門の違いを感じました。
- ・また機会があれば参加させていただきたいです。
- ・もう少し時間が長くて良いと思う。
- ・今回についていうと、来てよかったです。シラバスは、来年度のことが考えられない時期にいつもじタバたしていきます。シラバス作成のポイントがかかることで授業の組み立てでもはっきりしました。

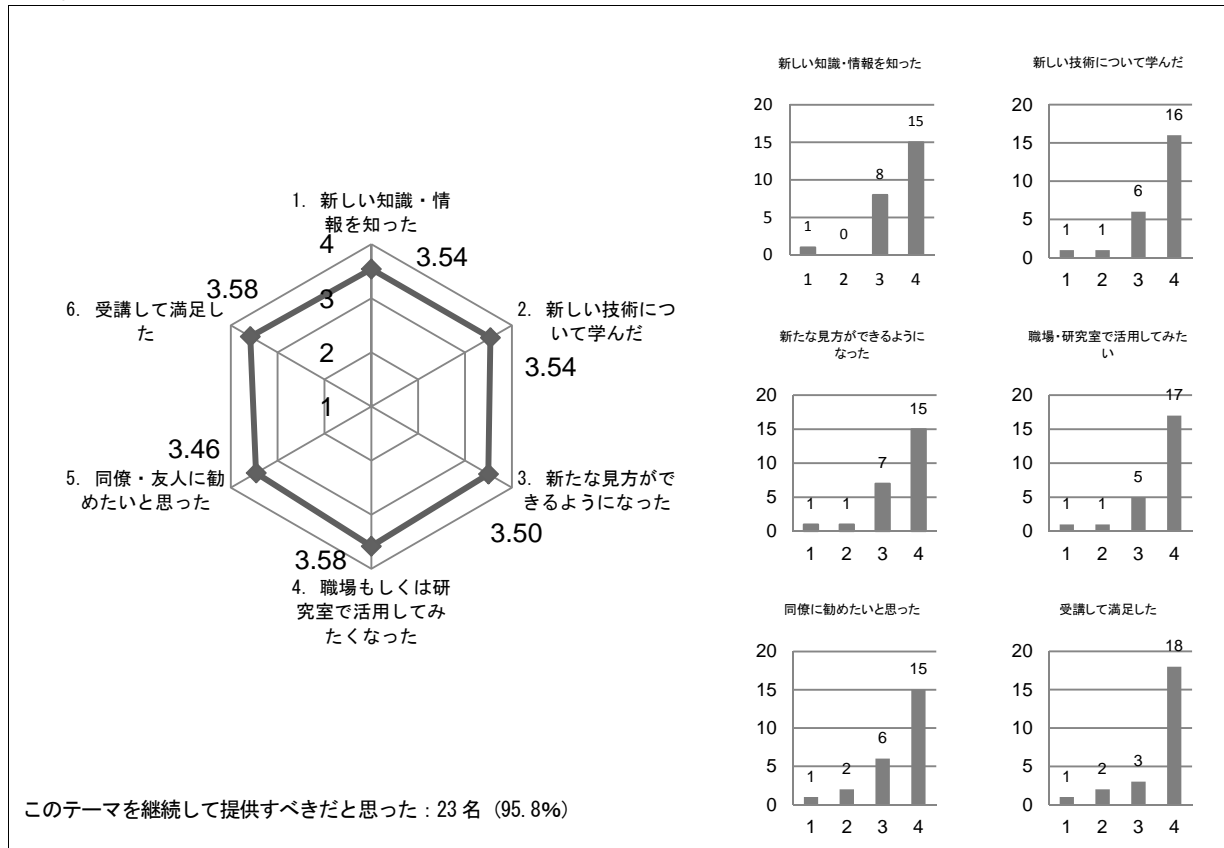
回答者属性(N=24)

【職階】 教授(4)／准教授(3)／講師・助教(8)／管理職教員(学長～学部長)(0)
博士課程(4)／職員(部長・課長以上)(0)／職員(係長・主任・一般職員等)(1)／その他(1)／無回答(3)

【性別】 男性(16)／女性(6)／無回答(2)

【学校種】 東北大学(16)／東北大学外(5)／無回答(3)

1. 参加した感想 (1. 当てはまらない～4. 当てはまる)



2. 特に役に立ちそうと思ったこと

- ・理解するための工夫。生徒の知識の活性化。
- ・コミュニケーション。
- ・授業運営で意識したこと。
- ・講義内容と呂本先生の講演の内容。
- ・例えば「インタラクティブな授業」のお題目では、理解できなかったような内容を得られたように思います。授業の構造化、模擬授業が分かりやすく参考になった。
- ・学生の学習意欲を高められるような材料の検討が必要だと思いました。
- ・講義の準備というより、患者に悪い話を伝える時のコミュニケーションに役立つと思った。別なことに使えると思ってしまい、本来の目的とはちがう考えが浮かんだ。
- ・受講者へのメッセージを考える必要がある。
- ・自分自身の（少ない）成功体験の理論化。
- ・綿密の授業の準備をする必要があるか、その手順を整理して学べた。
- ・信頼関係、全体像の把握。
- ・認知的葛藤と発見、新情報、有用性、共感、多様な材料、クイズなどが参考になりました。
- ・プレゼンの仕方。
- ・高校生向けの講義デモが大変具体的で勉強になりました。
- ・先生からの授業準備、運営に関する説明
- ・私は教員ではなく事務ですが、会議での説明等に生かしたいと思いました。また、後輩へのコーチングも使えそうだと思います。
- ・授業全体の構造化で、いきなり主題に入るのではなく、つかみが重要ということを知った。
- ・準備で考えたこと。授業運営で意識したこと。
- ・授業全体の構造化、特におとしどころを意識した授業づくりは、自分の授業でも活用したいと思った。

3. わかりにくいと思ったこと

- ・受講者へのメッセージの内容。
- ・専門用語。

- ・非常に分かりやすかったが、もう少しコンパクトにしてもらっても良かったと思う。授業の対象、内容、目的によって、授業のより良い方法も変わってくるので、より具体的にパターン毎の講演も聞いてみたい。
- ・メンタルモデルは確かに専門以外の人には難しいと感じた。そのような言葉には注意したい。
- ・理解のプロセスは分かったが、知識を伝達するにはどうしたら良いのかがよく分からなかった。
- ・共感するのは、授業のなかで全体を通してするように思った。あえて時間をとる理由がもう少し知りたかった。

4. セミナーについての意見・感想

- ・評判の良い教員の講義なら定期的に開催することが大歓迎です。そうでない場合、無理して開催する必要はない。今まで何回もありましたので。
- ・同様のテーマを続けて欲しい。
- ・参加者の身分が様々で、それぞれのレベル、経験が異なるので、「院生向け」、「新任向け」、「中堅向け」というように、身分、レベル毎にプログラムを開催する方が良いと思う。身分、経験によって、プログラムの内容に要求する水準、質が違うので。
- ・邑本先生のご講演が大変分かりやすく、ためになりました。
- ・仕事の時間の関係で参加できない時もありました。今回受講したセミナーを別の提供形態で受けるとしたら、今回と同じような提供形態が望ましいですが、動画配信とワークショップの組み合わせもあれば助かります。
- ・動画配信して各大学に会費をとって売れば良いのでは。

シリーズ2. 大学の授業を改革する (応用)

PDP #3 学生が学び合う授業の理論と実際 (2012.10.05)

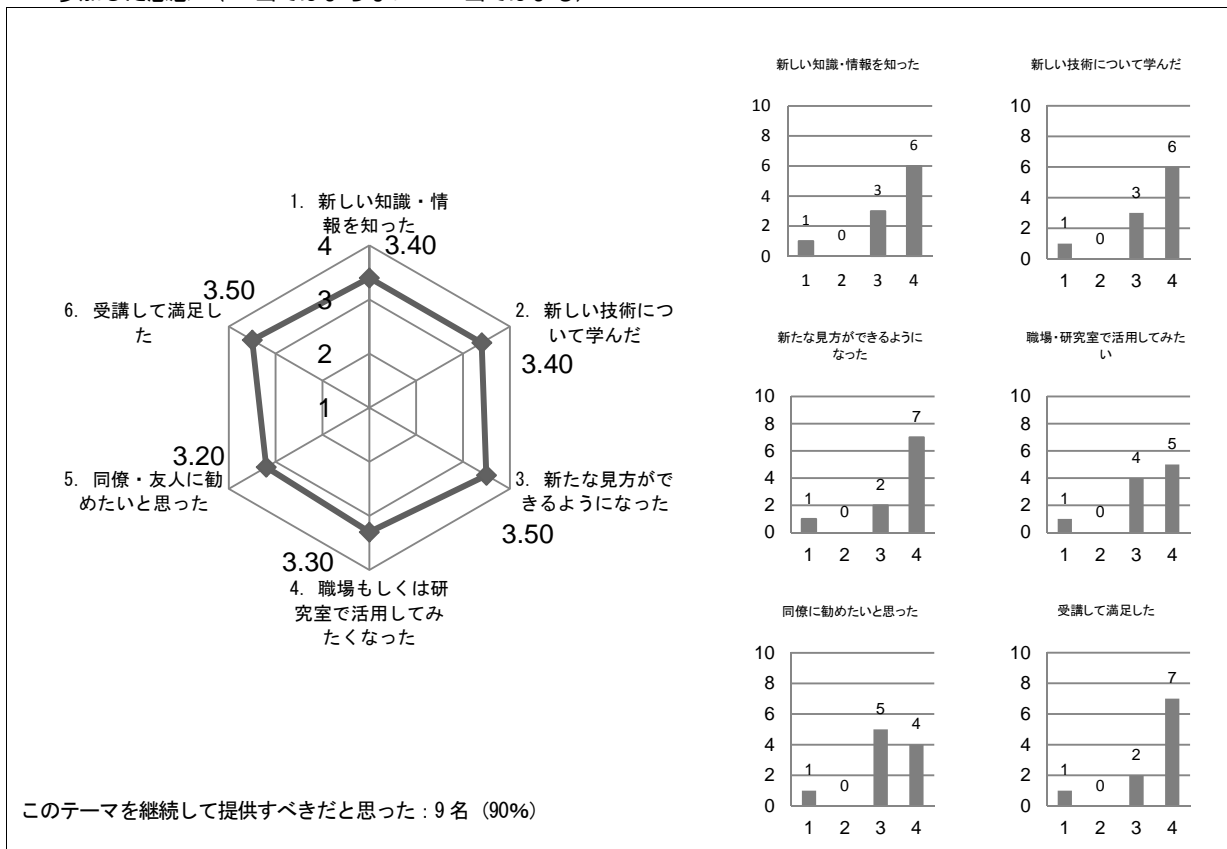
三宅なほみ先生 (東京大学)

回答者属性(N=10)

【職階】教授(3)/准教授(4)/講師・助教(0)/管理職教員(学長～学部長)(0)
博士課程(2)/職員(部長・課長以上)(0)/職員(係長・主任・一般職員等)(1)/その他(0)/無回答(0)

【性別】男性(6)/女性(3)/無回答(1)
【学校種】東北大学(3)/東北大学外(6)/無回答(1)

1. 参加した感想 (1. 当てはまらない～4. 当てはまる)



2. 特に役に立ちそうと思ったこと

- ・教員が問いを設定⇒動機付けというのが良かった。
- ・問いが大事だということ。目標もなく話し合ってもプラスの学びが生まれにくいこと。一発でうまくいくと考えなくていいということ。
- ・ジグリー法、その実践。
- ・ワークショップに小学生への実践例を伺って「小学生の例」が大変参考になった。
- ・「発展的な問いにはプロの手が必要である」という説明はとても納得しました。
- ・学び合う授業について自ら取り組んでいることを振り返るきっかけになった。新たに取り入れていきたいと思った。新しい動向を知ることができた。

- ・自分の授業 etc での展開。
- ・方法は授業で使えると思います。とてもためになりました。
- ・知識構成型ジグリー法の活用。

3. わかりにくいと思ったこと

- ・様々なテーマ・題材だとどうなるのか具体的に想像がしにくかった。
- ・うまくいきそうかどうかの予想の立て方。良い間かどうかの判断方法。
- ・評価の点について、もう少し提案があればよかった。
- ・社会構成主義との理論的関連。

4. セミナーについての意見・感想

- ・これからも大学の授業改善のために PD プログラムに参加したいと思います。

シリーズ3. 教育マネジメントの力を創る

PDP #4 学びを促す学習コミュニティの創造と運営 (2012.8.22)

井下 理先生 (慶應義塾大学)
 米澤 誠先生 (東北大学附属図書館)
 足立佳菜先生 (東北大学 SLA サポート室)
 鈴木 学先生 (東北大学 SLA サポート室)
 今野文子先生 (東北大学高等教育開発推進センター)
 杉本和弘先生 (東北大学高等教育開発推進センター)
 立石慎治先生 (東北大学高等教育開発推進センター)

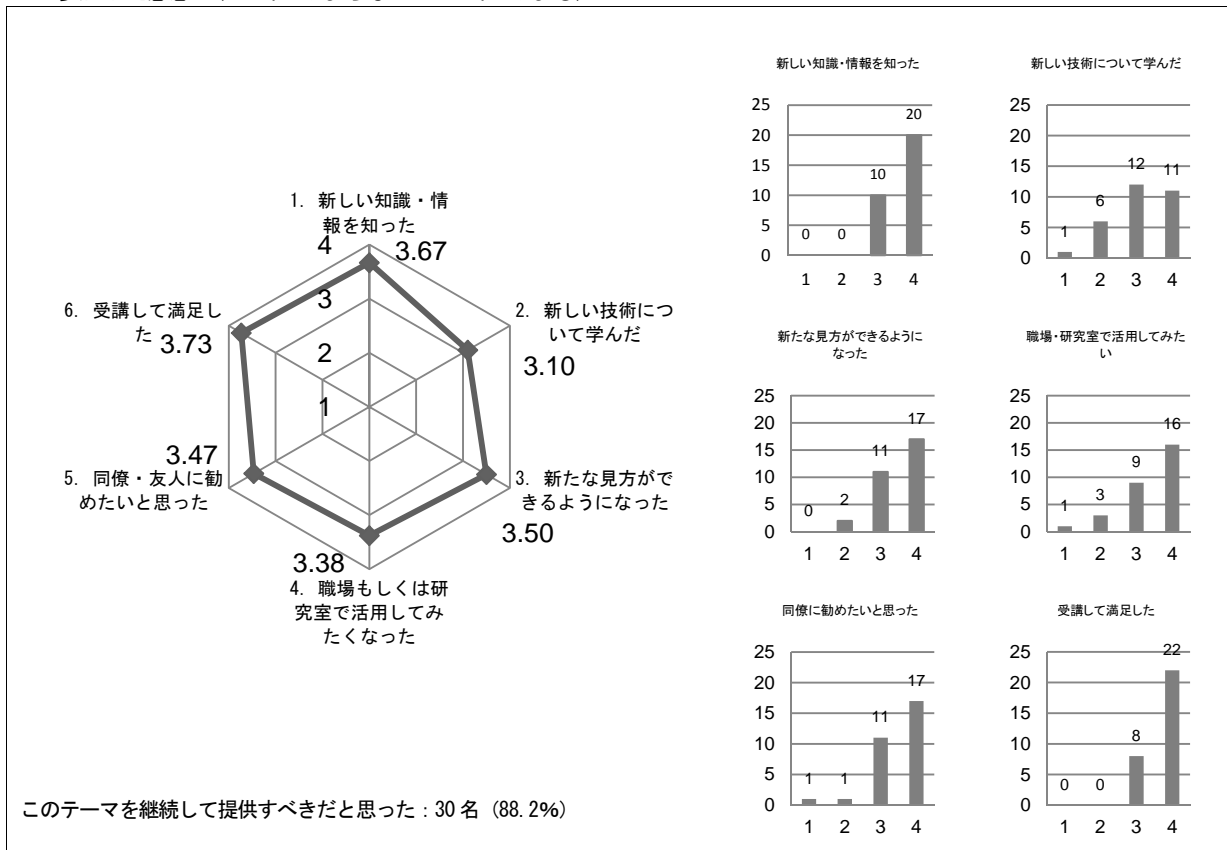
回答者属性(N=34)

【職階】 教授(7) / 准教授(1) / 講師・助教(1) / 管理職教員(学長～学部長)(0)
 博士課程(8) / 職員(部長・課長以上)(1) / 職員(係長・主任・一般職員等)(7) / その他(0) / 無回答(9)

【性別】 男性(17) / 女性(6) / 無回答(11)

【学校種】 東北大学(16) / 東北大学外(8) / 無回答(10)

1. 参加した感想 (1. 当てはまらない～4. 当てはまる)



2. 特に役に立ちそうと思ったこと

- ・SLA について学べたこと。
- ・ハードが学習意欲に大きな影響を与えるということ。ハードの重要性を再認識した。SLA : 教育者 (学部 3～大学院生) の不完全さが学生の側のオプションになるという発想の転換が面白かった。
- ・私は図書館に勤めておりますので、図書館での学習支援として、ラーニングコモンズについて非常に興味があります。3つの事例とも、参考になる点がありました。
- ・Blended teaching.
- ・アフォーダンス、プレッティドラーニングの概念の理解が得られた。
- ・米澤先生の内容、足立・鈴木先生の内容、今野先生の内容。

- ・図書館や SLA などの活動事例を知ることができてよかったです。
- ・教育の場（空間）としての変化は大切だと思いました。空間の雰囲気です。思考が変わるといのは聞いた事があるので意識したいです。
- ・学習コミュニティ。
- ・ラーニングコモンズと SLA を東北大で別々な建物で運営しているのを統合するともっと効果がありそうなので、自分の大学で実現できるよう考えてみたくなった。
- ・図書館がラーニングコモンズとして教育、生活、学習のすべての役割を持つ必要性を感じました。
- ・環境が人の学習意欲、行動を変化させるというアフォーダンスの考え方は、聞けばすぐに納得できるが、新鮮で興味深かった。
- ・学ぶ形態が多様化していることを知り、その形態によって学生と教える側が共に良い影響を与えられる可能性を感じた。
- ・Writing content. (レポート)
- ・多様な人たち（教員、学生、職員）との意見交換。
- ・多様な見方が分かちあったことは一番良かったと思います。
- ・人の学びの経験を聞くのはとても刺激的でした。
- ・イベント（プロ（木彫りの職人さん、農家の方々、アスリート）に多く接する）の開催は面白そう。Writing Center が実現できたらかなり厚いサポートですよね。
- ・立場によって「着眼点」が異なり、全てが新鮮で役に立つ内容でした。しかしながら、到達点というか向かうべき方向は同じところを向いているなどということを感じ、心強い限りでした。
- ・多様な意見を聞くことが、非常に興味深かった。教育や学びについて改めて考えることができ、今後の自身の学びや教育に生かしていきたいと思う。
- ・皆さんとディスカッションする中で、学びを楽しんでいる時がどういう時か少し自分の中で分かった気がします。井下先生がおっしゃったように、ホワイトボード等で考えの過程が残してある方がより議論が盛り上がると思いました。

3. わかりにくいと思ったこと

- ・SLA の利用者の中に留学生がどれくらいいるのか知りたかったのですが、質問できずに残念でした。

4. セミナーに関しての意見・感想

- ・学びということばがマジックワード化していると思った。「アフォーダンス大学、社会と学び」と言ってしまうと、何もかもすべて学びだし、学ばなかった、学ばなかったこともまた学びだと言えるのではないかな。今も昔も。大学のおかれた状況がかわって、新たに必要あるいは可能になる学びとは何なのか。
- ・説明途中でも質問が受けられるような場の作りがあってもいいと思う。
- ・大学院の研究室のあり方も、外国の大学院とは異なっているようですが、そのような改善はないかな。
- ・各プログラムともすばらしかった。時間が足りない。少なくとも倍の時間が欲しい。
- ・もう少し時間をとっていい（とるべき）内容だと思います。
- ・大変勉強になりました。ありがとうございました。井下先生が最初にお話し下さったように、マージナルな大学です。今回のレベルにはとても追いつくようなことは無理ですが、マージナル大学ならではの取り組みの参考とさせていただきます。次回を楽しみにさせていただきます。
- ・13:15~13:30 頃からはじめるとありがたいです。毎回の PDP、とても刺激的で勉強になります。今後も楽しみにしております。
- ・理学関係の学会発表とは異なり、皆が問題点を自分のものとして共有し議論している雰囲気が好印象でした。
- ・セミナーで得られたことを成果にするなら、教えていただきたいです。
- ・1つ1つの時間が長ければ良いと思いました。
- ・学生の意見を聞くことができて良かったです。ありがとうございました。
- ・また来たいです。
- ・職員の方がもう少し出席されていると良かったかも。
- ・いかに（教）職員を巻き込んでいくかを考えたい。
- ・学内関係者の参加をもう少し増やせると良いと思いました。ワークショップでの前提条件がもう少し具体的にあるとやりやすいと思いました。「主体的な学び」とは何か、考えさせられました。とても。
- ・同質なもので集まり、その後全体で意見、立場をぶつけるという形態もおもしろいと思いました。コーディネートする皆さんの負担が大きくなる企画ですが、ぜひお願いします。
- ・大変楽しかったです。有意義な時間をどうもありがとうございました。

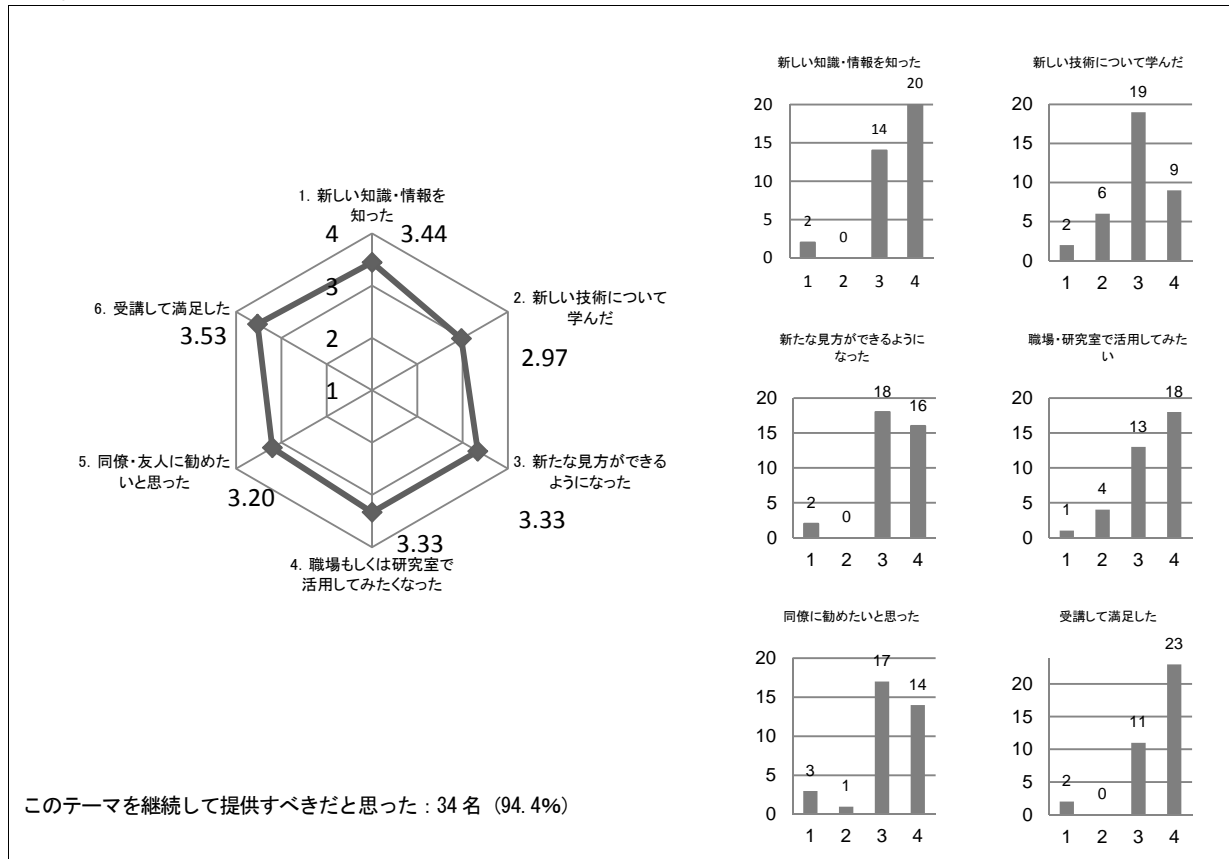
回答者属性(N=36)

【職階】教授(5)/准教授(4)/講師・助教(3)/管理職教員(学長～学部長)(0)
博士課程(2)/職員(部長・課長以上)(2)/職員(係長・主任・一般職員等)(10)/その他(8)/無回答(2)

【性別】男性(24)/女性(9)/無回答(3)

【学校種】東北大学(3)/東北大学外(28)/無回答(5)

1. 参加した感想 (1. 当てはまらない～4. 当てはまる)



2. 特に役に立ちそうと思ったこと

- ・データをもとに、相対化・比較するという観点の重要性。
- ・教育 IR について各大学でどのように取り組んでいるのかがわかった。
- ・大学において、IR の重要性、実際の活動内容、状況を知ることができ役に立った。
- ・Web レポート (鳥居)。
- ・IR の組織的活用について。調査項目の構築方法について。「何のための調査」という意識の重要性。
- ・直接評価と間接評価の連携。
- ・様々な分析を情報としてみせること。
- ・愛大学生コンピテンシーの発想、大学としての達成目標の効果検証がしやすくなりそうでいいですね。最先端の IR の取組みを参考に、本学でも、考え方や取組みをいくつか取り入れることができると思いました。
- ・現在の高等教育が常に進化し続けている事を理解できた点で役立ちました。
- ・IRer に求められる資質。
- ・立命館大学の Research Question の重要性。
- ・学生の多様性のデータ。
- ・DATA 入手→情報化→提案といった流れ。調査漏れや情報過多の危険性。直接評価と間接評価のジョイント。
- ・トップクラスの学生調査や分析のレベルが分かったので、どこをがんばればよいのか分かった。
- ・可視化の重要性。IR を実質化するための 6 つの必要条件の整備。
- ・クラスター分析の活用に興味を持った。コンピランシーについて学ぶことができた。
- ・シラバス作成のために、目的と調査、データ分析によって可視化し、実践にどのように役立てていくかという視点で考えなければならぬということ。
- ・IR の組織や IR 教職員に求められる能力についてなど。

3. わかりにくいと思ったこと

- ・不勉強なため、意味が理解できない言葉がいくつかありました。
- ・データの関係性のよみとき方など、分析についての専門知識がないとわかりにくい面がある。
- ・データがどう教育改善に結びつくのかがわかりにくい。立命館大学のは教育改善のイメージが付きやすかった。
- ・IR データ。

- ・略語、ジャーゴン。「誰が」どの部分を担うのか（授業担当者、FD/IR 担当者、職員）。
- ・生々しい話はしばらく（これはしかたない）課題が大学の文脈に依存するので。
- ・具体的なアンケート質問項目は何か。
- ・省略された専門用語について説明がないこと。
- ・アンケートの質問事項など。

4. セミナーについての意見・感想

- ・大きな地震がありましたが、スタッフの方が出口の確保等に素早く動かれていて素晴らしいと思いました（内容と関係なくて申し訳ありません）。大学に戻らねばならないので、回答が簡素ですいません。
- ・事前に動画配信があることを教えておいてもらえると助かります。
- ・内容が濃くて良いセミナーでした。
- ・もう少し短い時間だと参加しやすい。同内容×2回などの方法であれば選択的に参加しやすい。
- ・ディスカッションはたのしかった。
- ・ポर्टフォリオの以前のワークショップに参加できなかったのが、機会があればまたセッティングしていただきたいです。

PDP #7 ポートフォリオを使いこなす (2012.11.16)

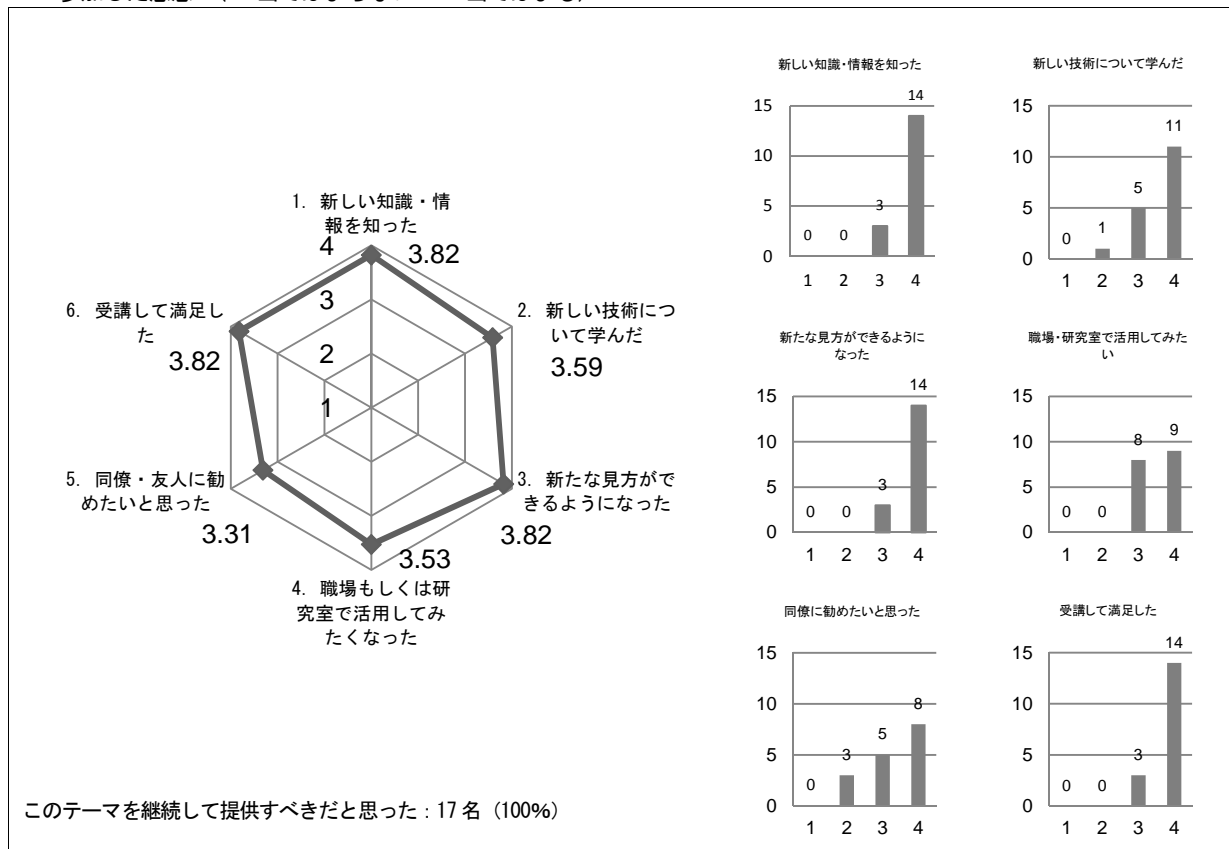
栗田佳代子先生（東京大学）

回答者属性(N=17)

【職階】教授(5)/准教授(3)/講師・助教(3)/管理職教員(学長～学部長)(0)
博士課程(2)/職員(部長・課長以上)(0)/職員(係長・主任・一般職員等)(3)/その他(1)/無回答(0)

【性別】男性(10)/女性(7)/無回答(0)
【学校種】東北大学(4)/東北大学外(12)/無回答(1)

1. 参加した感想 (1. 当てはまらない～4. 当てはまる)



2. 特に役に立ちそうと思ったこと

- ・ワークショップの方法。
- ・この考え方や方法は、PD 以外にも役に立つと思います。
- ・付箋を使った内省の方法。
- ・自分が行っている業務の見直しを、これから進めていかなければならない事が、はっきりと見えてきたと思います。
- ・自分の関係している事を「振り返り」により可視化して、無意識の行為を目標につなげられることが大いに役に立った。
- ・本学で TP の導入を考えていますが、受講して、TP とは何か、具体的なイメージをもって少し理解できました。今後の活動に大変役立ちます。
- ・TP の作成の仕方（今行っていることから理念へ）がよく分かりました。
- ・一見すると個別にとどまるかに見える改善が、組織全体の改善につながる可能性を確認できたこと。
- ・具体的にどうやって TP を作成できるのか。ワークショップ形式での方法が分かったので、今後もやっていきたい。
- ・自分の授業を具体的に振り返ることのできるツールだと思った。学外に教育力をアピールする良い方法だと感じた。
- ・即実践可能である点が良い。

3. わかりにくいと思ったこと

- ・メンターの役割。
- ・メンターが関係組織から出た場合に、利害が絡まないのか、個人の内面を表現するだけに気になった。
- ・文章化していく時のポイントなど実践しながら学びたかった。
- ・ワークショップを受けないと理解できない点（逆にワークショップが理解の助けになるが）。

4. セミナーについての意見・感想

- ・プレゼンテーションが非常に良かった。
- ・講義を聞いているだけでなく、実際にワークショップをしたことで理解が深まりました。
- ・ワークの時間をもっと長くしてほしい。
- ・学生が興味を持つ Topic があってもいいと思う。このプログラムが現役の学生と教員の対話の場として使えないだろうか。
- ・毎回とても有意義な内容です。大学教育の質向上のため、これからもよろしくお願いします。
- ・実際に文章化するまでのワークショップもやっていただければ参加します。また他の教職員にも広めるための動画があるとなお良いです。
- ・参加してとても良かった。FD で活用できる日が来ればうれしい。質保証という今のニーズにマッチしたセミナーで、有意義だった。

PDP #8 大学の危機管理

—ヒューマン・エラーとリスクマネジメント—

(2013.1.22)

回答者属性(N=23)

【職階】教授(2)/准教授(1)/講師・助教(0)/管理職教員(学長～学部長)(0)
博士課程(2)/職員(部長・課長以上)(4)/職員(係長・主任・一般職員等)(5)/その他(7)/無回答(2)

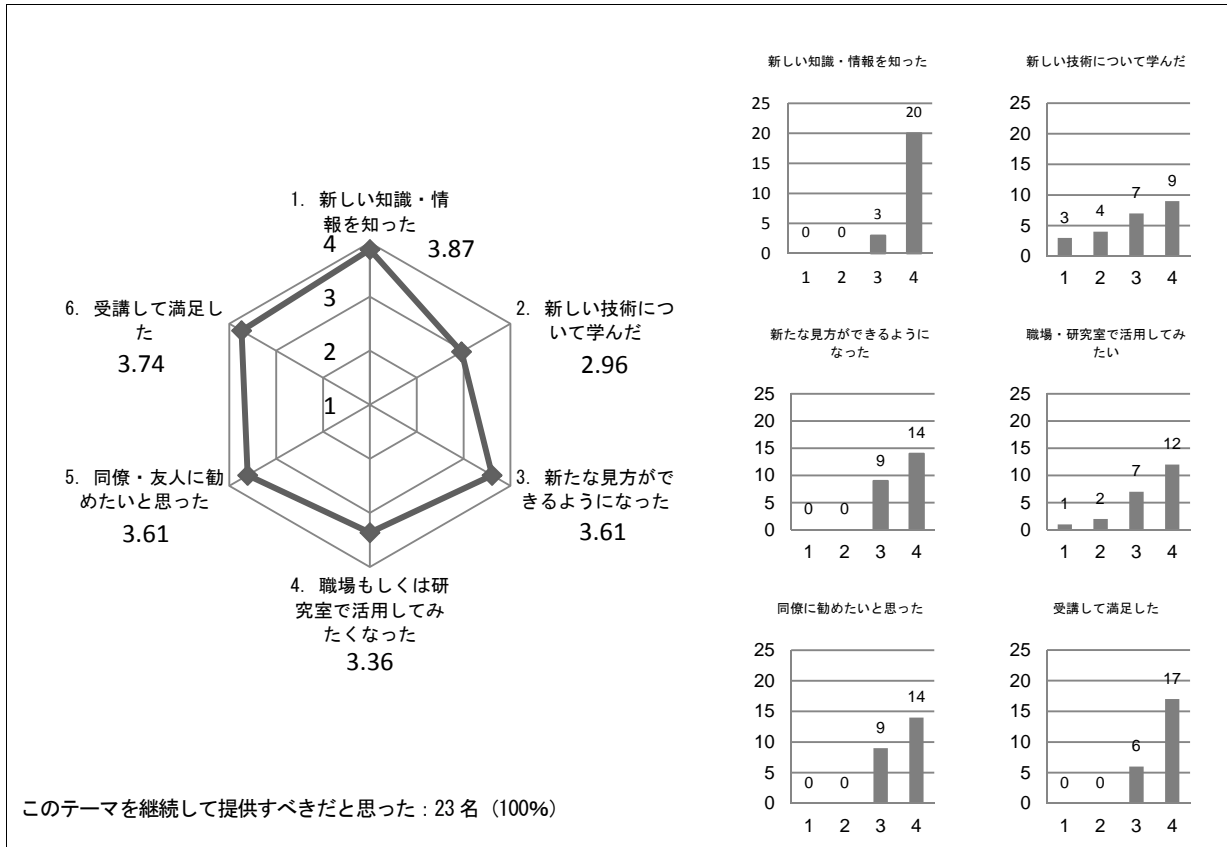
坂田 仰先生 (日本女子大学)

仁平義明先生 (白鷲大学)

【性別】男性(17)/女性(4)/無回答(2)

【学校種】東北大学(9)/東北大学外(8)/無回答(6)

1. 参加した感想 (1. 当てはまらない～4. 当てはまる)



2. 特に役に立ちそうと思ったこと

- ・ミスは完全には防げない、モーゼ効果、ペテロ効果、ミスは副産物 of 効率性。第二講：訴訟が学校に対しても今後どんどん増える、校長の黙認、温情主義の限界。
- ・エラー事例など。訴訟事例。
- ・ミスは防げないものであるが、自分で説明して納得してしまわず、必ず確認することが大切であること。学校と保護者、地域の方々との関係性、意識にギャップが生じていること。
- ・ペテロ効果、違和感を覚えたら確認すべきであること。
- ・学校教育の法化現象。
- ・世の中の流れと人間の思考パターンについて自分では学べないような内容をまとめてわかりやすく学べたと思う。これからの社会の在り方について考えさせられました。

- ・大きなリスクに導く小さなヒントをつかむことの重要性がよくわかった。
- ・ヒューマンエラーの気づき方に気づけたことで、今後の学生指導および業務に活かせると思いました。取り組み方のコツを少しはつかめたと思います。
- ・ヒューマンエラーの考え方と気づき方。学校と保護者（地域）との学校観のギャップについて。
- ・ペテロ効果。保護者と教職員の学校観のギャップが整理され、認識できたこと。法化現象と学校事故訴訟のケーススタディ。
- ・ペテロ効果の発生母体について。ミスは起こるものという認識。
- ・仁平教授のつくられた標語「おかしい？」は一回だけで赤信号。「おかしい？」ときは解釈しないでまず確認するべきだというのは、とても役に立つと思いました。
- ・学校や公立病院のサービス業化の現状を理解した。近年、学校現場で学校側の統率が非常にとりづらくなりつつある現状を理解した。
- ・ペテロ効果。教員の指導、監督の義務化。
- ・「必要と感じなければ記憶しない」とは、まさしくそう思うし、自分自身の意識を今後変えるきっかけにもなるかも。
- ・人がミスを起こす心理的な理由、原因、対策。学校をめぐる法、裁判の状況や扱い方。

3. わかりにくいと思ったこと

- ・第一講：リスクマネジメントとのつながりまではよく見えなかった。第二講：大学ならではの問題もあるはずだが、それはどんなことなのか。
- ・学校現場での事件、トラブルの基本的な対応方法について。
- ・ペテロ効果の定義。
- ・坂田先生の講演については、「学校教育の法化現象」という話であったが、本当に法に基づく教育というのがあるべき姿なのであるかと思った。
- ・教育機関のある種の特長性についての説明。
- ・学校現場での事故は、具体的にどのような対策をとっていけば良いのか。

4. セミナーに関しての意見・感想

- ・大学のリスク管理に関しては、まだまだ多くのテーマがあるはずだと思う。シリーズ化してみるのもよいと思われます。
- ・坂田先生にご講義いただいた内容は、特にこれからの大学運営の中でも重要な問題と感じました。
- ・是非、本日のテーマで全校各地の大学で講演セミナーを実施していただきたいと思います。
- ・人間性と資本主義、2つの相反するものがこの先どう折り合いをつけていくのか、世界の動きが気になります。
- ・動画配信により、他キャンパスでも受講できるようにしてほしい。
- ・私の職場でも「ミスは意識の問題、姿勢の問題、真剣さ」というのが多くの管理職の考え方です。仁平先生、これからもがんばってください。ありがとうございました。
- ・貴重なお話で勉強になりました。ありがとうございました。

シリーズ4. 学生を指導する

PDP #11 学生のための心理・教育的支援—学生相談の基礎知識—
(2012.8.28)

池田志義先生(東北大学高等教育開発推進センター)
堀 匡 先生(東北大学高等教育開発推進センター)
佐藤静香先生(東北大学高等教育開発推進センター)

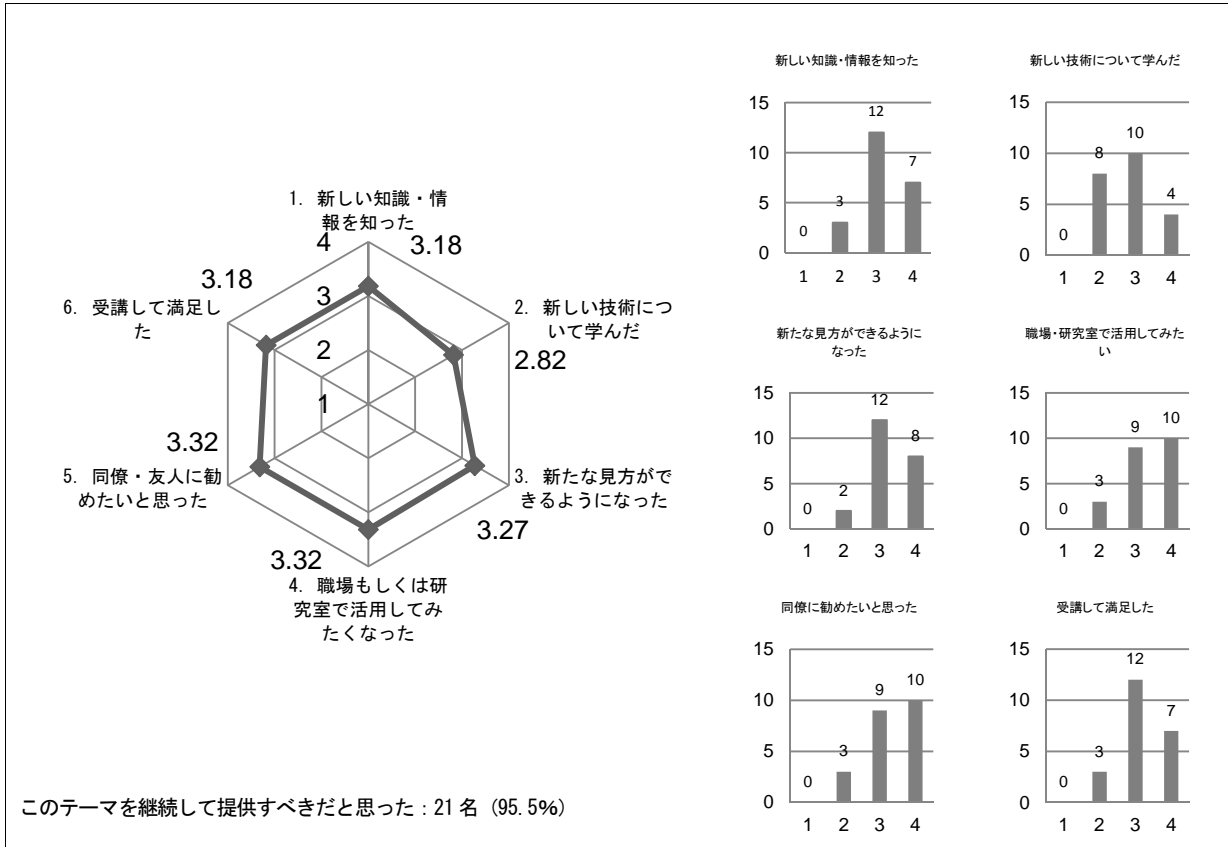
回答者属性(N=22)

【職階】 教授(4)/准教授(2)/講師・助教(3)/管理職教員(学長～学部長)(0)
博士課程(3)/職員(部長・課長以上)(1)/職員(係長・主任・一般職員
等)(7)/その他(2)/無回答(0)

【性別】 男性(10)/女性(12)/無回答(0)

【学校種】 東北大学(12)/東北大学外(7)/無回答(3)

1. 参加した感想 (1. 当てはまらない～4. 当てはまる)



2. 特に役に立ちそうと思ったこと

- ・具体例の紹介。
- ・大学生の時期ごとの問題点が明確に理解できた。「ひきこもり」は家庭との連携が重要との意識。保健センターと学相との関係が明確になった。
- ・学内での連携の重要性和、日頃から相談しやすい信頼関係を構築しておくことの重要性を再認識できたこと。
- ・傾聴の姿勢が重要なのは知っていたが、何かしらアドバイスをしないといけないと思った時に「くり返す」という手法があることを学んだ。
- ・精神科等の専門機関を薦める際の手法がとても参考になりました。
- ・学生対応について、PDブックレットも役にたちそうだった。
- ・全体として有用な情報がたくさんありました。
- ・ブックレットが併用されているので、資料の把握が容易だった。

3. わかりにくいと思ったこと

- ・具体例に挙げられたような人がどのくらいいるのか、全体の殆どなのか、一部なのか、一つ情報があると希望がもてます。
- ・不登校、引きこもりについて、もう少しこころの病気との関連も知りたかった。

4. セミナーに関しての意見・感想

- ・統計上は統合失調症の人が140人いるらしい。実態はどうなのか？具体的な現状が知りたかった。学内限定でいいので、ある特定の現状があって問題になっているという情報を公開すべきである。今回のセミナーは大事なテーマであるが、講演者がこのテーマが非常に深刻な問題だ、という緊張感をもって発表していなかったように思える。東北大学は他の大学と比べると平和なのではないか。
- ・動画について、①どこに公開するのか、②どの部分だけ撮影されているのかをはっきりして欲しい。私自身、ネットに公開されるのは嫌なので。講演(講演者+スライド+音声)のみは配信しても良いが、後姿さえ映りたくないです。質疑応答部分も音声そのままではなく、文字媒体にして配信して欲しい(もし配信するなら)。

- ・今回の内容をより多くの教職員に受講してもらい、理解を深めて欲しい。
- ・総論的なことが多かったような気がした。一つのテーマで深くいっても良かったのでは。
- ・今回の様なテーマでは、具体例を多く用いて、対象の実際の結果等を（成功、失敗ともに）紹介する様な企画も役に立つのではと感じました。
- ・内容は良いですが、とりえずマイクはあった方が良いと思います。聞きごたえがあるだけに、声が小さいと聞こえづらいです。
- ・今回の話者は3人も発話が聞き取りにくかったため、そういう場合に備えてマイクを併用して欲しい。
- ・相談室の利用広報について、当事者ではなく第三者からでも良いと思う。これは敷居を低くする方法としてとても有効かもしれないと思いました。ただ、何とからしいやうわさの類も増加した場合の対処も考えていかなくなるかもしれない、その点は今後の課題として捉えていく必要もあるかもしれないと思いました。どうもありがとうございました。
- ・私は、小、中で、校内組織、保護者、スクールカウンセラー、相談、医療機関、生徒指導、教育相談部、特別支援等をコーディネートし、連携し、児童生徒の問題、家族の問題が解決、改善できるよう努めてきた。マネジメント教育、エンカウンター等もやってきました。大学でも必要だと感じました。現在は専門学校勤務ですが、保健センターで対応したいと思います。（養護教諭）

**PDP #10 学生のための心理・教育的支援
—発達障害学生への視点—**

川住隆一先生（東北大学教育学研究科）

(2012.11.26)

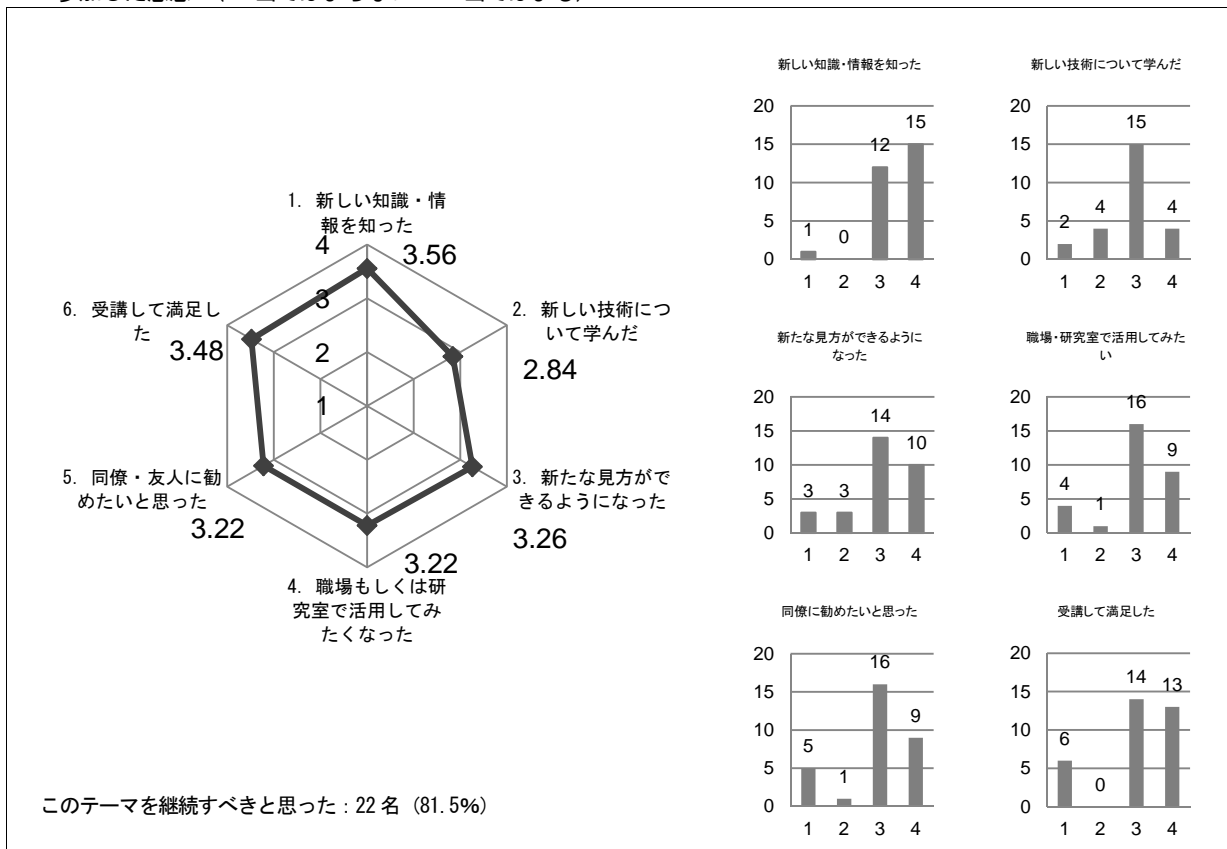
回答者属性(N=27)

【職階】教授(5)/准教授(2)/講師・助教(2)/管理職教員（学長～学部長）(0)
博士課程（1）/職員（部長・課長以上）(4) /職員（係長・主任・一般職員等）(7) /その他（4）/無回答（2）

【性別】男性(19)/女性(7)/無回答(1)

【学校種】東北大学(13)/東北大学外(11)/無回答(3)

1. 参加した感想（1. 当てはまらない～4. 当てはまる）



2. 特に役に立ちそうと思ったこと

- ・わかりやすい内容でしたので知識がなかった自分にもりかいしやすかった。継続して学びたいと思った。
- ・小・中・高の教育にも活かせると思った。特に年齢を重ねるに従って進路相談を丁寧にやるべきだと感じた。学力向上と同じくらいコミュニケーション能力を育ててやる努力が必要だと思う
- ・「先送りしない」という概念
- ・ミスマッチを修整するために高校との連携が重要だということ。「障害受容」を基本に置いて支援していくこと。
- ・クールダウンするための小部屋等の確保、試験中のヘッドフォン等発想を変えること。「こだわり」を支援の糸口にする。心身症になっている多くが発達障害であること。まずは大人が差別的に見ない肯定的に見る姿勢多くの文献があることを知った
- ・障害をもっているか否か判断する点で。
- ・発達障害学生の困難さの理解
- ・学生にあった支援、文書での理解をさせる
- ・障害の理解と対応について

- ・他大学の取り組みが大変参考になった。多様な症状について知見を深められた。ぜひ紹介された種々の文献を調べてさらに理解を深めたいと思う
- ・様々な連携が必要であること。大学も就労支援に取り組む課題を見出していること。サポートの問題をきちんといちづけなければならない
- ・自分が考えているレベルよりも現実はずっと大変であるという事実。
- ・多くの人が問題意識を共有できる場となっていて良かった
- ・4つの支援→3つの支援レベル(ブール学院大学 事例)
- ・行動特性に対する理解は深まった
- ・口頭で指示を伝えるより、メモ、文書でマニュアル化するのが良いという点
- ・症状・特徴などよく理解できた
- ・発達障害を持つ学生に対する接し方
- ・大学側でまじめに取り組んでいることがわかった
- ・本学で発達障害の学生が何名かいるが、今回の講義により学生とのかかわり方(特にハンドブックを参考に)の知識を学べた
- ・背景の理解
- ・情報の入手先

3. わかりにくいと思ったこと

- ・進学の段階では困らなかった学生が大学院や就職のとき、苦勞しているということ、それだけ対応しづらい問題となっている原因
- ・具体的な対応法
- ・障害を認めようとする学生対応
- ・実際的な対応のしかた、連携の実際
- ・実際の対応と研究室・職場での日常性。支援内容についての具体的なこと。
- ・どのレベルが発達障害なのか、よくわかりません。障害のない学生への支援、どうすべきか。
- ・個別の事例の多さ複雑さにどのように対応するか、考えるだけで気が重くなった。多くの困難さをかかえる人の SOS はどこに届くのか・・・?
- ・「特別支援授業」の具体的な支援方法を知りたい。ミスマッチをどう解決していくのが、難しい課題ですね。
- ・そのような学生への対応について詳しく知りたかった
- ・ご質問にもありました、発達障害か否かの「見極め」あるいは「診断基準」の部分の理解が難しいように感じました
- ・具体的な対応・対処方法についてもう少し踏み込んでほしい
- ・全体的にもっと濃い内容を希望したい
- ・就労支援について

4. セミナーに関する意見・感想

- ・教員研修、教員採用の面から、今後ご教示いただきたい
- ・先生、どうもありがとうございました
- ・学生同士のピアサポート、教職員の理解の大切さ(ワークショップ開催)を感じる講演内容でした。行動改善は期待できるという川住先生の温かいお言葉に学生支援への光を感じました。とても有意義な講演でした。次回も楽しみにしております。ありがとうございました。
- ・生活上の不適応が改善された。事例があると素敵に思われる
- ・発達障害なのか性格、くせなのかの見極めはとてむずかしいと思います。事務の窓口担当にはもっとこの事を知らせておく必要があると思います。
- ・時間がもう少し長いと良いと思いました
- ・とにかく継続してやってほしい。とくに、教授レベルの方の”教育”が必要だと考えます。
- ・発達障害について、広く社会全般の認知、理解が深まっていない。東北大学の学生でさえも多く、疑わしい学生がいると伺い、これからの日本全体の問題として全員で考え放置せず巻き込んでいくしかない。
- ・最近急激に増えているという「広汎性発達障害」について勉強する機会がありましたら嬉しく思います
- ・対処方法についての具体的なことを学びたいと思っております
- ・現在では違うのかもしれませんが、2009年にASのことで学生相談所に行ったところ、相談員にあまり相手にされずに終わりました
- ・ゼミナール、実験棟の集団で行う授業の際に、発達障害の学生も一緒に行っているものなのか?別途、個別でマンツーマンで対応すべきか?
- ・時間の設定をもっと遅くして実施
- ・後日動画でも聴講できるようになれば便利かと思います

(2012.12.17)

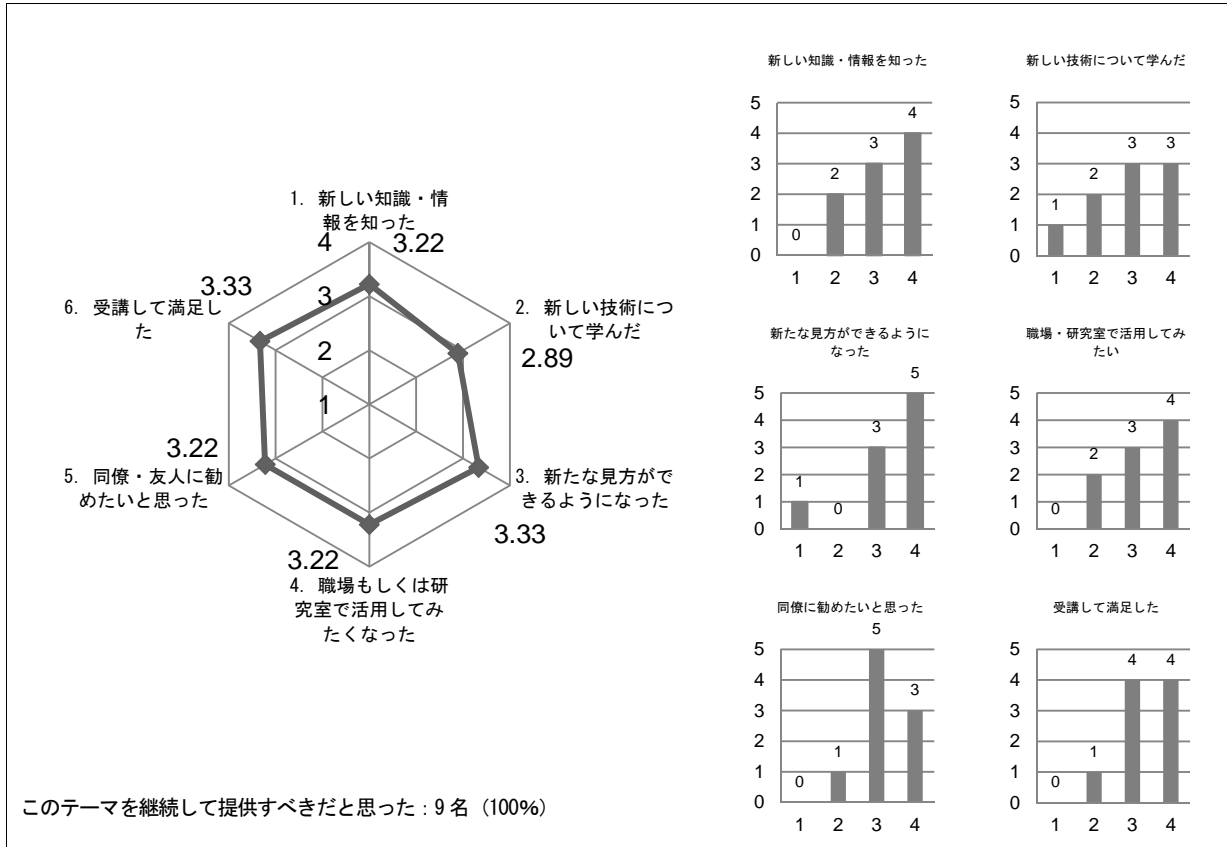
回答者属性(N=9)

【職階】教授(1)/准教授(2)/講師・助教(2)/管理職教員(学長～学部長)(0)
 博士課程(0)/職員(部長・課長以上)(0)/職員(係長・主任・一般職員等)(0)/その他(4)/無回答(0)

【性別】男性(5)/女性(4)/無回答(0)

【学校種】東北大学(7)/東北大学外(2)/無回答(0)

1. 参加した感想 (1. 当てはまらない～4. 当てはまる)



2. 特に役に立ちそうと思ったこと

- ・実際にグループワークをしてみて、学生の気持ち分かりました。グループ内の役割分担が自然に決まるものか、リーダーシップをとる人が必要か、その場になってみての判断の大切さが分かりました。実際にやってみて、授業に組み込むワークショップの形式はとて素晴らしい考えだと思いました。
- ・自己開示に関するアンケート結果が興味深かったです。
- ・いつも教師の立場で、何気なくやってみて、と思っていることが、意外に学生には引っかかっていることが分かった。今後の指導の役に立てたい。
- ・授業としての学生交流の方法。
- ・線引き、空間設定、ルールを決めることが大事と分かった。大学院生に自己責任。
- ・留学生の声を聞くこと。研究や授業以外の場での交流もできればと思った。
- ・授業を公開して、組み込む。
- ・欧米とアジアの留学生の違いが分かった。

3. わかりにくいと思ったこと

- ・他のメンバーの人たちが異文化コミュニケーションの受講生だというのが最初は気付きませんでした。
- ・留学生の内わけがわからない。過度の一般化はあまり意味がない。個別の事例をもっと出してほしい。
- ・学問的な言葉で話をされても分かりにくい。
- ・実際に自分の仕事の中で展開すべきこと、生かすことが難しい。

4. セミナーについての意見・感想

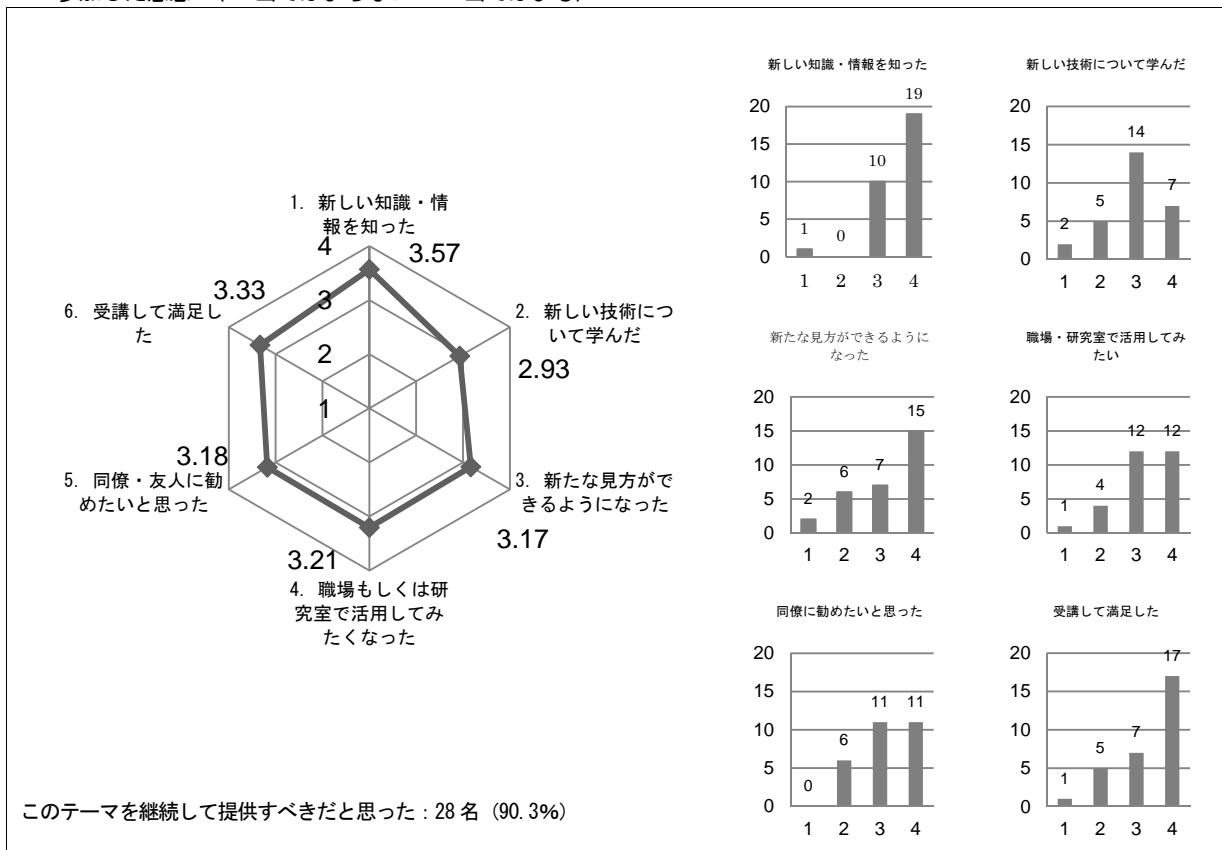
- ・学生の意見を直接聞くことができた。貴重な経験ができました。
- ・意識を改革するにはいい機会になったが、明日から何ができるか？考えてみます。
- ・チューターの選定基準がない。また、チューターも育成機関に入ってトレーニングするなど必須。
- ・是非、続けてください。

回答者属性(N=31)

【職階】 教授(10)/准教授(5)/講師・助教(3)/管理職教員(学長～学部長)(1)
 博士課程(2)/職員(部長・課長以上)(1)/職員(係長・主任・一般職員
 等)(1)/その他(6)/無回答(2)

【性別】 男性(13)/女性(16)/無回答(2)
 【学校種】 東北大学(17)/東北大学外(9)/無回答(5)

1. 参加した感想 (1. 当てはまらない～4. 当てはまる)



2. 特に役に立ちそうと思ったこと

- ・外国語教育のカリキュラム構成、大学としての施設設備の提供
- ・Shaeran 先生の EnglishLearningResources、中嶋先生の AIU でのカリキュラム構成や AIU での実践
- ・講演 2 のお話は外国語教育の基本を考えるうえで当然のことであるが、あらためて考えるいい機会となった。
- ・学生の自習を促す教師側のスキルメソッド等の重要性。グループディスカッションも学生側にやりたいという意欲があることに気付かされたこと。
- ・中嶋先生の外国語教育の在り方
- ・国際教養大の切り口の新鮮さ。CEFR について。小中高における外国語教育の在り方。
- ・CEFR について。中嶋学長の講義。
- ・教授の講義内容と学生が習いたいこととの差
- ・言語教育で共通の問題
- ・言語教育を学生や社会のニーズに合ったコミュニケーション能力の育成という点に重点を置いて意識改革をしなければならないこと。
- ・国際教養大学の説明。
- ・言語能力はコミュニケーション能力とは違うについてもっと聞きたかった。

3. わかりにくいと思ったこと

- ・CEFR の発表がハンドアウトとの連携がスムーズではなく分かりにくいところが多かった。基調講演と今回のシンポのタイトルの関係。
- ・基調講演は少し聞き取りにくい部分があった。
- ・CEFR と複合語の説明。
- ・speaker の内容が align されていない
- ・CEFR の説明。

- ・ペーパー読みの発表は分かりにくい。

4. セミナーについての意見・感想

- ・パワーポイントのデータをどこかで公開いただければ職場で紹介しない。Shaeran 先生の報告はハンドアウトがなかったので、誤解のないように正確に同僚に伝えればと思う。
- ・発表者がスクリーンに映し出すものとハンドアウトが少なくとも同じようであると助かる。書き写すのに時間がとられる。字が小さくスクリーンそのものが読めない。
- ・学内向けの宣伝が弱い。全学教育外国語科目の非常勤講師に案内があったが、学内の全学教育関係者にも大いに資するところがあるため、教務審議会や外国語委員会の後援を得て全学教育 FD に準じた活動として宣伝してみてもいい。
- ・外国語教育の課題は分かったが、大学のカリキュラムにおいてどう解決できるのかの議論を聞きたかった。
- ・結論が興味深かった。語学センターはつくってほしい。英語・日本語のライティングセンターがあると便利だと思う。
- ・マンネリ化しやすい教育業務に対して刺激になった。PD ブックレットが興味深い。
- ・語学センターの設置は重要であり、学生が自発的に学べる施設は必要。EAP のカリキュラムの導入は重要。ファウドレイング等の寄付金を取り海外に行くチャンスを作ることが重要。
- ・国際教養大学の大学経営の特色について参考になった。本大学の外国人専門教員の採用も 3 年の任期制であるべき。
- ・具体的な improvement が今必要であり、そのために何がなされなければならないかの視点から再構成してみてもいい。
- ・M601 左側のプロジェクタのピントが甘くなっていた。
- ・外国語教育にはディスカッションが不足。読解力はあるが、会話力がない。東北大での教育に期待。
- ・カメラマンが動きすぎて集中できない。フランクな意見を出すために所属などを言うのはやめてほしい。
- ・冒頭に東北大学の外国語教育の取組について組織体やカリキュラムなど少し具体的にプレゼンがあるとよい。
- ・それぞれの speaker が使ったスライドをアップするか googledoc で参加者が共有できるとよい。
- ・言語および言語教育の重要さは十分知っているため発表はいらぬ。研究会ではないので、どうすれば教室での語学授業を活用し、学生たちにより主体的に語学勉強に取り組ませることができるかということに絞って報告者、報告内容を選択すべきではないか。

PDP #12 分科会 A-1 「語学の授業」からの脱却：いくつかの提案 (2012.7.29)

志柿光浩先生 (東北大学国際文化研究科)

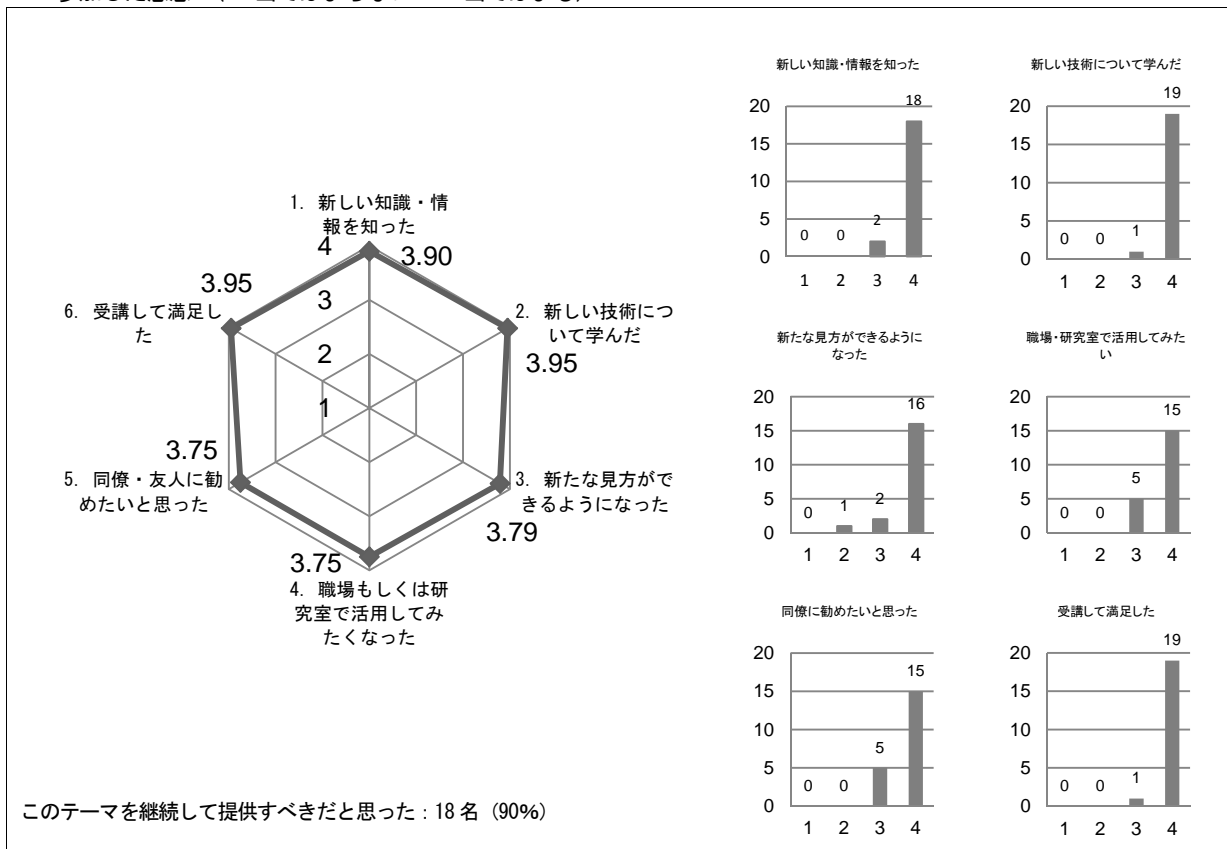
回答者属性(N=20)

【職階】 教授(4) / 准教授(6) / 講師・助教(2) / 管理職教員(学長～学部長)(0) / 博士課程(0) / 職員(部長・課長以上)(0) / 職員(係長・主任・一般職員等)(0) / その他(4) / 無回答(4)

【性別】 男性(7) / 女性(10) / 無回答(3)

【学校種】 東北大学(7) / 東北大学外(6) / 無回答(7)

1. 参加した感想 (1. 当てはまらない～4. 当てはまる)



2. 特に役に立ちそうと思ったこと

- ・IT を使った教材作成

- ・英語に関しては、教室でできることよりも教室外ことの方が多くと考えますがそれでも外での活動を支える工夫がたくさんあると思った。
- ・学習空間の設計。
- ・とてもいいアイデアを取った。
- ・ライティングとスピーキングのビデオ撮りはたいへん興味深かった。指示文をパワーポイントで画面に出していただけたのも分かりやすかった。
- ・無理をしないという教え。精神的負担をかける必要はないという示唆があり、これが良いと感じた。
- ・実際の授業でされていることなので何よりも分かりやすかった。
- ・QTRexを使った自分のスピーキングの録画、評価。
- ・教室外での自学自習の方法
- ・デジタル教材の有用性、実用性
- ・ディクテーションや録画など新しいテクニック。
- ・教科書以外の教材、教授法
- ・メディアの使い方
- ・IT(デジタル) 技術の授業への活用
- ・デジタル教材やPCを用いた能動的ディクテーション活動
- ・ラクストエディターで作文してしてから録音する方法は効果的であると思う。
- ・PCを使った外国語教育の方法について

3. わかりにくいと思ったこと

- ・学習者の評価方法

4. セミナーに関する意見・感想

- ・多角的内容で面白かった。授業の内容も実際に見せていただき参考になった。
- ・教室の案内が不十分。前日終了前に翌日の案内がほしい。
- ・従来の語学授業からの脱却を考えるための有意義なセミナーだった。
- ・教材の準備、作成が素晴らしい。学習者が主体となる環境に感心した。
- ・実践と理論の組み合わせが分かりやすかった。
- ・IT 技術の授業の応用、TA の活用

(2012.7.29)

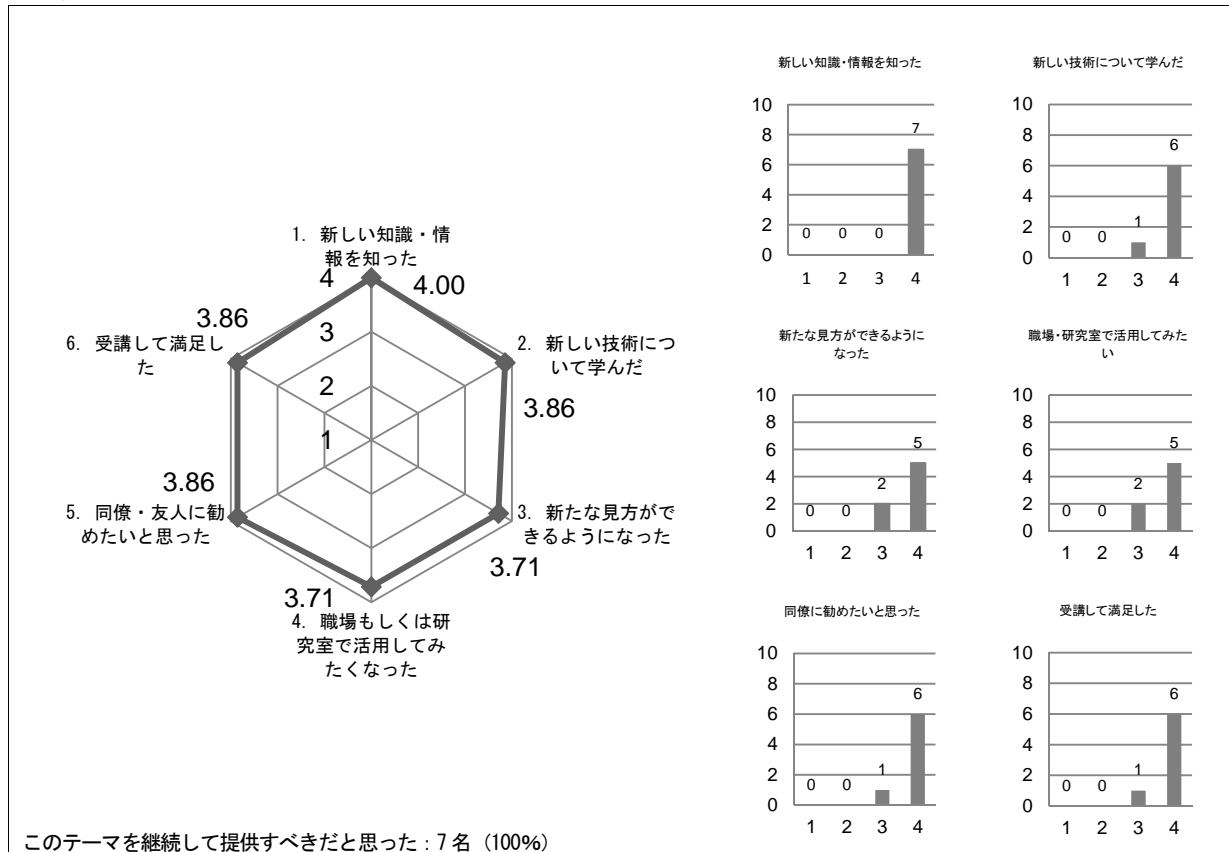
回答者属性(N=7)

【職階】教授(0)/准教授(2)/講師・助教(3)/管理職教員(学長～学部長)(0)
博士課程(1)/職員(部長・課長以上)(0)/職員(係長・主任・一般職員
等)(0)/その他(1)/無回答(0)

【性別】男性(4)/女性(3)/無回答(0)

【学校種】東北大学(2)/東北大学外(2)/無回答(3)

1. 参加した感想 (1. 当てはまらない～4. 当てはまる)



2. 特に役に立ちそうと思ったこと

- ・WebOCM の使い方
- ・e-learniy、IT 技術への応用
- ・有効に e-learning を活用するために役立った。WebOCM を取り入れていきたい。

3. わかりにくいと思ったこと (記入なし)

4. セミナーに関する意見・感想

- ・実践的なワークショップで役にたった。
- ・他にも聴講したいセミナーがあり、それがバッティングしてしまったのが残念。動画記録を撮ってあとで見れるようにしていたらとありがたい。

(2012.7.29)

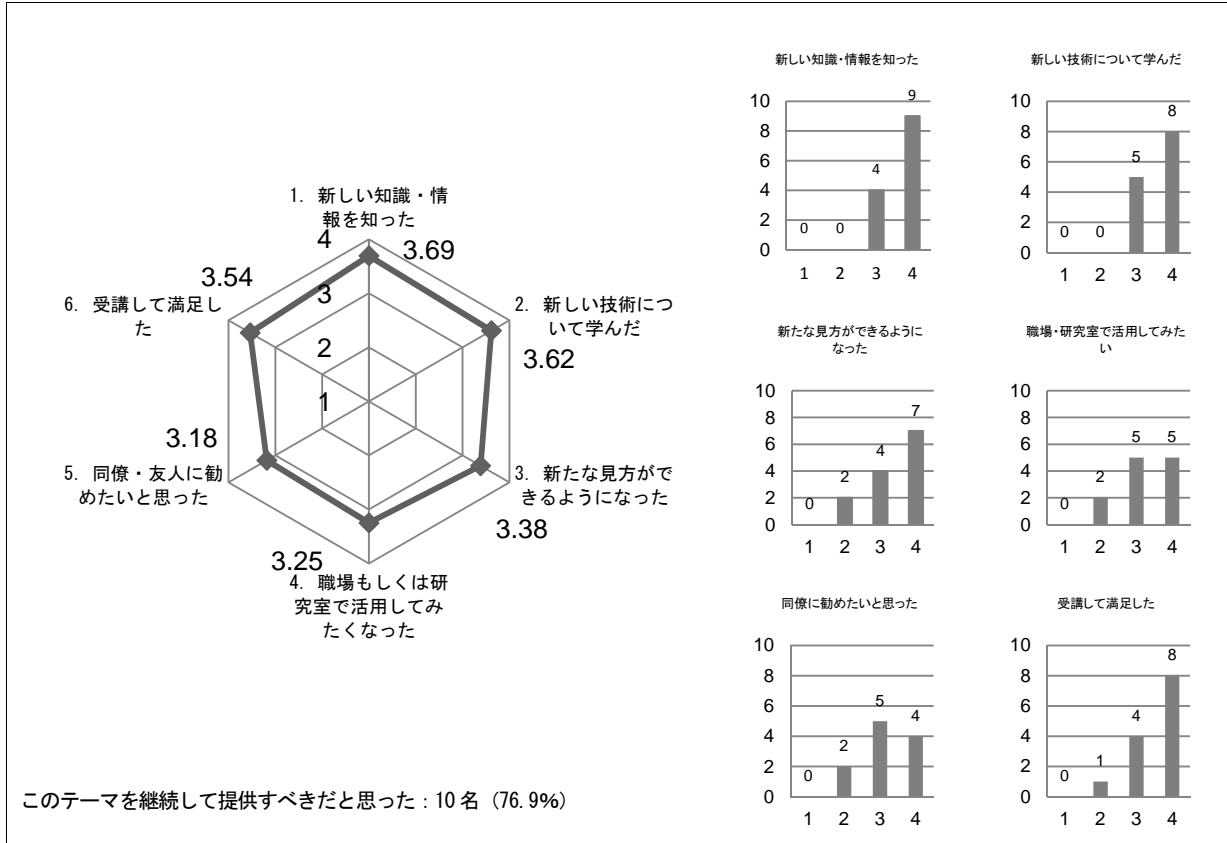
回答者属性(N=13)

【職階】 教授(1)／准教授(1)／講師・助教(3)／管理職教員(学長～学部長)(0)
 博士課程(2)／職員(部長・課長以上)(0)／職員(係長・主任・一般職員
 等)(0)／その他(6)／無回答(0)

【性別】 男性(5)／女性(8)／無回答(0)

【学校種】 東北大学(5)／東北大学外(5)／無回答(3)

1. 参加した感想 (1. 当てはまらない～4. 当てはまる)



2. 特に役に立ちそうと思ったこと

- ・授業の PC の導入の方法
- ・独学ができるところ。模擬テストができること。
- ・eラーニングシステムを活用して中国語授業がという新しい授業法式がとても感心した。
- ・本だけでは分からない発音を聞くことができるのがよい。
- ・とてもデザインのよい中国語教材を作っていた。Eラーニングシステムを使いこなしていच्छやっているのに驚いた。

3. わかりにくいと思ったこと

- ・せっかく CALL 教室で CALL システムを紹介するのであれば参加者が端末を操作して体験できるようにしてほしい。

4. セミナーについての意見・感想

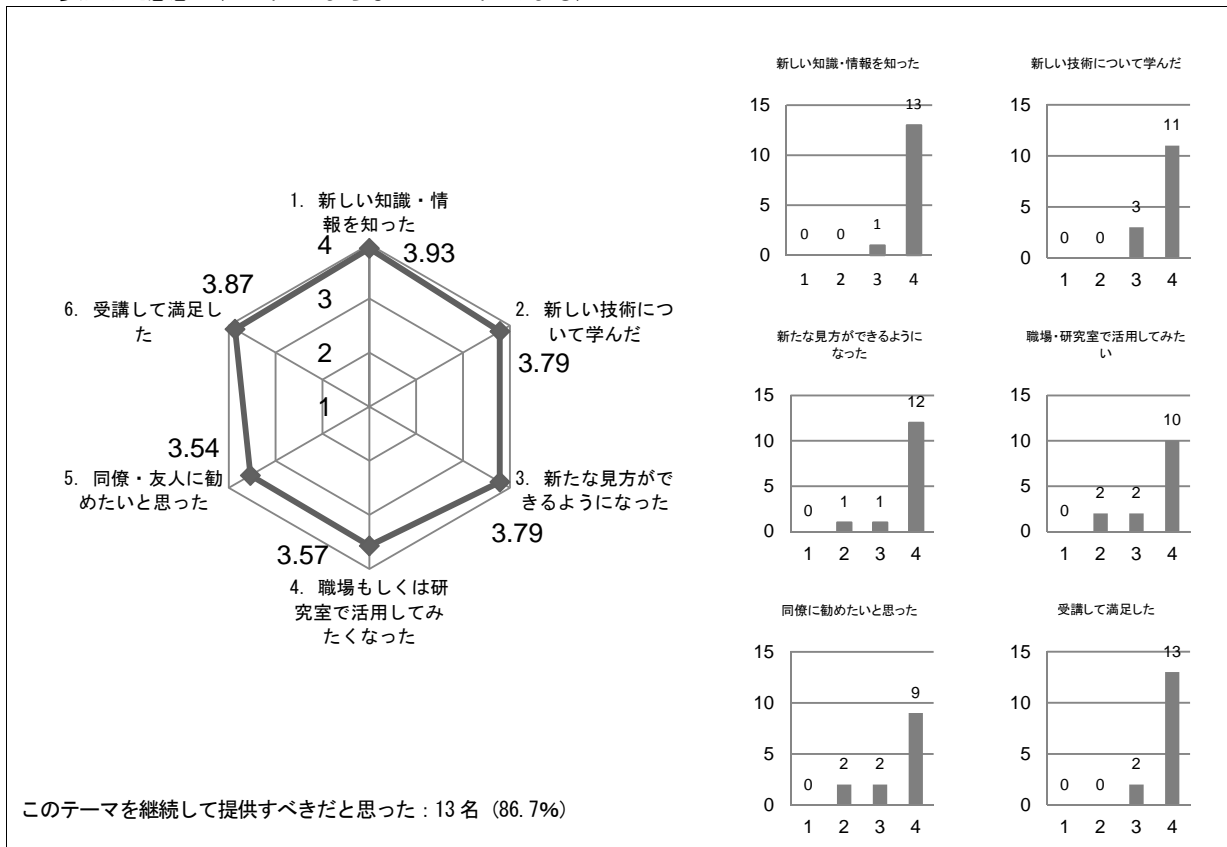
- ・このような形で外国語を学ぶのはやはり制限があると思う。
- ・声調の入力について。
- ・もっと学内で宣伝してほしい。全学教育 FD に準ずる内容なので、学内の参加者が少ないのはもったいない。

回答者属性(N=15)

【職階】 教授(2)/准教授(3)/講師・助教(1)/管理職教員(学長～学部長)(0)
博士課程(0)/職員(部長・課長以上)(1)/職員(係長・主任・一般職員等)(0)/その他(6)/無回答(2)

【性別】 男性(4)/女性(10)/無回答(1)
【学校種】 東北大学(5)/東北大学外(5)/無回答(5)

1. 参加した感想 (1. 当てはまらない～4. 当てはまる)



2. 特に役に立ちそうと思ったこと

- ・多読することにより苦手意識をなくすることができる。
- ・すべてが良い情報源。
- ・多読の意味と多読の実際的なやり方を学ぶことができた。
- ・reading 実際に使ってみよう。また、readingspeed を計ることも生徒たちとやってみようの大切さを学んだ。
- ・いかに学生により主体的語学勉強をさせるかという努力姿勢。
- ・第一日、第二日も役に立つように思った。
- ・input 量の大切さ。
- ・多読の効果について実際に数字を挙げて説明してもらえたこと。
- ・多読と図書館のコラボレーションをもっと発展させて、授業支援に図書館がもっと関われるようなアイデアをもらいました。
- ・speaking に役立つことはよい発見だった。
- ・多読で英語運用能力がアップすることが分かった。

3. わかりにくいと思ったこと

- ・評価の仕方や教員の学生への接し方など初めてだったので分かりにくかった。
- ・多読が英語の勉強法として役立つか否かというアンケート調査については実践前、実践後の統計を知りたかった。役立つと答えた学生が90%以上という結果は学年、学部、男女比もほしかったですし、実践後の TOEIC や TOEFL のスコアの伸び率も知りたかった。

4. セミナーに関しての意見・感想

- ・多読の必要性を感じるとともにディスカッションの必要性を感じた。
- ・今後も同様のセミナーの継続を望む。
- ・非常に面白く楽しかった。東北大で英語科にいる自分もぜひやってみようと思った。
- ・講師の先生方の暖かい雰囲気がとてもよかった。

- ・多読プログラムは果たして初修外国語授業に使用するに適切であるか。
- ・動画配信してください。
- ・図書館の改革に期待しています。
- ・学生だけでなく教職員への良い影響になるといいですね。

PDP #12 分科会 B-2 指導法
(2012.7.29)

古石篤子先生 (慶應義塾大学)

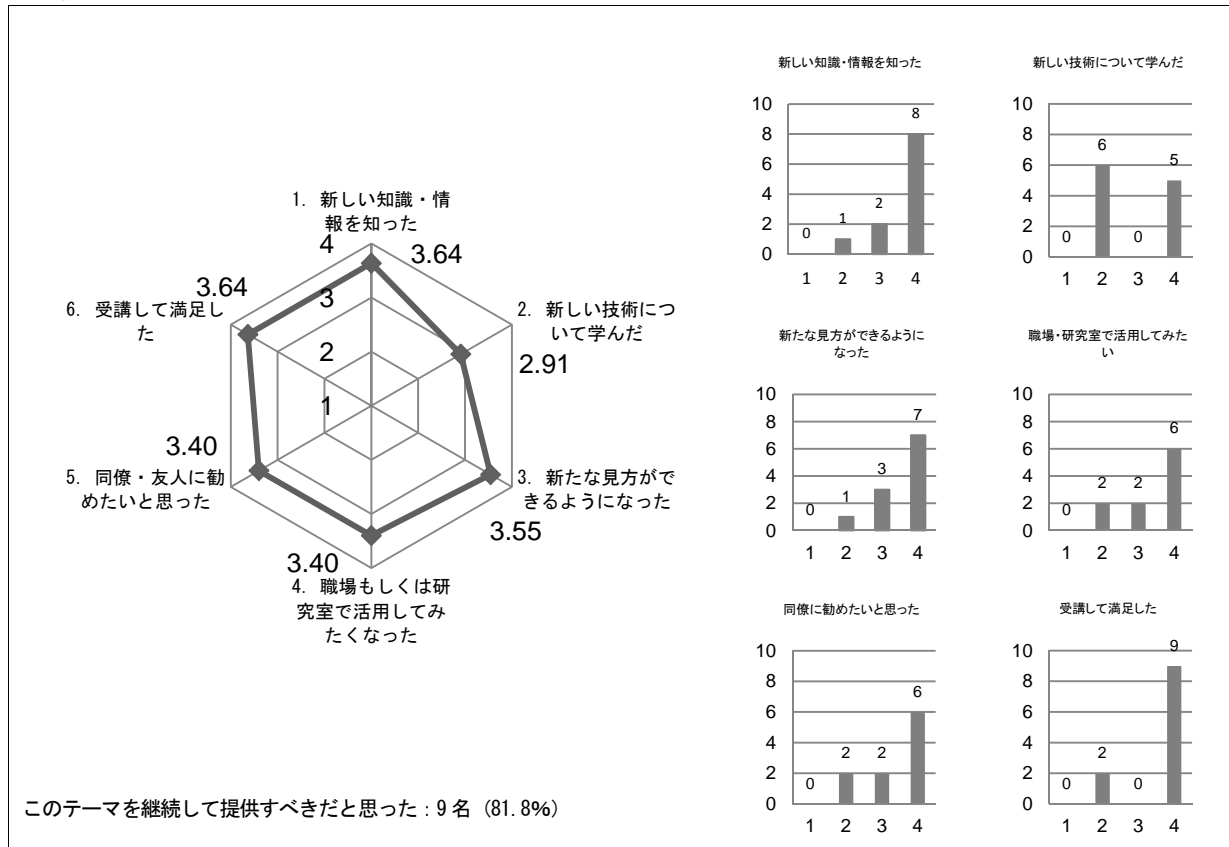
回答者属性(N=11)

【職階】 教授(2)/准教授(2)/講師・助教(0)/管理職教員(学長～学部長)(0)
博士課程(0)/職員(部長・課長以上)(1)/職員(係長・主任・一般職員等)(0)/その他(2)/無回答(4)

【性別】 男性(5)/女性(3)/無回答(3)

【学校種】 東北大学(5)/東北大学外(0)/無回答(6)

1. 参加した感想 (1. 当てはまらない～4. 当てはまる)



2. 特に役に立ちそうと思ったこと

- ・教授の古石先生だけでなく渡慶次さんの進行形の話を知ることができたので様々な意味で役に立ちました。
- ・学生と教師が協働で教材等をつくること。情報を与えることによって関心が確実に高まること。
- ・授業のカリキュラム・デザインの方法
- ・学生による発表と教員による発表が同時に行われたことで教育についての視点が複合的に理解できた。
- ・SFC そのものが意義深い。
- ・慶応大学の外国語教育がどういうものか分かった。
- ・SFC の様々な試みが興味深かった。

3. わかりにくいと思ったこと (記入なし)

4. セミナーについての意見・感想

- ・4年生の渡慶次さんのような語学学習に熱意のある学生を輩出している点は素晴らしいと思う。
- ・意見交換の場があるとさらによかった。
- ・古石先生がご自分の学生を連れてきて発表させたことは大成功だったと思う。
- ・会場が3つに分かれていたが、参加していないところのワークショップが動画等で後から見られるようにしていただきたい。
- ・教育者としては教養>スキルという点に同感した。現在の英語教育は受験英語をはじめスキルになっていると感じる。また、企業もITのスキル、英語 or 他言語のスキルとして、スキルありきになっていることに教育者が疑問を感じることの重要性に注目した。
- ・終了時間をある程度守り、一度区切りを入れてから質疑応答を続けてほしい。

(2012.7.29)

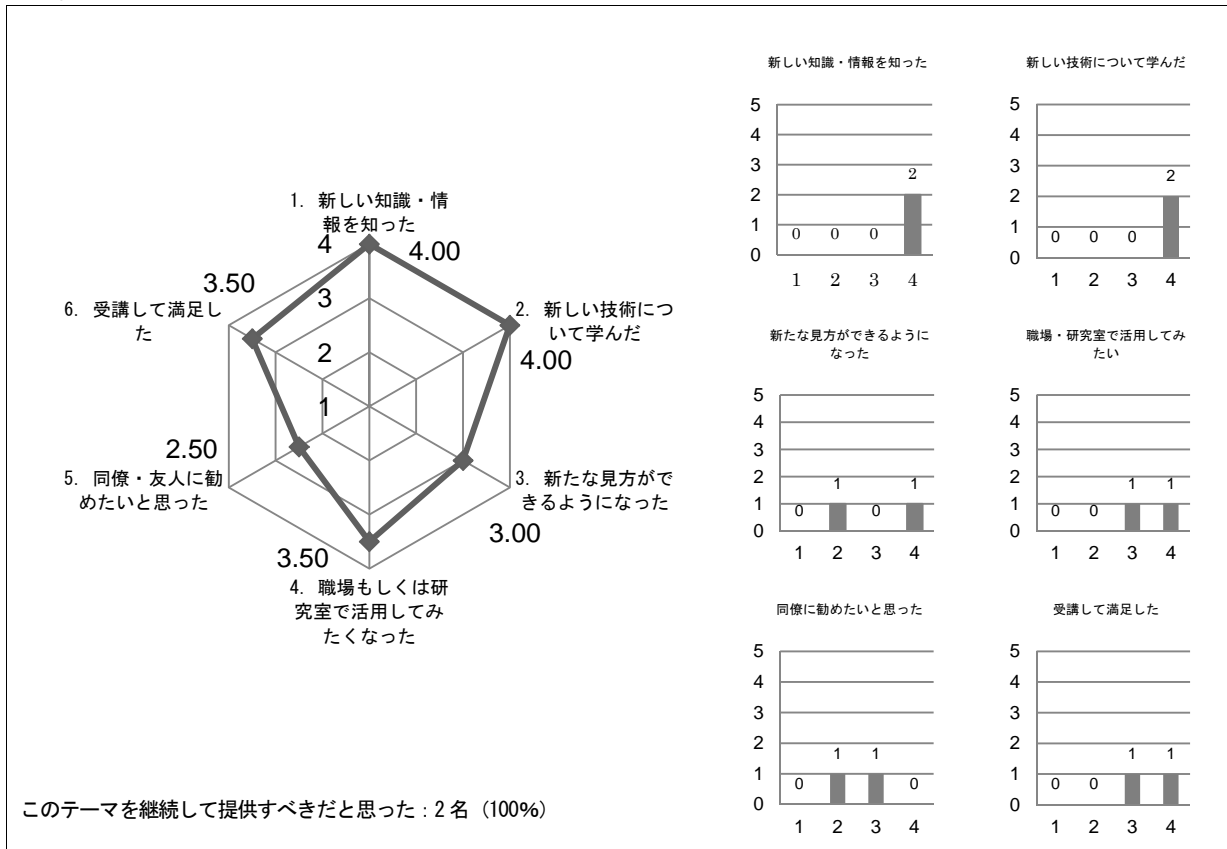
回答者属性(N=2)

【職階】教授(1)/准教授(0)/講師・助教(0)/管理職教員(学長～学部長)(0)
博士課程(0)/職員(部長・課長以上)(0)/職員(係長・主任・一般職員
等)(0)/その他(0)/無回答(1)

【性別】男性(0)/女性(1)/無回答(1)

【学校種】東北大学(0)/東北大学外(1)/無回答(1)

1. 参加した感想 (1. 当てはまらない～4. 当てはまる)



2. 特に役に立ちそうと思ったこと

・中国語の授業運営に関する具体的な提言

3. わかりにくいと思ったこと（記入なし）

4. セミナーに関しての意見・感想

・すべての分科会の資料を一括していただきたい。1時間ごとくらいに会場を移れるようなプログラムにしていただけるとありがたい。

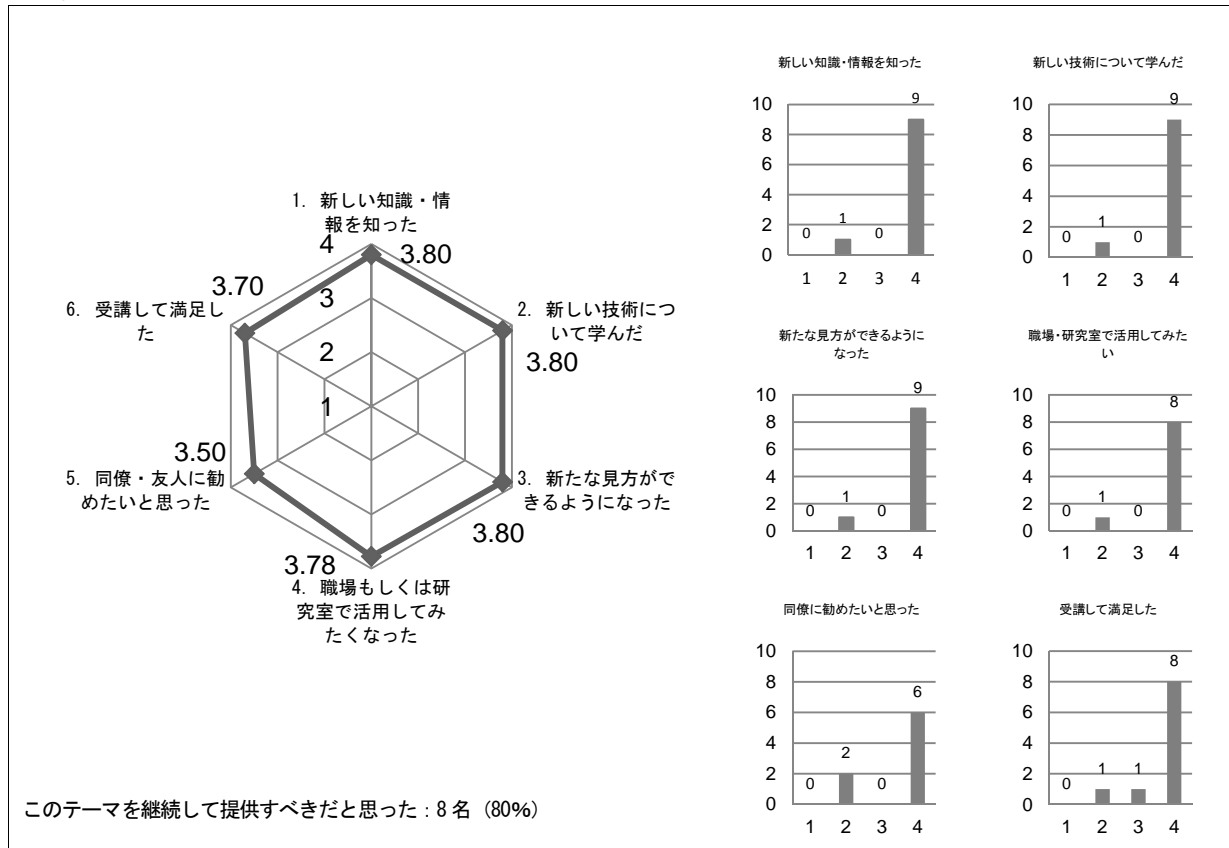
回答者属性(N=10)

【職階】 教授(1)/准教授(1)/講師・助教(1)/管理職教員(学長～学部長)(0)
博士課程(2)/職員(部長・課長以上)(0)/職員(係長・主任・一般職員
等)(0)/その他(2)/無回答(3)

【性別】 男性(2)/女性(6)/無回答(0)

【学校種】 東北大学(3)/東北大学外(5)/無回答(2)

1. 参加した感想 (1. 当てはまらない～4. 当てはまる)



2. 特に役に立ちそうと思ったこと

- ・先生が名前を中国語で呼ぶこと。中国の物語を用いて文化的なことを知ること。
- ・北京大学の姜先生から様々な授業法とテクニックを教わった。

3. わかりにくいと思ったこと (記入なし)

4. セミナーについての意見・感想

- ・中国語を理解したうえで受講すればさらに役立つと思った。
- ・とても勉強になった。
- ・本学の経験が一番多い専任講師の報告がないのが残念。外国語としての中国語をいかに教えるかを報告するならばこの面の参考書はいくらでもあるので、わざわざ招待し報告してもらい意義がない。
- ・講義で使ったPPTを配ってほしい。
- ・模擬授業ということで授業形態を見られるのかと思ったが、そうではなくなりました。ネイティブ教員向けに思えた。ノンネイティブの教員にも得るものはあったが、双方の視点があってもよいと思う。

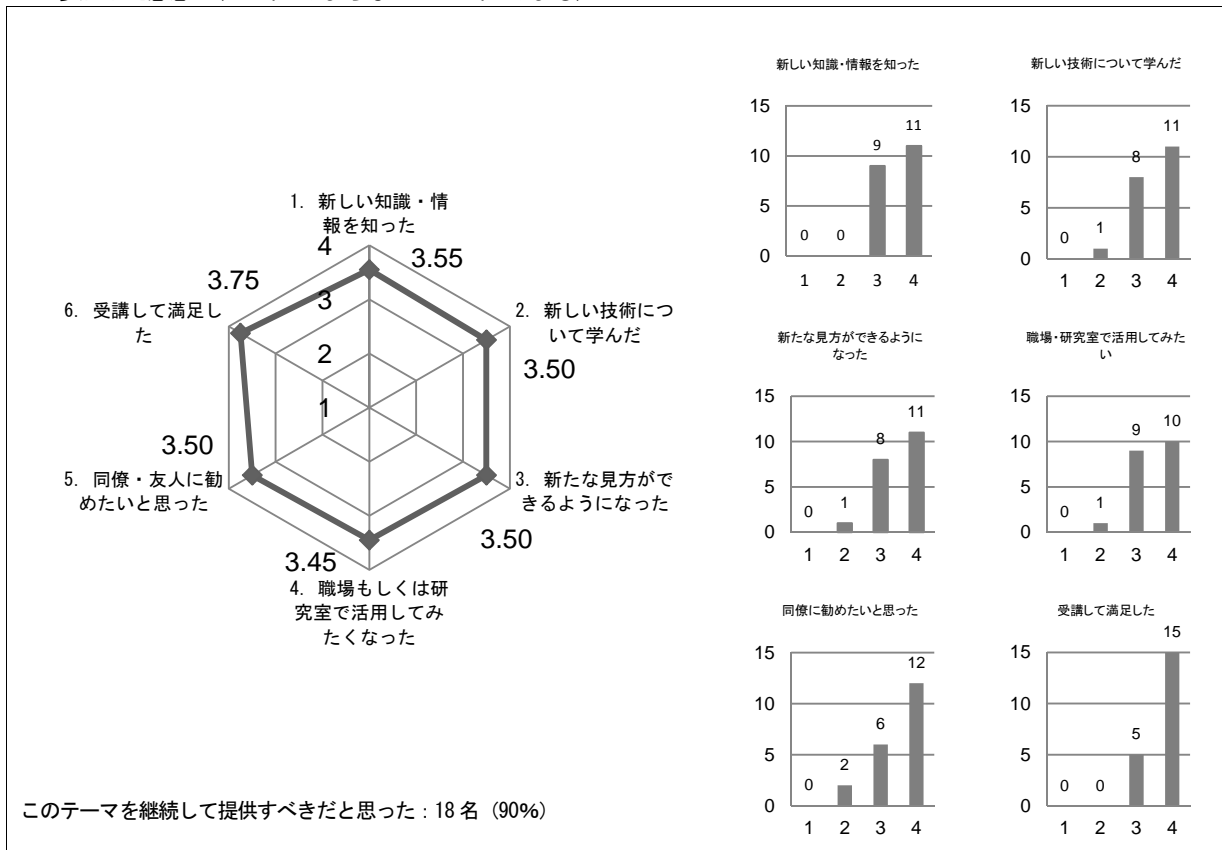
回答者属性(N=20)

【職階】教授(3)/准教授(8)/講師・助教(2)/管理職教員(学長～学部長)(0)
博士課程(3)/職員(部長・課長以上)(0)/職員(係長・主任・一般職員等)(0)/その他(3)/無回答(1)

【性別】男性(15)/女性(4)/無回答(1)

【学校種】東北大学(13)/東北大学外(6)/無回答(1)

1. 参加した感想 (1. 当てはまらない～4. 当てはまる)



2. 特に役に立ちそうと思ったこと

- ・前半はとても分かりやすかった (新しく発見させられたことが多かった)。
- ・シラバスに用いる動詞や表現。講義中に学生に対して使う表現など。
- ・The hints for pronouncing L and R were very easy to understand.
- ・一人一人のコース紹介で、あ、こんなことも言うべきだったとか、あ、こういう言い方もあるのかなど、いろいろ参考になった。また、リズムをもって読むことも役にたった。
- ・音節を意識して発音の勉強が出来たのは大変有意義でした。Positive Reinforcement は、日本語で授業を行う際にも意識すべき大変重要な点だと思いました。
- ・リズムのとり方。
- ・発音についての説明。実際に前に立って、実践すること。
- ・英語でのシラバスの書き方。
- ・V の正しい発音を学んだ。
- ・初めての方に説明する際に、大変役に立つと思います。
- ・指示などで微妙なニュアンスを伝えたいときなど、どの言葉を使えば良いかが分かり実用性があった。

3. わかりにくいと思ったこと

- ・後半の、発音の問題点について、参加者自身が試して直してもらう時間ウェイトをおくほうが良い。
- ・正直、英語がまだまだなので、最初は難しかった。最初の説明は、ゆっくり話していただけるとありがたいです。それから少しずつふつうだと嬉しいです。
- ・発音に特化して、もっと時間を使って欲しかった。
- ・人前で英語を話すことに慣れていないと大変だと思いました。場数を踏んで練習が必要ですね。
- ・V と B で、どっちが V なのか B なのか、わからないことがある。

4. セミナーについての意見・感想

- ・良い講師、良いセミナーでした。

- ・やはり遠いので、配信していただくとありがたいです。1日がかりで来て良かったです。休憩のタイミングも良かったです。
- ・大変有意義でした。ありがとうございました。
- ・例えば実際の授業風景のビデオを見ながらの解説など、より実践的なものの方が良いのでは。シラバスの書き方などはあまり必要ないと思いました。
- ・授業を始める、プリントを配る、指示(レポート提出)などの表現を知ることができると嬉しいです。
- ・Wの正しい発音も教授していただき良かったです。講義内でよく使われるフレーズをもう少し教えて欲しかった。
- ・多くの刺激があった。発表の時間がもう少し欲しい。
- ・学部生で、対象ではなかったが、意義があった。授業以外で使うこともある言葉等も学べ、いつか役にたつと思う。

PDP #14 英語で授業を : planning and Managing Active Learning in English
(2012.10.26-27)

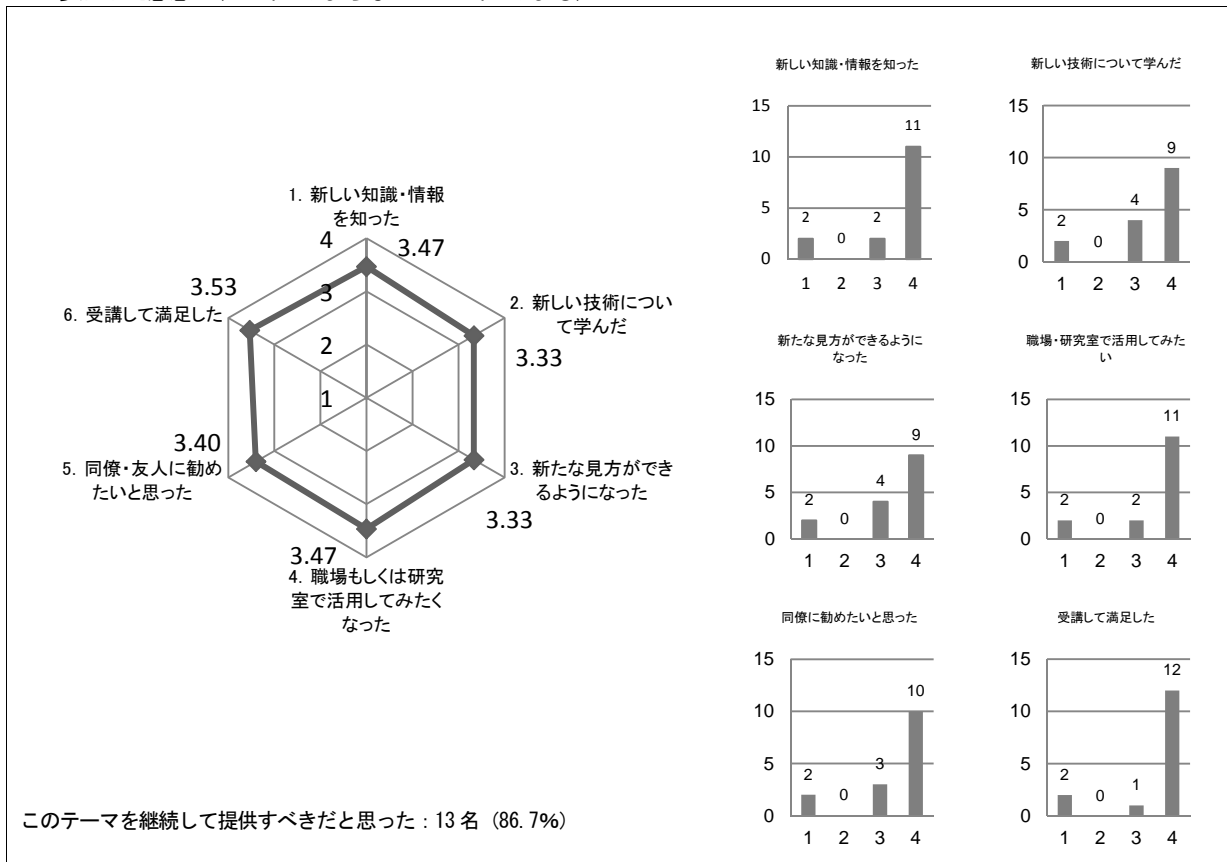
Laura HAHN 先生 (イリノイ大学)
Todd ENSLEN 先生
(東北大学高等教育開発推進センター)

回答者属性(N=16)

【職階】教授(4)/准教授(6)/講師・助教(1)/管理職教員(学長~学部長)(0)
博士課程(2)/職員(部長・課長以上)(0)/職員(係長・主任・一般職員等)(0)/その他(1)/無回答(1)

【性別】男性(10)/女性(4)/無回答(1)
【学校種】東北大学(12)/東北大学外(2)/無回答(1)

1. 参加した感想 (1. 当てはまらない~4. 当てはまる)



2. 特に役に立ちそうと思ったこと

- ・Active Learning is a new word and method for me. In future, I will put it in practical.
- ・グループに分けてディスカッションするのは、使えそうです。属している感覚が大事というのは、あまり考えていなかったもので、新しい視点を得たと思います。
- ・自分が今行っていることを確かめるいいチャンスでした。グループの作り方や、フィードバックのやり方など学びました。
- ・学生の前でどのように立ち振る舞えばよいのか。どのようなアクティビティをすれば効果的なのか。
- ・グループワーク。
- ・アメリカの大学の授業クリップを見て考察する。
- ・概念だけでなく具体的な解決策の例も示されていたこと。
- ・Teachingの技術。
- ・講師が2人いたことは良かった。2人が互いに補充し合っていた。
- ・教育法の第一人者から最新の成果を学ぶことは大変貴重な機会である。

3. わかりにくいと思ったこと

- ・具体的にどうするか。これから考えていかねばならないと思いました。
- ・他のグループがどんな話し合いをしたか、もう少し知りたいと思いました。
- ・Active Learningをどう定義するか(はっきりとした定義はないかもしれない)。
- ・アクティブ・ラーニングの具体例(ビデオクリップがあればより理解が進んだのかもしれない)

- ・具体例があればよかった。
- ・ビデオの音量をもう少し上げて欲しい。

4. セミナーに関する意見・感想

- ・同じテーマでまた受講したいです。
- ・分野に応じてニーズが異なると思うので、対象をもう少し細分化した形でセミナーがあるとよりよいかもしれないと感じました。
- ・英語のコミュニケーション以外にも、「留学生のトラブル事例・解消」などの講義もやって欲しい。

単独セミナー

**PDP #15 Oral Presentation in English:
Preparing for International Conferences
(2013.1.10)**

**鎌田ローレル先生
(東北大学高等教育開発推進センター)**

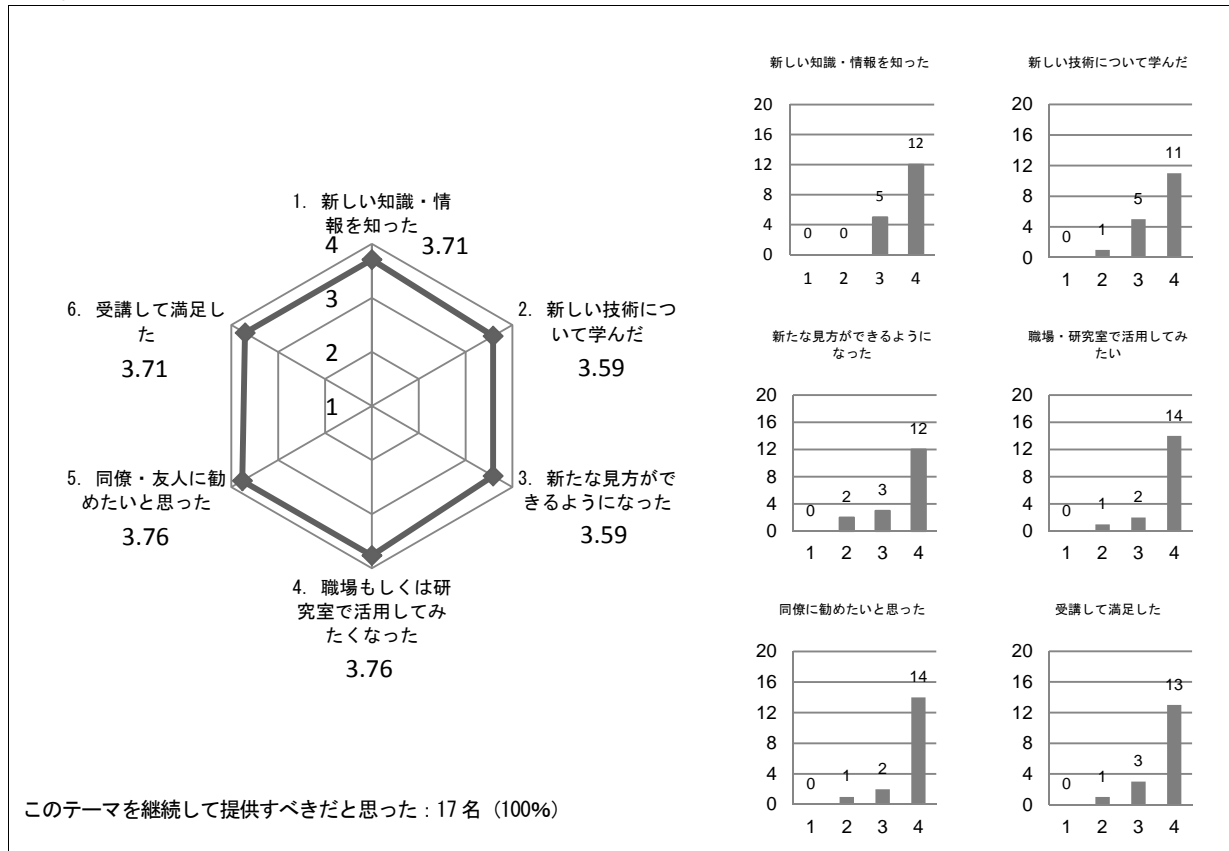
回答者属性(N=17)

【職階】教授(1)/准教授(0)/講師・助教(0)/管理職教員(学長～学部長)(0)
博士課程(14)/職員(部長・課長以上)(0)/職員(係長・主任・一般職員
等)(0)/その他(2)/無回答(0)

【性別】男性(8)/女性(9)/無回答(0)

【学校種】東北大学(13)/東北大学外(0)/無回答(4)

1. 参加した感想 (1. 当てはまらない～4. 当てはまる)



2. 特に役に立ちそうと思ったこと

- ・アブストラクト作成のポイント。プレゼンの方法。
- ・Attention getting Openers で具体的な方法を説明してくれたこと。プレゼンは練習回数に比例して向上できるということ。
- ・Practice の部分。
- ・アブストラクトの組み立て方。
- ・プレゼンテーションで聴衆の興味を引く方法。
- ・L と R の発音、自分の話し方の悪い癖、他の人の発音スタイル。
- ・プレゼンテーションのやり方。プレゼンテーションまでの準備の組み立て方。
- ・音節がイントネーションと関係があること。
- ・Attention getting audience の例。
- ・How to write an abstract and how to make a presentation.
- ・日本人の苦手な発音等。
- ・Abstract の書き方、発音の注意点。
- ・プレゼンテーションを上達するために必要なスキル。
- ・個別の英語でのプレゼン技術向上のためのアドバイス。アクセプトされるアブストの書き方。
- ・発表の技術がすごく役に立つと思いました。今後の学会での発表に自信がもてます。

3. わかりにくいと思ったこと

- ・ Intonation の部分。
- ・ スピーチの作り方。
- ・ 他の人の発表で難しい単語があった。
- ・ プレゼンテーションのスキル。
- ・ 日本人の苦手な発音等を自分がちゃんと発音できているかどうか。
- ・ プレゼンのためにオーディエンスのバックグラウンドが分かると良いと思った。

4. セミナーについての意見・感想

- ・ 同じように自分の能力向上を目指す方がいらっしやることを、参加して感じ、心強く思いました。鎌田先生の熱意を感じ、やる気がわきました。
- ・ 実践練習できたことが何より良かった。
- ・ 事前課題に関して、例文があると求められているものが把握しやすかったと思います。
- ・ このようなセミナーへの参加は初めてでしたが、とても有意義で楽しかったです。またの開催を希望します。
- ・ 内容に対して時間が足りなすぎでした。深く、詳しく話ができなかった残念です(ワークショップにはならなかったと思います)。
- ・ 川内だけではなく、分野ごとに専門で分けてもより有意義かも。
- ・ This is good for seniors as an introductory oral English presentation.

PDP #16 秋入学を考える (2012.6.20)

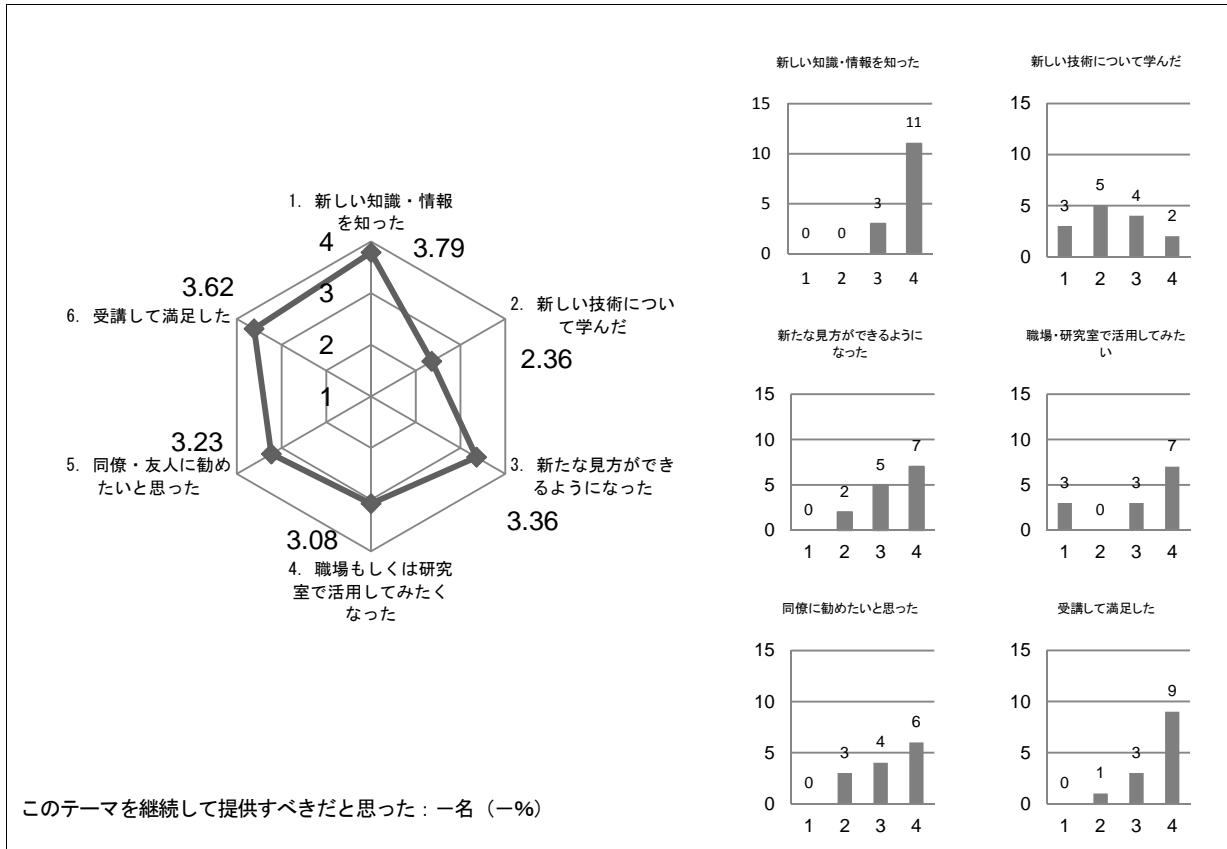
羽田貴史先生(東北大学高等教育開発推進センター)
石井光夫先生(東北大学高等教育開発推進センター)
工藤与志文先生(東北大学教育学研究科)

回答者属性(N=14)

【職階】 教授(2)/准教授(2)/講師・助教(2)/管理職教員(学長～学部長)(0)
博士課程(1)/職員(部長・課長以上)(1)/職員(係長・主任・一般職員等)(1)/その他(3)/無回答(1)

【性別】 男性(10)/女性(3)/無回答(1)
【学校種】 東北大学(6)/東北大学外(6)/無回答(2)

1. 参加した感想 (1. 当てはまらない～4. 当てはまる)



2. 特に役に立ちそうと思ったこと

- ・ 入学時期の変遷、国際的情勢、学生さんの声。
- ・ 歴史。もともと入学時期というのは、紆余曲折あって、揺れてきていたことであるということ。
- ・ 中国の高校生生の動向。ギャップタームの使い方。
- ・ なぜ日本の学年暦が4月に始まっているのかを歴史を通して知ることができ、とても興味深かったです。世界の入学時期、学生の意識のデータも初めて見るもので、おもしろかったです。「移行期間」をどうするかが秋入学の大きな課題になりそうだと思いますことがよくわかりました。
- ・ 自分自身の考え方の確認ができた。
- ・ テーマを二項対立的に捉えるのみならず、時間軸を基に追求していったこと。
- ・ 客観的事実を確認できたこと。

- ・入学時期についての歴史的考察と予備調査（学生対象）。

3. わかりにくいと思ったこと

- ・秋入学と大学以外の全て。
- ・引用について、カタカナを残さずひらがなに直してもらいたい。読みづらい。白黒印刷なので統計の示す内容がわからない。
- ・秋入学を実施している国のうち、どの程度の国がギャップイヤーを設けているのか。
- ・大学そのものの各国での差異と今回の講義内容の相関性。

4. セミナーに関しての意見・感想

- ・ギャップタームは就職活動の時期（7セメとか）にするとか。大学を4.5年にして、0.5年をリメディアル、他分野の勉強、大学院の勉強時期にすれば解決できると思う。
- ・討論会まで行っていただき、まことにためになった。
- ・討論会の時間が短いと思いました。発表者に高校関係者がいたらよかったかもしれません。
- ・関心の高いテーマなので、他大学からの参加がもう少しあるとよかったのでは。配信もあった方がよいと思う。

PDP #17 経済先進国における学生の流動性とは (2012.9.18)

Ulrich TEICHLER 先生（カッセル大学）

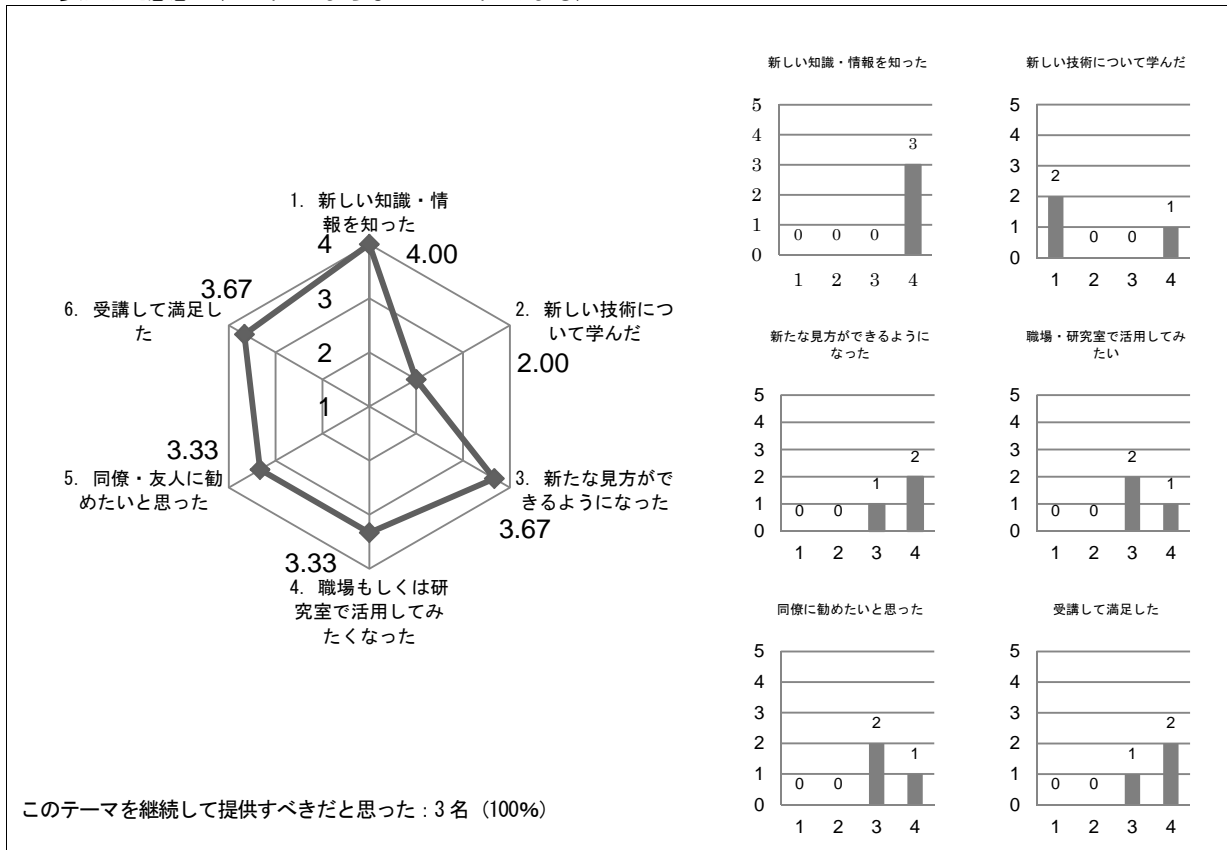
回答者属性(N=3)

【職階】教授(0)/准教授(1)/講師・助教(0)/管理職教員(学長～学部長)(0)
博士課程(0)/職員(部長・課長以上)(0)/職員(係長・主任・一般職員等)(0)/その他(0)/無回答(2)

【性別】男性(1)/女性(0)/無回答(2)

【学校種】東北大学(0)/東北大学外(1)/無回答(2)

1. 参加した感想 (1. 当てはまらない～4. 当てはまる)



2. 特に役に立ちそうと思ったこと

- ・学生についての考え方の枠組みを知ることができたこと。
- ・vertical-horizontal mobility というフレームワーク。

3. わかりにくいと思ったこと（記入なし）

4. セミナーに関しての意見・感想

- ・ありがとう。
- ・面白かったです。

**PDP #18 留学生と日本人学生が共に学ぶ場を作る
ーグローバル人材を育成する授業とはー
(2012.9.12)**

**Richard JAMES 先生 (メルボルン大学)
Sophie ARKOUNDIS 先生 (メルボルン大学)
エイドリアン・ピニングトン先生 (早稲田大学)
ウラノ・エジソン・ヨシアキ先生 (筑波大学)
芳賀満先生 (東北大学高等教育開発推進センター)**

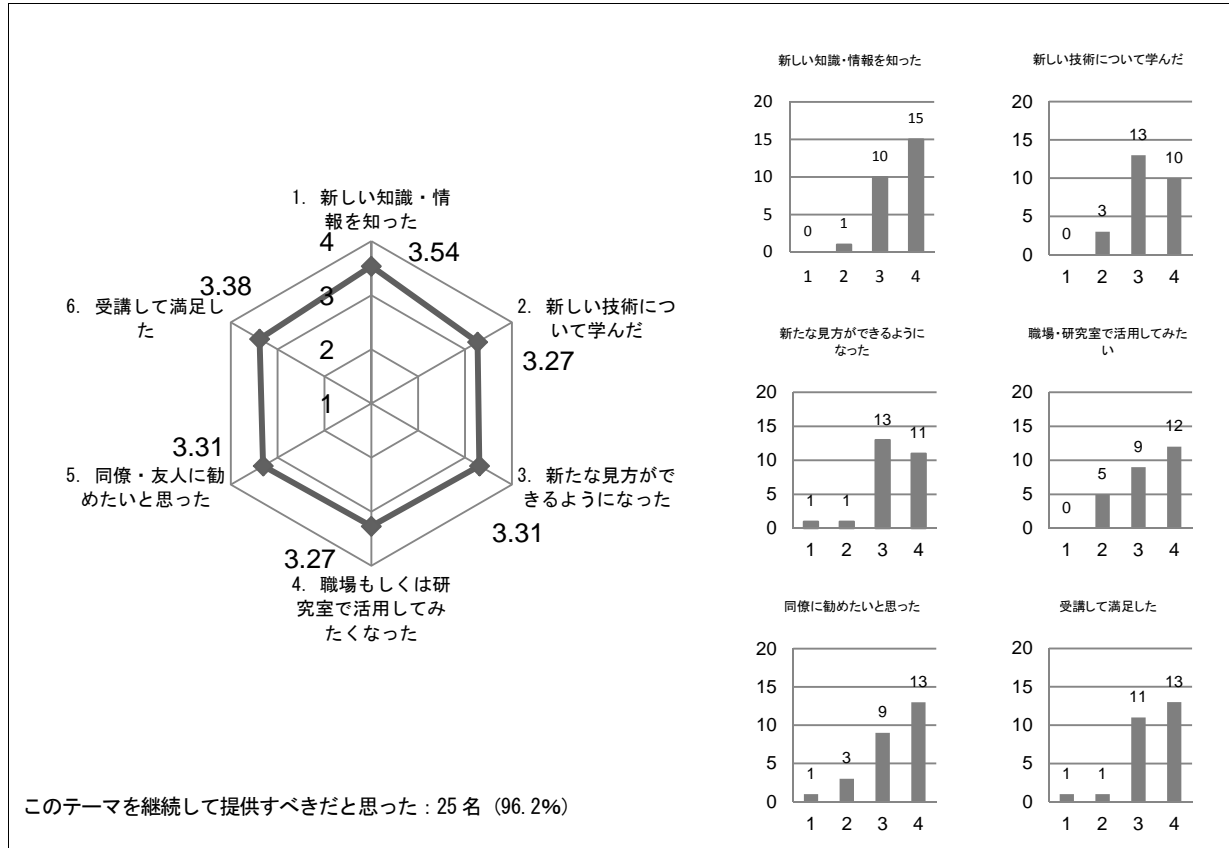
回答者属性(N=26)

【職階】教授(4)/准教授(4)/講師・助教(3)/管理職教員(学長~学部長)(0)
博士課程(0)/職員(部長・課長以上)(1)/職員(係長・主任・一般職員
等)(6)/その他(7)/無回答(1)

【性別】男性(13)/女性(13)/無回答(0)

【学校種】東北大学(19)/東北大学外(3)/無回答(4)

1. 参加した感想 (1. 当てはまらない~4. 当てはまる)



2. 特に役に立ちそうと思ったこと

- ・芳賀先生のスピーチについて、コンテンツがあることはとても強いと思った。
- ・大学全体の組織やカリキュラムとそその中の授業実践というものが分ち難く結びついているということ。コンテンツと授業の形態等の関係など。
- ・グローバル人材を育成する授業について、特に日本で実践されている三人の講演者の方との具体的な課題共有と対応例。
- ・学生だけではなく、今日インサイドにもダイバーシティ対応力が重要という考え方。
- ・授業の実態が具体的に聞けて良かった。
- ・自身の全姿は自分で見るができない。他人からどうみえるのか、他人から自分を知ること。外から自国をみて日本を知ること。
- ・オーストラリアのとりくみ。具体的な授業の中身。
- ・グループディスカッションが効果的だということ。グループワーク。
- ・全て興味深い内容でした。様々な観点、立場からの報告があったことが良かったです。新しい情報を得られた面もありましたし、考えさせられる面もありました。
- ・専門教育における共同授業のあり方。
- ・芳賀先生の講義は誰もが(学生や大学関係者だけではなく)持っておくべく真の国際化またはグローバル化のための具体化を非常に大急ぎでしていただいたものであった。我々の大学でも全学生に是非とも聴講させたい講義でした。
- ・国際、国内学生混合の Team Learning 論。
- ・アコーディス先生が具体的に提示された Finding Common Ground に関する知見と芳賀先生による歴史学、考古学の「位置づけ」が特に役立ちそうです。
- ・留学生をただ受け入れるだけでなく、留学生とのコラボを通して、留学生を上手く「活用」という発想が新鮮であった。よくあるのは、語学の TA などその活用であるが、広く異文化理解、また日本人学生の発信の場としての留学生との交流というのは、今後大いに検討していくべき課題であるとする。
- ・皆の前で意見を言うのが苦手な日本人学生も、自分の体験や身近な問題についてリラックスした環境が与えられたり、留学生から刺激を受ければ話すだろうということ。

3. わかりにくいと思ったこと

- ・「英語」を「共通語としての英語」として定義し直す必要があるのではと思った。
- ・各大学によって背景が違うと思うので、単純に比較は難しいのでは。
- ・前半（オーストラリア）と後半（日本の各大学におけるとりくみ）のつながりがわかりにくかったです。日本動向も各大学での共修授業の位置づけなどわかるとよりよかったですと感じました（特に日本人学生が個々の授業に参加するのをどのように促すのか。それをどのように保証するのかという意味で）。
- ・長い。もっとコンパクトにできるはず。
- ・筑波大学のプログラムをもう少し詳細まで教えてもらいたかった。
- ・どうして東北大学の中の英語プログラムは統一されないのか。例えば、AMC、AMB、IMA-U など各学科毎に存在する。
- ・「授業実践の取り組み」に抱いていたイメージと実際のご紹介の内容に、ズレがあるように思えるご講演がありました。私の抱いたイメージがおかしかったのか、ご講演くださった先生のイメージがずれていったのか。
- ・一つ一つの課目の全体の中での位置づけ（どんなカリキュラムでどのような学生、学年がとっていて、1~4年の中でどのようなプログラムになっているかなど）がよくわからなかった。

4. セミナーに関しての意見・感想

- ・内容が良かっただけにより多くの参加者がいれどと感じました。諸事情があるかと思いますが、平日でない方が教育関係者は参加しやすいのではないのでしょうか。
- ・大変勉強になりました。ありがとうございました。
- ・今回のシンポジウムで、冒頭の東北大学の説明が長すぎる。しかも、理系のみしか取り扱っていない。G30にはIPLAという文系のプログラムもある。国際化は理系だけのものではない。理系に偏った内容をやめてほしい。オーストラリアのような英語圏の大学が留学生を受け入れるのと、日本の大学が留学生を受け入れる（しかも日本語で教えるのではなく英語で教える）のとでは、それぞれのコンテキストが異なり、問題や対応も違うと思う。日本の大学の国際化を考えるなら、より日本のコンテキストに合った内容にした方が実践的で良いと思う。例えば、英語を母語としないヨーロッパの国の大学関係者による具体的な公園など。
- ・参加者が少ないのが残念でした。
- ・続編として、上記 **Team Learning** の方法論と考え方を深めるシンポジウム、セミナーを期待します。
- ・本来の専門性と全く異なるポジションに付けられてしまい、俄か勉強に追われております。このような催しは大変ありがたく、ぜひ継続、発表させていただきたく存じます。本日はありがとうございました。
- ・急な会議のため、中座に申し訳ございません。いつも、可能な限り、セミナー等には参加させていただき感謝しております。
- ・大変面白い内容でした。しかし、グローバルな人材を卒業時に送り出すためには、システム全体（カリキュラム、人員、財政面）を一から変えなければならないくらいの大きな改革が必要に思います。大学の未来図に合った、留学生との共同授業が安定的にできるようになると良いと思っています。しかし、芳賀先生の発表をお聞きしたら、面白い授業がすべてのパワーの原点だと思いました。学生の学ぶ力が自然とつくだろうと想像されました。

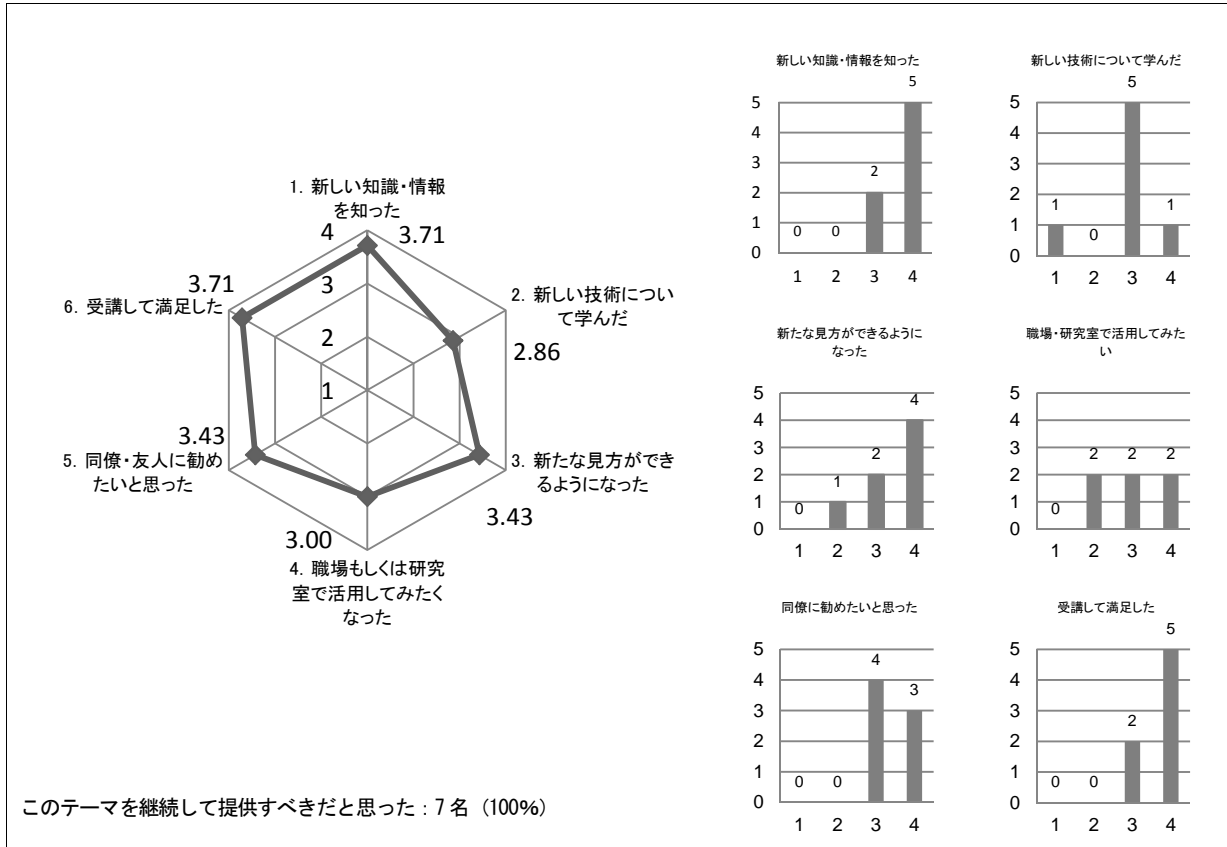
回答者属性(N=7)

【職階】教授(3)/准教授(0)/講師・助教(0)/管理職教員(学長～学部長)(0)
 博士課程(0)/職員(部長・課長以上)(2)/職員(係長・主任・一般職員
 等)(1)/その他(1)/無回答(0)

【性別】男性(6)/女性(1)/無回答(0)

【学校種】東北大学(4)/東北大学外(3)/無回答(0)

1. 参加した感想 (1. 当てはまらない～4. 当てはまる)



2. 特に役に立ちそうと思ったこと

- ・現代の大学の学びに対しての視野が広がったと思います。
- ・CITI が当面自由に使えるということ。
- ・CITI Japan プロジェクトの現状。
- ・CITI の重要性。

3. わかりにくいと思ったこと

- ・本学の研究サポート体制が不備だという点。組織的にプロフェッショナルがいることと、体制づくりとそれらを運営するものの体力も必要。

4. セミナーについての意見・感想

- ・一般の社会人にも学びについてよく考える機会を持てる場だと思います。

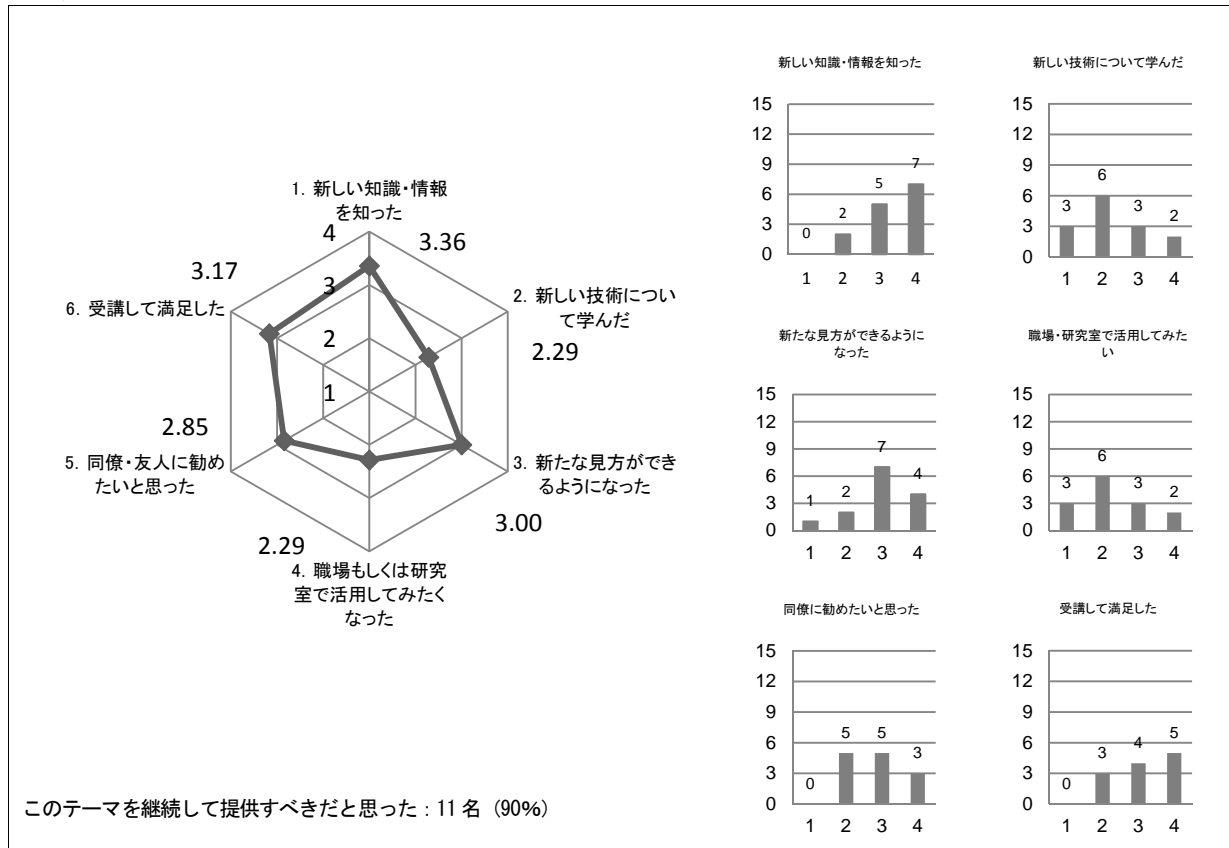
回答者属性(N=14)

【職階】 教授(3)/准教授(2)/講師・助教(2)/管理職教員(学長～学部長)(0)
博士課程(0)/職員(部長・課長以上)(0)/職員(係長・主任・一般職員
等)(0)/その他(3)/無回答(4)

【性別】 男性(10)/女性(2)/無回答(2)

【学校種】 東北大学(9)/東北大学外(2)/無回答(3)

1. 参加した感想 (1. 当てはまらない～4. 当てはまる)



2. 特に役に立ちそうと思ったこと

- ・米国の産学連携のパターン、特徴をいくつかのパターンに分けて説明を行っている点は分かりやすい。
- ・アメリカにおける産学業間の現状について。
- ・米国における Ind+Academis の実態。

3. わかりにくいと思ったこと

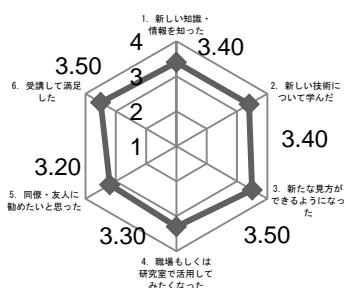
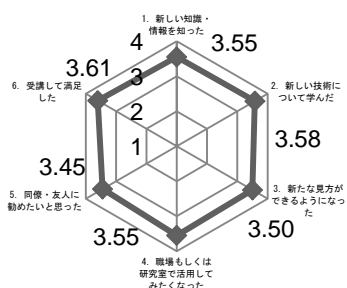
- ・分析がやや表面的で、もう少し制度、データに踏み込んでもらったほうが良い。
- ・少し予想したものと異なっていたことと、人文系の学科との関わり。
- ・もう少し定量的な Top View。

4. セミナーについての意見・感想

- ・大学のガバナンスの問題について。
- ・語学力が足りなくて曖昧な理解しかできなかったのが残念でした。

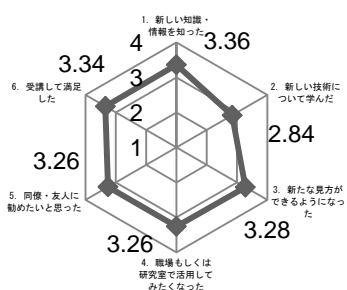
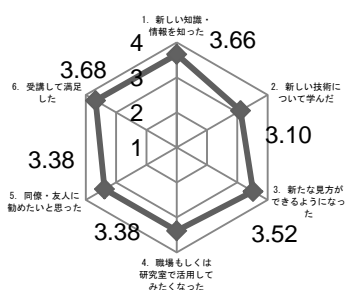
1. 大学の授業を設計する (基礎)

2. 大学の授業を改革する (応用)



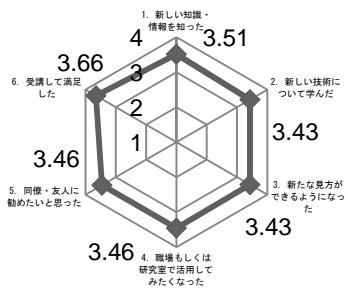
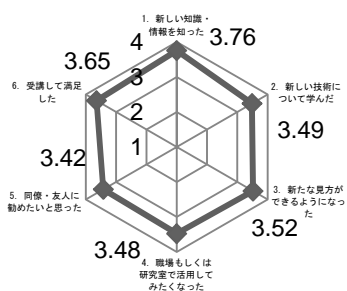
3. 教育マネジメントの力を創る

4. 学生を指導する

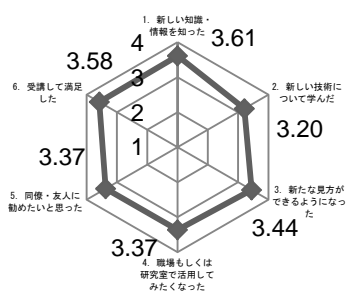


5. 外国語教育の指導力を育成する

6. 英語で授業をする



全体



3-2. CPD 教員組織

2012年5月14日付

役職	氏名	所属, 担当
大学教育支援センター長	◎羽田 貴史	高等教育開発推進センター(高等教育開発室)教授
同 副センター長	◎鈴木 敏明	同(入試開発室)教授
同 調査研究部門長	◎杉本 和弘	同(高等教育開発室)准教授
同 プログラム開発部門長	◎羽田 貴史(兼務)	同(高等教育開発室)教授
同 プログラム実施部門長	◎芳賀 満	同(人文社会科学教育室)教授
高等教育開発推進センター副センター長	◎関内 隆	同(高等教育開発室)教授
同 研究開発員	◎佐藤 万知	同(高等教育開発室)講師, 調査研究等
同 研究開発員	◎立石 慎治	同(高等教育開発室)助教, 調査研究等
同 研究開発員	◎今野 文子	同(高等教育開発室)助教, 調査研究等
同 研究開発員	葛生 政則	同(高等教育開発室)准教授, プログラム実施
同 研究開発員	○串本 剛	同(高等教育開発室)講師, 調査研究
同 研究開発員	○北原 良夫	同(語学教育室)准教授, 調査研究
同 研究開発員	○橘 由加	同(語学教育室)准教授, プログラム開発・交渉
同 研究開発員	ENSLEN Todd	同(語学教育室)講師, プログラム開発・実施
同 研究開発員	SHEARON Ben	同(語学教育室)講師, プログラム開発・実施
同 研究開発員	藤本 敏彦	同(スポーツ科学教育室)准教授, プログラム開発・実施
同 研究開発員	木内 喜孝	同(保健管理室)教授, プログラム開発・実施

同	研究開発員	吉武 清實	同(学生相談室)教授, プログラム開発・実施
同	研究開発員	上原 聡	同(日本語研修室)教授, プログラム開発・実施
同	研究開発員	○千葉 政典	同(キャリア支援室)講師, HP 開発・プログラム開発・実施
同	研究開発員	○猪股 歳之	同(キャリア支援室)助教, 調査研究
同	研究開発員	佐藤 勢紀子	同(日本語研修室)教授, プログラム実施
同	研究開発員	中島 平	教育情報学研究部 准教授, プログラム開発・実施
同	研究開発員	三石 大	教育情報基盤センター 准教授, プログラム開発・実施
同	研究開発員	浜田 良樹	情報科学研究科 講師, プログラム開発・実施
同	研究開発員	邑本 俊亮	災害科学国際研究所 教授, プログラム開発・実施
同	共同研究員	藤村 正司	広島大学教授, 大学教員調査
同	共同研究員	加藤 かおり	新潟大学准教授, イギリスの大学教員養成
同	共同研究員	土持 法一	帝京大学教授, ポートフォリオ開発
同	共同研究員	渡部 芳栄	福島大学特任准教授, 管理職調査
同	共同研究員	丸山 和昭	福島大学特任准教授, 大学教員調査
同	共同研究員	鳥居 朋子	立命館大学教授, 大学教育マネジメント
同	共同研究員	Sophie Arkoudis	メルボルン大学, 新任教員研修プログラム
同	共同研究員	Chi Baik	メルボルン大学, 新任教員研修プログラム
同	共同研究員	Laura Hahn	イリノイ大学, 英語で授業を
同	共同研究員	Linda von Hoene	カリフォルニア大学バークレー校, 大学教員準備プログラム

◎部門長・コア会議メンバー

○コア会議メンバー

3-3. CPD 教員の活動（2012年4月～2013年3月の主な活動）

センター長・教授 羽田 貴史

〔研究業績〕

1. (単著)「巻頭論文 秋季入学はただの空想か？」『教職研修』, 2012年5月.
2. (共編)「趣旨」執筆・編集委員長, 日本高等教育学会編『高等教育研究 第15集 特集: 高等教育財政』, 2012年5月.
3. (単著)「書評: 中村高康『大衆化とメリトクラシー 教育選抜をめぐる試験と推薦のパラドクス』」, 日本教育社会学会編『教育社会学研究』第90集, 2012年6月.
4. (単著)「教育史研究における大学史研究の位置」『日本の教育史学』第55集, 2012年10月.
5. (単著)「大学教育はだれが担うのか 失望、危惧—中教審答申を読んで」『教育学術新聞』, 2012年11月24日.
6. (共訳)『アカデミック・キャピタリズムとニュー・エコノミー 市場, 国家, 高等教育』, 成定薫監訳, 法政大学出版社, 2012年11月.
7. (単著)「高等教育の役割と課題 グローバリゼーション・人材育成・質保証」『クロスロード TMU FD レポート』第11号, 2012年11月.
8. (単著)「巻頭言 人材育成と大学の機能的分化論は適合するか?」『日本労働研究雑誌』No.629, 2012年12月.
9. (単著)「教育開発と教員開発—研究と実践から学ぶ」『AIIT FD レポート』第13号, 2013年1月.
10. 「大学職員論の課題」『大学職員論叢』第1号, 2013年3月.
11. (共編著)『「企画及び調査の背景」・第6章「大学教員の危機とその克服」』執筆, 『「大学・短大教員のキャリア形成と能力開発に関する調査」報告書』CAHE TOHOKU Report48, 2013年3月.
12. (共編著)「第1部第1章, 第2部第11章, おわりに」執筆・編集, 『大学教員の能力—形成から開発へ—』高等教育ライブラリ7, 東北大学出版会, 2013年3月.
13. 「PD ブックレット Vol.4 の刊行にあたって」『PD ブックレット Vol.4 ER@TU—多読のすすめ The Tohoku University Extensive Reading Manual』, 2013年3月.

〔学会活動〕

1. 大学教育学会自由研究発表部会, 司会, 2012年5月27日.
2. 日本高等教育学会第15回大会自由研究発表「大学院重点政策後の博士課程大学院教育—マクロ動向と研究大学のケース・スタディー」(猪股歳之, 串本剛, 立石慎治), 2012年6月3日.
3. 大学教育学会課題研究候補選定委員会出席 (大阪), 2012年10月23日.
4. 日本教育社会学会第64回大会参加 (同志社大学), 2012年10月27-28日.

〔各種活動〕

1. 学問的誠実性に関する研究会, 2012年4月26日.
2. 中国における学問的誠実性に関する調査 (北京, 杭州), 2012年5月14-20日.
3. 名古屋大学高等教育研究センター教育関係共同利用拠点運営委員会出席, 2012年6月13日
4. 第1回「秋入学を考える」シンポジウム (東北大学) において「2つのサイクルと学年歴—歴史の視点から」報告, 2012年6月20日.

5. 豪州首相日本対象教育支援プログラムによるオーストラリア調査, 2012年6月24-30日.
6. PDプログラム「シンポジウム：外国語教育の将来—大学の役割」, 趣旨説明・挨拶, 2012年7月28日.
7. 国立大学協会調査企画会議出席, 2012年7月31日.
8. 全国大学教育研究センター等協議会出席(愛媛大学), 2012年8月2-3日.
9. 東北大学 大学教育マネジメント人材育成プログラム(EMLP)キックオフセミナー, 挨拶, 2012年8月20日.
10. PDプログラム「学生のための心理・教育的支援 ～学生相談の基礎知識～」, 挨拶・司会, 2012年8月28日.
11. 農学研究科, 法学研究科, 文学研究科, 経済学研究科訪問, 2012年8月29-31日.
12. 宮城県高校教育将来構想審議会出席, 2012年9月4日.
13. 東北大学 大学教員準備プログラム(PFFP)オリエンテーション, 挨拶, 2012年9月4日.
14. 豪州首相日本対象教育支援プログラム福島セミナー主催(福島大学), 2012年9月10日.
15. 豪州首相日本対象教育支援プログラム国際シンポジウム「留学生と日本人学生が共に学ぶ場を作る—グローバル人材を育成する授業とは—」“Planning Interaction between Domestic and International Students in the Classroom - Developing Students' Global Talent—”, まとめ(東北大学), 2012年9月12日.
16. 教育改革懇話会WG出席(早稲田大学), 2012年9月13日.
17. 大学の組織運営とマネジメント人材育成に関する調査研究会(東京), 2012年9月14日.
18. PDプログラム, 第19回東北大学高等教育国際セミナー「経済先進国における学生の流動性とは」“Incoming and Outgoing Student Mobility - The Varied Views and Policies in Economically Advanced Countries”. (ウーリッヒ・タイヒラー), 挨拶, 2012年9月18日.
19. PDプログラム「大学の授業を改革する：学生が学び合う授業の理論と実際」, 挨拶・司会, 2012年10月5日.
20. 産業技術大学FD(東京), 講演, 2012年10月11日.
21. 現代における学問的誠実性に関する国際セミナー, 趣旨説明, 2012年10月22日.
22. 国立大学協会調査企画会議出席, 2012年10月31日.
23. 宮城県高校教育将来構想審議会出席, 2012年11月7日.
24. 平成24年度IDE大学セミナー「大学の教育改革と組織編成」, 趣旨説明・司会, 2012年11月19日.
25. 広島大学高等教育研究センター研究員集会出席, 2012年11月22日.
26. PDプログラム「研究者育成と研究倫理教育の課題—知識基盤社会における大学の責務」, 趣旨説明・司会, 2012年12月8日.
27. PDプログラム「大学の危機管理—ヒューマン・エラーとリスクマネジメント—」, 趣旨説明・司会, 2013年1月22日.
28. 東北大学リーディングプログラム推進機構主催セミナー・高等教育開発推進センター共催「QE博士論文研究基礎力審査導入を考える」, 司会, 2013年2月1日.
29. PDプログラム「アメリカにおける大学史研究の動向と課題」“Writing the History of American Higher Education”(大学史研究会と共催), 挨拶, 2013年2月12日.

30. PD プログラム「アメリカにおける産学連携—現状と課題」, “University-Industry Cooperation and the Innovative University in the U.S.”, 挨拶, 2013年2月13日.
31. 日本学術会議・日本学術振興会学術フォーラム「責任ある研究活動」(東京), 報告, 2013年2月19日.
32. GFD Project (大阪大学), 報告, 2013年2月27日.
33. 岩手県立大学 FD, 講演, 2013年3月19日.

副センター長・教授 鈴木 敏明

〔研究業績〕

1. (単著)「齋藤・杉本・亀田・平石論文『大学生における自己の構造発達-Kegan の構造発達理論に基づいて』を読んで」, 青年心理学研究, 第24巻, 第1号, 85-89頁, 2012年.
2. (共著) キャリア教育学会・情報委員会報告: 関連研究の紹介 (2011年度), キャリア教育研究, 第31巻, 第1号, 27-30頁, 2012年.

〔学会活動〕

1. 日本キャリア教育学会理事
2. 日本キャリア教育学会選挙管理委員会委員
3. 日本キャリア教育学会情報委員会委員
4. 日本キャリア教育学会研究奨励賞選考委員

〔各種活動〕

1. PD プログラム「学生のための心理・教育的支援—学生相談の基礎知識」, 企画, 2013年8月28日.
2. PD プログラム「学生のための心理・教育的支援—発達障害学生への視点」, 企画・司会進行, 2013年11月26日.
3. PD プログラム「大学教職員に求められる異文化理解—留学生とともに考える」, 企画・司会進行, 2013年12月17日.
4. 進学説明会「東北大学入試説明会」(青森県立五所川原高等学校) 講師
5. 進学説明会「あおくも講座」(秋田県立横手高等学校) 講師
6. 「東北大学説明会」(代々木ゼミナール) 講師
7. 「マイナビ進学フェスタ」(仙台会場) 講師
8. 宮城県教育庁生涯学習課登録講師

プログラム実施部門長・教授 芳賀 満

〔研究業績〕

1. (単著)「過去からの預言～震災にあたっての歴史学からの所感」『東北大学高等教育開発推進センター紀要』第7号, 239-241頁, 2012年3月.
2. (単著)「心不可得 ～ 予告された殺人の記録を超えて」, 水原克敏・関内隆編『今を生きる 東日本大震災から明日へ! 復興と再生への提言 2 教育と文化』, 東北大学出版会, 227-255, 2012年9月28日.

3. (単著) “Tyche as a Goddess of Fortune in “the Great Departure (出家踰城)” scene of Life of Buddha”, in *Festschrift für Prof. Edvard Rtveldze*, Moscow, 2012年.
4. (単著)「海獣スキュラの変容と東漸～ユーラシア大陸におけるギリシア図像の伝播とそのオリエンテーションによる吸引」『美術史歴参 百橋明穂先生退職記念献呈論文集』, 中央公論美術出版社, 519-547頁, 2013年3月10日.
5. (単著)「文化と植民地時代～中韓日の閑適詩の系譜における金素雲訳詩「南に窓を」の意義」『植民地時代の文化と教育—朝鮮・中国と日本—』高等教育ライブラリ 5, 東北大学出版会, 1-30頁, 2013年3月29日.
6. (共著)『ガンダーラ美術の資料集成とその統合的研究 最終報告書』(研究代表者: 宮治昭), 2013年3月.
7. (単著)「人文科学歴史学の多文化共修共生授業の意義と実践～英語によって外国人学生と日本人学生とに」『東北大学高等教育開発推進センター紀要』第8号, 頁未定, 2013年3月.

〔学会活動〕

1. (招待講演, 単独) 藝術学関連学会連合第7回シンポジウム, 藝術関連学会と日本学術会議哲学委員会・藝術と文化環境委員会共催「地・人・芸術—く芸術と地域>を問う—」(仙台市博物館)において「地域復興の為の芸術の力～①高台移転に伴う埋蔵文化財発掘調査の社会的意義②文化庁「文化財レスキュー事業」の意義と問題点③災害対策基本法への文化財の観点の付加④ゲニウス・ロキと災害モニュメント」講演, 2012年6月16日.

〔各種活動〕

1. 日本学術会議 連携会員, 史学委員会「歴史認識・歴史教育に関する分科会」委員, 2012年4月1日～.
2. 日本学術会議 連携会員, 史学委員会「文化財の保護と活用に関する分科会」委員, 2012年4月1日～.
3. 日本学術会議 連携会員, 哲学委員会「哲学・倫理・宗教教育分科会」委員, 2012年4月1日～.
4. 高大連携事業に係る公開講座(高校生向け連続授業の実施)(東北大学), 2012年5月.
5. 第3回授業体験型FD「文科系のための自然科学総合実験 大気中の放射能」, 企画・司会, 2012年5月23日.
6. 第12回ランチタイムFD「自分の授業を振り返る—授業リフレクションの実践—」, 企画・司会, 2012年6月13日.
7. 第13回ランチタイムFD「地方における日本語の現状—ウチナーヤマトウグチ(沖縄大和口)の事例—」, 企画・司会, 2012年6月13日.
8. 第1回「秋入学を考える」シンポジウム(東北大学), 企画・司会, 2012年6月20日.
9. 第14回ランチタイムFD「被災古文書の保全体験—基礎ゼミ「江戸時代を学ぼう」から—」, 企画・司会, 2012年7月3日.
10. PDプログラム「外国語教育の指導力を育成する」, 企画・実行・総合司会, 2012年7月28-29日.
11. (単独) 豪州首相日本対象教育支援プログラム「留学生と日本人学生が共に学ぶ場を作る—グローバル人材を育成する授業とは—“Planning Interaction between Domestic and International Students in the Classroom- Developing Students’ Global Talent-” (東北大学), 2012年9月

12日.

12. (単独) 日本学術会議・史学委員会・文化財の保護と活用に関する分科会第22期・第4回「災害と考古学のかかわり～一般社会への説明の可能性」(日本学術会議), 2012年9月27日.
13. (単独)「ガンダーラ美術の資料集成とその統合的研究」科研「ガンダーラ美術に見るギリシア・ローマ文化の受容」研究会「東方における海獣スキュラ(Σκυλλα)と運命の女神テュケ(Tyche)ーヘレニズム時代の表裏を成す二柱の女神」(龍谷大学), 2012年10月14日.
14. (招待講演, 単独) 京都ギリシアローマ美術館講演会(京都ギリシアローマ美術館)において「お釈迦様出家場面の女神テュケ～仏教美術の中のギリシアの神々」講演, 2012年12月22日.
15. 東北大学新任教員プログラム(NFP)において助教等の指導・引率(メルボルン大学), 2013年3月1-3日.

〔受賞〕

1. 平成24年度東北大学全学教育貢献賞受賞, 2013年1月7日.
2. 平成24年度東北大学総長教育賞受賞, 2013年3月27日.

調査研究部門長 准教授・杉本 和弘

〔研究業績〕

1. (単著)「豪州の大学における職業統合学習(WIL)」, 平成23年度文部科学省「先導的大学改革推進委託事業」報告書『国内外における産学連携によるキャリア教育・専門教育の推進に関する実態調査』(研究代表者:九州大学・吉本圭一), 122-138頁.
2. (単著)「オーストラリアーアジア太平洋地域を舞台にした国際教育の展開と質保証ー」, 北村友人・杉村美紀共編『激動するアジアの高等教育改革ー』, 上智大学出版, 227-242頁, 2012年8月.
3. (単著)「専修大学:原点に立ち返り, 未来のビジョンを構築する」, リクルート編『カレッジマネジメント』No.176(特集 進学ブランド調査2012), 42-45頁, 2012年9月.
4. (翻訳)S・スローター, G・ローズ著(成定薫監訳)『アカデミック・キャピタリズムとニュー・エコノミーー市場, 国家, 高等教育』叢書・ユニベルシタス 985(第3章・第4章翻訳担当), 法政大学出版局, 2012年11月.
5. (単著)杉本和弘「オーストラリアにおける若者の社会的包摂ー『教育から職業への移行』を中心にー」, オセアニア教育学会編『オセアニア教育研究』第18号, 33-45頁, 2012年12月.
6. (単著)「東京理科大学:理工系女子(マドンナ)の未来を拓くプロジェクト」, リクルート編『カレッジマネジメント』No.178(特集 女子マーケットを探る), 30-33頁, 2013年1月.
7. (単著)「京都橘大学:意思決定スピードが改革成功を生む」, リクルート編『カレッジマネジメント』No.179(特集 学部・学科トレンド), 30-33頁, 2013年3月.
8. (共著)杉本和弘・鳥居朋子「専門性パートナーシップによる大学教育マネジメントー英国キングストン大学の取組事例を中心にー」, 『東北大学高等教育開発推進センター紀要』第8号, 頁未定, 2013年3月.
9. (共著)杉本和弘・今野文子・立石慎治「メルボルン大学における教育改革とマネジメント:豪州首相日本対象教育支援プログラム調査報告」, 『東北大学高等教育開発推進センター紀要』第8

号, 頁未定, 2013 年 3 月.

〔学会活動〕

1. 日本比較教育学会第 48 回大会 (九州大学)「豪州大学の教育質保証における『アカデミック・ボード』の位置と機能」(杉本和弘), 2012 年 6 月 16 日.
2. 日本教育学会第 71 回大会 (名古屋大学)「専門性パートナーシップによる大学教育マネジメント—英国キングストン大学の取組事例を中心に—」(杉本和弘・鳥居朋子), 2012 年 8 月 26 日.
3. International Symposium on Shifting Patterns of University Governance Reform in East Asia (台湾比較教育学会主催)“Enhancing Internal Quality Assurance at Japanese Universities”(Sugimoto, K.), National Academy for Educational Research, 9 November, 2012.

〔各種活動〕

1. 第 1 回「秋入学を考える」シンポジウム (東北大学), 総合討論司会, 2012 年 6 月 20 日.
2. 大学教育マネジメント等に関する調査 (豪州首相日本対象教育支援プログラム), 2012 年 6 月 23-30 日.
3. 桜美林大学大学院大学アドミニストレーション公開研究会「学び続ける大学職員の可能性を考える」(TKP 仙台カンファレンスセンター)において「東北大学高等教育開発推進センターの歩み」報告, 2012 年 7 月 14 日.
4. 台湾・輔仁大學 FD・教授資源センター主催の国際セミナー“How will faculty members develop their international capacity?”において“Trend of Faculty Development in Japanese Universities”及び“Internationalization and English-taught Programs in Japanese Universities”講演, 2012 年 7 月 30 日.
5. PD プログラム「学びを促す学習コミュニティの創造と運営」, 企画・司会・ファシリテーター, 2012 年 8 月 22 日.
6. 京都大学第 5 回 FD ネットワーク代表者会議 (京都大学)において「東北大学における教育関係共同利用拠点の活動と課題」報告, 2012 年 9 月 5 日.
7. 文部科学省生涯学習政策局「海外における生涯学習の推進状況に係る勉強会」において「豪州資格枠組 (AQF) の構築と展開—職業教育の質保証を事例に—」講演, 2012 年 9 月 7 日.
8. 愛知淑徳大学メディア・プロデュース学部 FD 講演会において「学士課程教育をいかにデザインするか」講演, 2012 年 10 月 29 日.
9. “Fostering of Global Human Resources: A New Challenge for Japanese Universities”講演 (台湾・国立暨南國際大学), 2012 年 11 月 8 日.
10. 広島大学高等教育研究開発センター第 40 回研究員集会において「地域研究からアプローチする豪州高等教育—我が国の実践課題とどう切り結ぶか—」講演, 2012 年 11 月 23 日.
11. メルボルン大学におけるカリキュラム改革・大学教育マネジメント等に関する調査 (豪州首相日本対象教育支援プログラム), 2012 年 12 月 2-9 日.
12. 公立はこだて未来大学学習環境及び教育改善に関する調査, 2013 年 1 月 15-16 日.
13. 東北大学 新任教員準備プログラム (NFP)「諸外国の高等教育を知る～大学教育制度と役割について考える (日・豪の比較) セミナー」において「オーストラリアの大学教育と質保証—メルボルン大学を事例に—」講演, 2013 年 2 月 5 日.

14. 大学教育マネジメント及び教育開発プログラムに関する調査 (英国キングストン大学・ウェスト・ロンドン大学, フィンランド・ヘルシンキ大学), 2013年2月24日—3月6日.
15. 大学評価・学位授与機構評価人材育成事業「教育の内部質保証システム構築に関するセミナー」において「海外の大学における内部質保証システムについて—米・英・豪・欧州の動向から—」講演, 2013年3月21日.
16. 東北大学 大学教育マネジメント人材育成プログラム (EMLP), プログラム担当者 (杉本和弘・立石慎治) .
17. 東北大学 大学職員能力開発プログラム (SDP), プログラム担当者 (杉本和弘・今野文子・立石慎治) .

研究開発員・講師 佐藤 万知

〔研究業績〕

1. (編著) 『2011年度東北大学 大学教員準備プログラム報告書』, 東北大学高等教育開発推進センター, 2012年12月.
2. (単著) Unpacking Faculty Development in Japan: an ethnography of faculty development practitioners. オックスフォード大学教育学部博士学位論文, 2013年1月.
3. (単著) "Younger Faculty and Careers in Japan." In Gornall, L., Cook, C., Daunton, L., Salisbury, J., and Thomas, B., eds., Academic Working Lives: Experience, Practice and Change. Chapter 18, Bloomsbury Publishing. In press.
4. (編集) 『PD ブックレット Vol.4 The Tohoku University Extensive Reading Handbook (ER@TU 多読のすすめ)』, 東北大学高等教育開発推進センター, 2013年3月.

〔学会活動〕

1. 日本高等教育学会第15回大会「専門職化しない日本のFD担当者に関する考察-FD「担当者」の持つ意味合いに着目して」(東京大学), 2012年6月2日.
2. International Consortium for Educational Development Conference 2012 "How do we prepare doctoral students for academic profession?" (Machi Sato, Fumiko Konno) (Bangkok, Thailand), 2012年6月23-25日.
3. International Consortium for Educational Development Conference 2012 "Unpacking the complexities of professional identity and lived experiences – an ethnographic study of young faculty development practitioners in Japan." (Bangkok, Thailand) , 2012年6月23-25日.
4. Academic Identity Conference 2012 "Impact of lived experiences on construction of academic/professional identity: An ethnographic study of Japanese junior academics acting as FD practitioners." (University of Auckland, New Zealand) , 2012年6月26日.
5. International Consortium for Educational Development Conference 2012 "Suggesting 'Bansosha' model for supporting faculty development staff." (Machi Sato and Kiiko Katsuno) (Bangkok, Thailand) , 2012年7月22-25日.

〔各種活動〕

1. 第2回日本高等教育開発協会年次大会 (帝京大学) において「あなたの村はどんな村?～思考の

- 背景に潜む常識の違いに気づくためのワークショップの開発～」のワークショップ開発（佐藤万知，勝野喜以子），2012年8月31日。
- 平成24年度第2回教育改革研究会（九州大学）において「大学に変化の種を巻く—東北大学が展開するPFFPとEMLP—」講演（佐藤万知・立石慎治），2012年10月15日。
 - 第16回Q-place workshop for workshop vol.3「FD・SDプログラムの“ズレ”を活かそう！」（九州大学），ゲストスピーカー（田中岳・小菜辰郎・佐藤万知・今野文子・立石慎治），2012年10月16日。
 - 東北大学 大学教員準備プログラム（PFFP），東北大学 新任教員プログラム（NFP），プログラム担当者（佐藤万知・今野文子）。

研究開発員・助教・立石 慎治

〔研究業績〕

- （共著）猪股歳之・立石慎治「第2章『大学・短大教員のキャリア形成と能力開発に関する調査』から見る大学教員」，東北大学高等教育開発推進センター編『大学教員の能力—形成から開発へ—』高等教育ライブラリ7，2013年3月。
- （単著）「第10章 キャリアステージから見る能力発達と経験の構造」，東北大学高等教育開発推進センター編『大学教員の能力—形成から開発へ—』高等教育ライブラリ7，2013年3月。
- （共著）猪股歳之・立石慎治「IV. 教育・研究活動について」，東北大学高等教育開発推進センター編『「大学・短大教員のキャリア形成と能力開発に関する調査」報告書』CAHE TOHOKU Report 48，2013年3月。
- （共著）杉本和弘・今野文子・立石慎治「メルボルン大学における教育改革とマネジメント：豪州首相日本対象教育支援プログラム調査報告」『東北大学高等教育開発推進センター紀要』第8号，頁未定，2013年3月。

〔学会活動〕

- 日本高等教育学会第15回大会「大学院重点政策後の博士課程大学院教育—マクロ動向と研究大学のケース・スタディー」（羽田貴史・猪股歳之・串本剛・立石慎治）（東京大学），2012年6月3日。
- 日本教育工学会第28回全国大会「大学生における“学ぶことの大切さ”認識の特性分析」（立石慎治・渡辺雄貴・林祐司・串本剛）（長崎大学），2012年9月15日。

〔各種活動〕

- PDプログラム「学びを促す学習コミュニティの創造と運営」，講師，2012年8月22日。
- RIHE OB/OG 交流研究会（広島大学）において「ジュニア教員からファカルティへの過渡期をどう受け止めているか」報告，2012年9月6日。
- 平成24年度第2回教育改革研究会（九州大学）において「大学に変化の種を巻く—東北大学が展開するPFFPとEMLP—」講演（佐藤万知・立石慎治），2012年10月15日。
- 第16回Q-place workshop for workshop vol.3「FD・SDプログラムの“ズレ”を活かそう！」（九州大学），ゲストスピーカー（田中岳・小菜辰郎・佐藤万知・今野文子・立石慎治），2012年10月16日。

5. 学都仙台コンソーシアム/FD・SD 部会『SD フォーラム in 仙台 「SD の実践的な取り組みに向けて」』において「東北大学高等教育開発推進センター・大学教育支援センターが提供する SD プログラム」講演・司会, 2013 年 2 月 16 日.
6. 東北大学 大学教育マネジメント人材育成プログラム (EMLP), プログラム担当者 (杉本和弘・立石慎治).
7. 東北大学 大学職員能力開発プログラム (SDP), プログラム担当者 (杉本和弘・今野文子・立石慎治).

研究開発員・助教 今野 文子

〔研究業績〕

1. (共著) 杉本和弘・今野文子・立石慎治「メルボルン大学における教育改革とマネジメント：豪州首相日本対象教育支援プログラム調査報告」『東北大学高等教育開発推進センター紀要』第 8 号, 頁未定, 2013 年 3 月.

〔学会活動〕

1. *ICED conference2012* “How do we prepare doctoral students for academic profession?” (Machi Sato, Fumiko Konno) (Thailand), 2012 年 6 月 23-25 日.
2. 教育システム情報学会第 37 回全国大会 (千葉工業大学) 「IMPRESSION による授業実施結果を再利用可能な授業計画立案システムの提案」(湯峯晃平・今野文子ら), 教育システム情報学会第 37 回全国大会講演論文集, 92-93 頁, 2012 年 8 月 22-24 日.
3. 教育システム情報学会第 5 回研究会 (東北大学) 「成長型教授設計プロセスモデルのための授業計画と授業実施結果の再利用が可能な対話型教授システムの開発」(湯峯晃平・今野文子ら), *JSiSE Research Report* 27 (5), 29-36 頁, 2013 年 1 月 12 日.
4. 教育システム情報学会 2012 年度特集研究会 (山口大学) 「第二外国語としての中国語ブレンディッドラーニングのための e ラーニング教材設計指針の提案」(趙秀敏・富田昇・今野文子ら), *JSiSE Research Report* 27 (7), 205-212 頁, 2013 年 3 月 16 日.

〔各種活動〕

1. 進路講演会「あをくも講座」(秋田県立横手高等学校), 講師, 2012 年 8 月 1 日.
2. PD プログラム「学びを促す学習コミュニティの創造と運営」, 話題提供, 2012 年 8 月 22 日.
3. 第 16 回 Q-place workshop for workshop vol.3 「FD・SD プログラムの“ズレ”を活かそう!」, ゲストスピーカー (田中岳・小菜辰郎・佐藤万知・今野文子・立石慎治) (九州大学), 2012 年 10 月 16 日.
4. 「第 23 回教育システム若手の会」, 会場幹事, 2012 年 11 月 22-24 日.
5. 東北大学 専門性開発プログラム動画配信サイト PDPonline, 設計・開発担当者.
6. 東北大学 新任教員プログラム (NFP), プログラム担当者 (佐藤万知・今野文子).
7. 東北大学 大学職員能力開発プログラム (SDP), プログラム担当者 (杉本和弘・立石慎治・今野文子).

教育関係共同利用拠点
「国際連携を活用した大学教育力開発の支援拠点」

2012年度 教育関係共同利用拠点事業報告書

Joint Educational Development Center Project Report 2012

2012年7月16日 発行

編 者 東北大学高等教育開発推進センター 大学教育支援センター
発行所

Center for Professional Development
in Center for the Advancement of Higher Education
Tohoku University

〒980-8576 仙台市青葉区川内 41

TEL : (022)-795-4471

E-mail : cpd_office@he.tohoku.ac.jp

印刷所 北日本印刷株式会社

〒984-0064 仙台市若林区石垣町 35 番 6